

宮城県文化財調査報告書第187集

名生館遺跡ほか

平成 13 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序 文

近年、高度情報化社会や少子・高齢化の進行など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。このような中、「地方の時代」と呼ばれるように、地域住民の間で身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みなどへの気運が急速に高まってきています。

しかし一方では、道路建設や大規模なほ場整備をはじめ、都市化の波が地方にも押し寄せ、宅地造成や住宅建築などの生活関連の各種開発事業が年を追うごとに激化する中で、文化財は破壊・消滅の危機にさらされることが多くなってきております。特に、土地との結びつきが強い埋蔵文化財は、常に各種の開発によって破壊されるおそれがあることから、当教育委員会は関係開発機関との十分な協議を重ねるなど、貴重な埋蔵文化財を積極的に保護し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は、開発関係機関などの間で調整した結果、調査に至ったもののうち、平成12年度に当教育委員会が国庫補助金を得て本発掘調査及び確認調査を実施した名生館遺跡他2遺跡と前年度調査した1遺跡の成果を収録したものであります。この成果が県民の多くの皆様や各地の研究者に広く活用され、それぞれの地域の歴史の解明と文化財保護の理解に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、各遺跡の保存にご理解を示された開発機関の方々をはじめ、調査にあたり多大なご協力をいただきました関係市町村教育委員会に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成13年3月

宮城県教育委員会

教育長 柿崎征英

平成12年度発掘調査の概要

宮城県教育委員会が平成12年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金(総事業費6,100千円、補助率1/2)を得て実施した発掘調査は5ヶ所、分布調査地域は3町である。

名生館遺跡は古川市北西部、東大崎の台地上に立地している。平成7年度に国指定史跡である名生館官衙遺跡の西側から南側一帯が県営ほ場整備事業計画地内に含まれたのに伴い、平成10年度から発掘調査を進めている。今年度の調査は、昨年度調査した第II工区西側とその北側及び南側の水田・道路敷にかかる確認調査と水路敷にかかる事前調査である。調査の結果、古代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡27棟、井戸跡8基、溝跡166条、土壇389基等の他、近世の窯跡1基が検出された。なお、名生館官衙遺跡に近い北東部の調査区から竪穴住居跡や掘立柱建物跡が数多く発見された。

一本柳遺跡・小沼遺跡は、遠田郡小牛田町南東部、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。一本柳遺跡は宮城県教育委員会が平成7年度から5ヵ年にわたって、鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設に先立って遺跡南側を事前調査した際に、古代から中世にかけての大規模な集落跡・屋敷跡を確認している。一本柳遺跡北側に計画された県営ほ場整備事業に伴い、平成11年度から発掘調査を進めているが、今年度の調査は一本柳遺跡東側の用水路部分・中央部の揚水機部分、小沼遺跡西側の用水路部分の事前調査である。一本柳遺跡では古代の溝跡10条、土壇14基等、小沼遺跡では古代・中世の井戸跡1基、溝跡5条等が発見された。

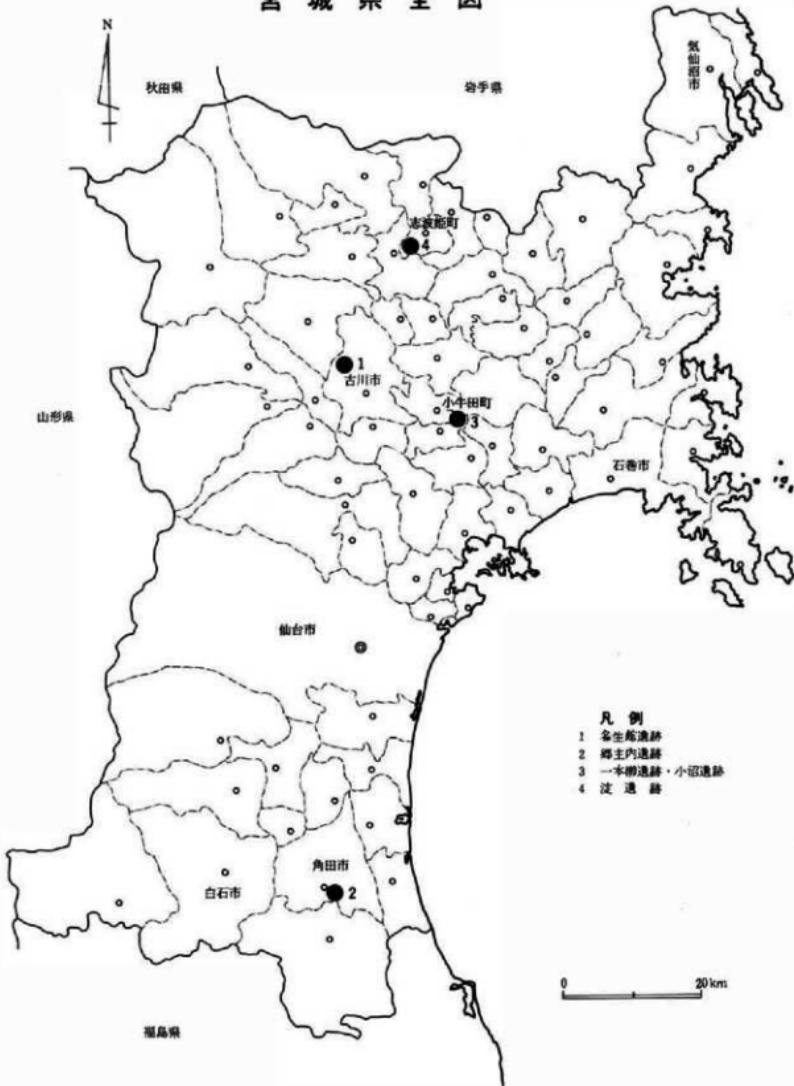
淀遺跡は栗原郡志波姫町北西部、一迫川によって形成された河岸段丘上の北縁部に立地している。この遺跡は当初周知されていなかったが、大規模な宅地造成が計画されていたため、周辺一帯を分布調査したその結果、開発区域で古代の遺物を発見した。このため開発者・町及び県教育委員会の三者で協議し、遺跡の範囲及び構造の分布状況を把握する確認調査を実施した。調査の結果、31軒の竪穴住居跡をはじめ多数の遺構が対象区域全域で検出された。その後、三者で再協議を行い、工事が遺跡に及ぼす影響を最小限にとどめるよう設計・工法・施設配置等を検討することで合意した。

なおこの他、昨年度3月に県営ほ場整備事業に伴って確認調査した角田市郷主内遺跡も併せて収録した。

平成12年度国庫補助事業一覧

No	遺跡名	所在地	調査の種類	開発事業の種類	開発担当部局
1	名生館遺跡	古川市東大崎	事前調査	県営ほ場整備事業	宮城県古川産業振興事務所
2	一本柳遺跡他	遠田郡小牛田町一本柳	事前調査	県営ほ場整備事業	宮城県古川産業振興事務所
3	淀遺跡	栗原郡志波姫町沼崎字道崎	確認調査	宅地造成	JA 栗っこ
4	母子沢遺跡	塩竈市母子沢町	確認調査	宅地造成	個人
5	鶴見館跡	玉造郡岩出山町池月字鶴見	確認調査	農地造成	個人
6	彰堂七館跡地	遠田郡小牛田町他3町	分布調査	土地改良事業	宮城県産業経済部

宮城県全図



目 次

平成12年度調査の概要	
名生館遺跡	1
郷主内遺跡	113
一本柳遺跡・小沼遺跡	139
淀遺跡	151

例 言

1. 本書は宮城県が平成12年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査の報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書にいたる一連の作業は、調査原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発担当部局や地元教育委員会から多大な協力をいただきいた。
4. 本書に使用した土色の記述は、「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973) を参照した。
5. 本書に使用した各遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の1/25,000もしくは1/50,000の地形図を複製して使用した。
6. 本書の図中の座標値は、国家座標第X系による。
7. 本書は調査員全員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

平成12年度発掘調査の概要 阿部博志

名生館遺跡 須田良平・吉野 武・鶴毛英則

郷主内遺跡 岩見和泰

一本柳遺跡・小沼遺跡 引地弘行

淀遺跡 古川一明

8. 発掘調査、遺構・遺物の整理、報告書の作成にあたって、次の機関・個人からご協力、ご教示いただいた。(敬称略)

東京国立博物館・京都国立博物館・東北歴史博物館

安達訓仁・安達俊男・吾妻俊典・井口喜晴・遠藤智一・及川 規・笠原信男・小井川和夫・

阪田宗彦・佐藤正人・佐藤 優・佐藤芳彦・志間泰治・田中則和・原田敏一・藤沼邦彦・藤原二郎・

本田泰貴・松井敏也・水沢幸一・望月幹夫

9. 発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

みよ う だて い せき
名 生 館 遺 跡

目 次

第一章 遺跡の概要

I. 遺跡の位置と地理的環境..... 1

II. 遺跡の調査概要..... 1

III. 周辺の歴史的環境..... 3

第二章 調査の経過と調査方法..... 5

第三章 道路・水路敷の調査

I. 基本層序..... 7

II. 発見された遺構と遺物..... 8

III. 考察..... 70

IV. まとめ..... 77

第四章 大崎窯跡の確認調査

I. 発見された遺構と遺物..... 85

II. 考察..... 93

III. まとめ..... 94

調 査 要 項

遺 蹤 名：名生館遺跡（みょうだいていせき）（宮城県遺跡地名表登載番号27018、遺跡記号 PJ）

大崎窯跡（おおさきかまと）（宮城県遺跡地名表登載番号27206、遺跡記号 PZ）

所 在 地：宮城県古川市大崎字名生館他地内

調査原因：東大崎地区県営ほ場整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

須田良平・吉野 武・鶴毛英則・引地弘行

調査期間：平成12年（2000年）4月10日～7月27日、10月2日～12月13日

調査面積：16,226m²

調査面積：名生館遺跡：10,113m²・大崎窯跡：830m²

調査協力：宮城県古川産業振興事務所、大崎土地改良区、古川市教育委員会、宮城県農業公社

調査参加者：井上のぶ子、遠藤有一、遠藤とく江、小野克巳、笠原きえ子、笠原すみ子、笠原ましま、笠原みよ子、加藤みき子、鹿野喜久子、鹿野しみ子、鹿野まき子、鹿野田雪子、

鹿野田洋子、佐々木栄子、佐々木敬子、佐々木善右エ門、佐々木はつえ、佐々木満智子、

渋谷恵美子、渋谷芳朗、菅原 剛、菅原 隆、曾根 健、曾根カツエ、高橋昭利、

館野信子、門間友勝（五十音順）

整理参加者：木村奈保美、佐藤悦子、柴田とみ子、中島敦子、林 久子、森 幸子

第一章 遺 跡 の 概 要

I. 遺跡の位置と地理的環境

名生館遺跡は大崎平野の北西端にあたる古川市大崎字名生館、城内、名生北館・小野柄堂・上代・小館・弥栄に所在する。遺跡はJR陸羽東線東大崎駅の西側に広がり、奈良・平安時代の陸奥国府多賀城の北西約40kmに位置する。

江合川と鳴瀬川の冲積作用で形成された大崎平野は東西約13km、南北約17kmの広さをもつ。四周は主に丘陵で、東は広瀬丘陵が南北に、南と北は各々三本木丘陵、清滝丘陵が西から東に延びる。西は江合・鳴瀬川が形成した扇状地が段丘化した高位段丘面（通称：青木原台地）が発達し、ゆるやかに傾斜（0.7~0.8°）しながら北西から南東に舌状に延びて冲積面下へ没している。高位段丘は第四紀更新世に噴出した浮石凝灰岩（柳沢凝灰岩）を主体とした堆積物で構成される。冲積地との漸移付近は疊・砂等の河岸段丘堆積物から成り、尾花沢一肘折テフラ層を挟むところもある。遺跡はこうした江合川右岸の高位段丘の南東端に立地する。標高は36~47m、冲積地との比高差は3~15mある（第4図）。

II. 遺跡の調査概要

古代：本遺跡では古代の土器や瓦が出土している。このうち瓦は城内地区と小館地区南東部に集中的に分布する。城内地区的瓦は多賀城創建以前のもの、小館地区的瓦は多賀城創建期のものを主体とする。一方、本遺跡の約1km南にある「伏見」の地名は『和名類聚抄』所載の玉造郡符見郷とみられることから、古代の本遺跡周辺は玉造郡に属していたとみられる。これらのことから本遺跡は『統日本紀』所載の天平の五櫛の1つ「玉造櫛」の擬定地とされ、昭和55年から宮城県多賀城跡調査研究所が遺跡北東部の発掘調査を行い、その後は昭和61年から古川市教育委員会が調査を引き継いでいる（宮城県多賀城跡調査研究所 1981~1986、古川市教育委員会 1987~1996）。

調査の結果、本遺跡は7世紀後葉～9世紀代の官衙跡で、IV期の変遷が考えられている（鈴木 1991）。中核の政庁は第II期（7世紀末～8世紀初頭）が城内地区、第III期（8世紀前半～後半）が小館地区南東部、第IV期（8世紀後半～9世紀）が小館地区西部にあり、遺跡内を移動している。政庁自体の構造も第II・IV期が明らかになっている。官衙の性格は城柵ではなく、第II期が和銅6年（713）建郡の丹取郡家及び前身の評家、第III・IV期が神亀5年（728）前後成立の玉造郡家とみられる。また、第I～III期の造営には東北南部や関東地方からの移民の関与が考えられている（進藤 1990、高橋・村田 1996）。

中世：本遺跡は室町・戦国時代に奥州探題大崎氏の居城「名生城」があった場所でもある。遺跡内には「大崎」「名生館」「城内」「小館」等の小字名や「北館」「内館」「大館」「二の構」等の地名が残っている。これまでの調査で遺跡内の各所から堀跡や溝跡、柱列跡等が、内館地区からは名生城期とみられる多量の炭化米が検出されている。主要な建物の配置等はまだ不明だが、最近の調査では城内地区南部で大型の縦柱建物跡が確認されており、少しづつ明らかになりつつある。



官衙・寺記跡 ■ 空跡 ■ 集落跡 ■ 墓基

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	水門跡	14	辻の井戸跡	28	元・西山城跡(今木村・上野)	31	丸山
2	伏見櫛中跡	15	御所行跡(今木村)	29	丸門遺跡	32	山田山古墳群(今木村)
3	西門跡	16	御所行跡(今木村)	30	西山城跡	33	一
4	御所行跡(今木村)	17	大門遺跡	31	御所行跡(今木村)	34	御所行跡(今木村)
5	御所行跡(今木村)	18	御所行跡(今木村)	32	御所行跡(今木村)	35	御所行跡(今木村)
6	御所行跡(今木村)	19	御所行跡(今木村)	33	御所行跡(今木村)	36	御所行跡(今木村)
7	御所行跡(今木村)	20	御所行跡(今木村)	34	御所行跡(今木村)	37	御所行跡(今木村)
8	御所行跡(今木村)	21	御所行跡(今木村)	35	御所行跡(今木村)	38	御所行跡(今木村)
9	御所行跡(今木村)	22	御所行跡(今木村)	36	御所行跡(今木村)	39	御所行跡(今木村)
10	御所行跡(今木村)	23	御所行跡(今木村)	37	御所行跡(今木村)	40	御所行跡(今木村)
11	御所行跡(今木村)	24	御所行跡(今木村)	38	御所行跡(今木村)	41	御所行跡(今木村)
12	御所行跡(今木村)	25	御所行跡(今木村)	39	御所行跡(今木村)	42	御所行跡(今木村)
13	御所行跡(今木村)	26	御所行跡(今木村)	40	御所行跡(今木村)	43	御所行跡(今木村)
14	御所行跡(今木村)	27	一	41	御所行跡(今木村)	44	御所行跡(今木村)
15	御所行跡(今木村)	28	御所行跡(今木村)	42	御所行跡(今木村)		
16	御所行跡(今木村)	29	御所行跡(今木村)	43	御所行跡(今木村)		
17	御所行跡(今木村)	30	御所行跡(今木村)	44	御所行跡(今木村)		
18	御所行跡(今木村)	31	御所行跡(今木村)				
19	御所行跡(今木村)	32	御所行跡(今木村)				
20	御所行跡(今木村)	33	御所行跡(今木村)				
21	御所行跡(今木村)	34	御所行跡(今木村)				
22	御所行跡(今木村)	35	御所行跡(今木村)				
23	御所行跡(今木村)	36	御所行跡(今木村)				
24	御所行跡(今木村)	37	御所行跡(今木村)				
25	御所行跡(今木村)	38	御所行跡(今木村)				
26	御所行跡(今木村)	39	御所行跡(今木村)				
27	御所行跡(今木村)	40	御所行跡(今木村)				
28	御所行跡(今木村)	41	御所行跡(今木村)				
29	御所行跡(今木村)	42	御所行跡(今木村)				
30	御所行跡(今木村)	43	御所行跡(今木村)				
31	御所行跡(今木村)	44	御所行跡(今木村)				
32	御所行跡(今木村)						
33	御所行跡(今木村)						
34	御所行跡(今木村)						
35	御所行跡(今木村)						
36	御所行跡(今木村)						
37	御所行跡(今木村)						
38	御所行跡(今木村)						
39	御所行跡(今木村)						
40	御所行跡(今木村)						
41	御所行跡(今木村)						
42	御所行跡(今木村)						
43	御所行跡(今木村)						
44	御所行跡(今木村)						

第1図 名生館遺跡と周辺の遺跡

著者：関東支那歴史研究会

ところで、本遺跡の範囲は城内地区を中心に東西約800m、南北約800mと從来はされていた。また、政府跡が確認された城内地区ほかは平成6年に国指定史跡とされ、名生館官衙遺跡として登録されている。だが、本調査に先立つ確認調査(天野1999)や周辺の高幌遺跡(佐藤1996)、上代遺跡(菅原1997)の調査等から、本遺跡の範囲は南と西に広がることが確認された。よって、古代の本遺跡周辺は本遺跡と伏見庵寺跡、高幌・上代遺跡が接しており、相互に強く関わっていたとみられる。

III. 周辺の歴史的環境

本遺跡が官衙として機能した時代、特に7世紀～8世紀前半を中心に周辺の様子を述べる。この時代は律令国家によって大崎地方に建評・郡が行われ、城柵や官衙が多数造営された時代である。また、こうした建評・郡や造営には東北南部や関東地方からの大規模な移民の開拓が考えられている。

この頃の本遺跡周辺の遺跡を城柵官衙とその関連遺跡、窯跡、墳墓の順にみてみる。城柵官衙とその関連遺跡はすこぶる多い。まず、本遺跡南1kmに伏見庵寺がある。金堂跡とみられる乱石積み基壇が確認され、周辺から本遺跡第II期郡庁院と同形、同類の瓦や多賀城跡政府第I期の瓦が出土しており、名生館官衙の付属寺院とみられる(佐々木1971、進藤1990)。また、本遺跡南西4kmに色麻柵跡推定地の城生柵跡と付属寺院の菜切谷庵寺跡があり、さらに西には賀美郡家跡の東山遺跡がある。

一方、本遺跡の東5kmには城柵で最大級の宮沢遺跡(玉造柵跡推定地)があり、その南東には付属寺院とみられる三輪田遺跡が隣接する。さらに東の小丘陵と裾部には両遺跡の造営に関わった集落とみられる権現山遺跡がある。権現山遺跡は三辺に大溝と柵を巡らし、南を東流する川に接続させた環濠集落とみられる。内部は掘立柱建物を主体とし、それらが柵や溝でブロック毎に区画されている。

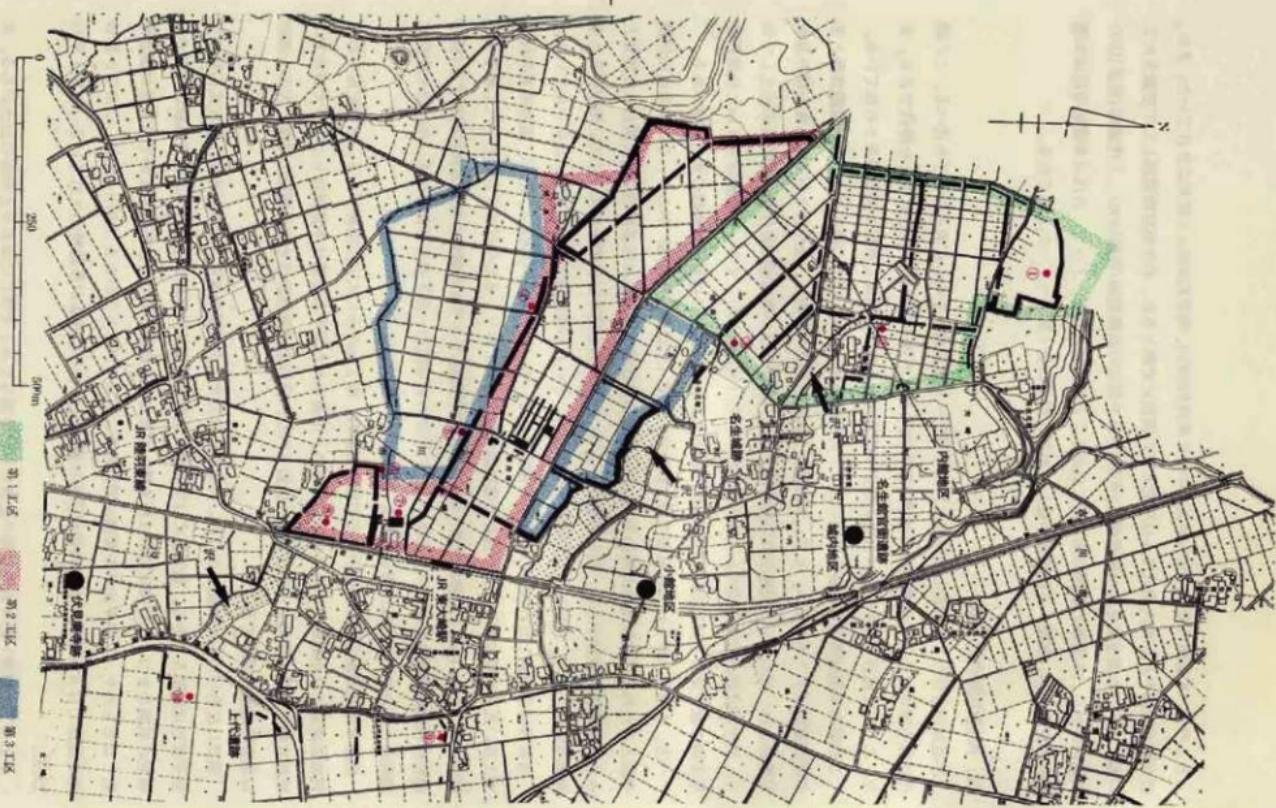
官衙跡は本遺跡と宮沢遺跡の中間でも確認されている(杉の下・小寺遺跡)。近年、遺跡南東端付近で大型の瓦葺き総柱建物を含む複数の建物跡が検出されており、その年代は8世紀前半に遡る可能性がある。また、杉の下遺跡の南東1kmにある南小林遺跡でも今年の調査で東西方向に直列する5棟の総柱建物跡が確認されており、郡家クラスの官衙の倉庫院の一部と考えられている。年代は8世紀初頭前後とみられる(古川市教育委員会2001)。

窯跡では本遺跡の南10kmの所に日の出山窯跡群、東2kmの所に大吉山窯跡がある。8世紀前半の多賀城創建期には大崎地方の各所に窯が営まれ、生産された瓦や須恵器は多賀城はもとより大崎地方の城柵官衙・寺院・墳墓・一部の集落へ供給された。日の出山窯跡群はその最盛期の段階、大吉山窯跡は最後の段階の窯跡である。

墳墓は江合川の左岸に認められる。群集墳には日光山古墳群や塚原古墳群がある。横穴式石室の玄室平面形は胴張りである。横穴墓には川北横穴墓群や小野横穴墓群がある。川北横穴墓群は県内でも有数の規模をもつ。小野横穴墓群は朽木橋・羽黒など6支群からなり、朽木橋支群では玄室が複室構造となるものや、玄室平面形の類例が関東地方に求められるものがある(古川1996)。このほか新谷地北遺跡では8世紀前半から10世紀前半以降にかけての木棺墓が多数検出されている(木皿・早川1992)。

ところで、建評・郡や城柵官衙の造営に移民の開拓をみる背景には関東系土師器の出土がある。大

第2図 運転用意の様子



崎地方で関東系土師器が出土する遺跡数のピークは7世紀後葉～8世紀前半で、名生館周辺でも本遺跡をはじめ集落跡の上代遺跡、墳墓の日光山・塚原古墳群・川北・小野横穴墓群・新谷地北遺跡、官衙・寺院跡の南小林・宮沢・三輪田遺跡、それらの造営に関わる權現山遺跡などで出土している。權現山遺跡では7世紀後葉～8世紀前葉の土師器のうち約7割が関東系との指摘もある(高橋・村田 1996)。出土地が墳墓を除くと官衙・寺院跡やその周辺であること、大崎地方でのピークが建評・郡や城柵官衙の造営期と一致することからすると、移民はそれらに深く関与したと考えられる(村田 1995)。

このように大崎地方には7世紀後葉～8世紀前半の城柵官衙跡・寺院跡・生産遺跡などが多く認められる。また、それらのなかには関東系土師器が出土する遺跡もある。冒頭で述べたようにこの時代には律令国家による建評・郡が行われた。それは当地方における律令制的支配の成立と浸透を意味する。とすれば、上記のような遺跡はその実態を知るうえで重要である。そして、城柵官衙跡のなかでも創建が早い本遺跡は極めて重要な遺跡といえる。

第二章 調査の経過と調査方法

本調査は古川市東大崎地区県営ほ場整備事業に伴うものである。この事業に伴う発掘調査は平成8年度の試掘調査をへて、一昨年度から本調査に入り、今年で3年目となる。調査に至る経過と昨年度、一昨年度の調査成果はすでに報告書にまとめられている(天野 1999、村田ほか 2000)。よって、それらの内容についてはここでは省略する。

今年度は第II工区と第III工区北の調査である(第2・3図)。第II工区については昨年度にJR東大崎駅周辺の調査を終了しており、今年はその南側と西側が調査部分となる。調査対象は道路・水路敷で、水路敷は掘削が遺構面に及ぶため事前調査、道路敷は未舗装で掘削も遺構面に及ばないので確認調査に留めた。調査区は細長く、かつ広範囲であるため、昨年度までの調査区A～M、N(1～3)、O(1)区に引き続き、N(4・5)、O(2)、P～V区に分割し、さらに畦群などを境にP-1区、P-2区などのように細分した。

ところで、平成8年度の試掘調査の際にJR東大崎駅の約200m西方に近世の窯道具や製品が散乱する地点が確認された。道路・水路敷の調査に直接の関わりはないが、付近に窯跡(大崎窯跡)の存在が予想されたので、昨年度に散乱地点を中心に調査区を設定し、窯跡の位置や規模を確認するための調査を行った。しかし、調査区の制約もあり、調査は不十分であったとの認識から、範囲を広げて今年度再び確認調査を行うことにした。

調査は耕作等との関係で4月10日～7月27日(第II工区と窯跡部分)と、10月2日～12月13日(第III工区北)の2度に分けて行った。検出した遺構は国家座標軸を基準線として3×3グリッドを設定し、1/20または1/100平面図、1/20断面図を作成した。同時に35mm、6×7モノクロ・カラーリバーサルによる写真記録も行った。以上の方法で調査を進め、12月13日に今年度の調査を終了した。道路・水路敷の調査対象面積は16226m²、発掘面積は10113m²、窯跡部分の発掘面積は827m²であった。



第3図 調査区の位置

第三章 道路・水路敷の調査

I. 基本層序 (第4図)

本遺跡の層序は地点によって層厚が異なるものの、基本的に I 層：耕作土、II 層：旧表土（黒ボク土）、III～VI 层：ローム層、VII 层：岩盤に大別される。以下、各層の特徴を記す。

I 层：耕作土である。部分的に現代の盛土も含まれる。

II 层：黒ボク土（旧表土）である。III 层との境界に部分的に漸移層が認められる。

III 层：尾花沢-肘折テフラ層（肘折軽石層）で、遺跡の北西部に主に認められる。

IV 层：ソフト・ローム層 (10YR5/4 にぼい黄褐色) で、場所によってしまりのない同色砂質シルト・粘土または白色粘土となる。

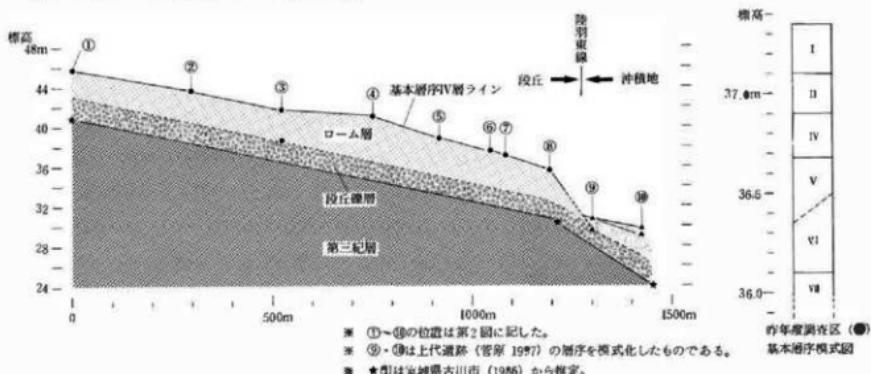
V 层：ソフト・ローム層 (10YR5/4 にぼい黄褐色)。旧石器時代文化層。IV 层よりしまりがある。

VI 层：ハード・ローム層 (10YR6/4 にぼい黄褐色)。下位は灰白色 (10YR8/2) 粘土になるところもある。

VII 层：凝灰岩層 (10YR6/6 明黄褐色)。

今回の調査対象である第II工区、第III工区北ではIII層は認められず、I・II・IV～VII層の層序となる。ただし、本工区内では昭和の初め頃から度々大規模な開田が行なわれており、その際にIV層付近まで破壊されたところが多い。このためII層の分布範囲は厳密には不明である。

遺構の検出面は基本的にIV層である。IV層は上記のようにソフト・ローム層で、検出面は場所によつてはしまりのない同色砂質シルト・粘土または白色粘土となっている。IV層検出時の標高を比較してみると（第4図地点①～⑩）、遺跡北端の地点①から緩やかに南東に向かって傾斜し、JR 陸羽東線付近の地点⑨から地点⑩に向かって没している。これをみるとIV層も削平は受けているが、そのあたり方はおむね遺跡が立地する高位段丘面の地形を反映しているといえる。なお、以下の記述で地山と記した場合にはIV層以下のロームをさす。



第4図 基本層序

II. 発見された遺構と遺物

道路・水路敷で発見した遺構は堀跡2、掘立柱建物跡27、竪穴住居跡10、井戸跡8、溝跡166、土壙389などである。開田時の削平のため全体に残存状況はよくない。遺物は土師器、須恵器を中心に縄文・弥生土器、鉄製品、土製品、石製品が出土しており、総量は整理用平箱で28箱ある。

遺構は調査区全体に認められる。その分布はQ-1区、V-4区から東側で濃密で、特に官衙に近い北側のU・V区では掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが多数検出された。東側では遺物も奈良時代を中心とした土師器や須恵器が多く出土している。一方、西側は全体的に遺構が希薄である。溝跡や土壙は比較的検出されたが、掘立柱建物跡や井戸跡は少なく、竪穴住居跡も検出されなかった。遺物も縄文・弥生土器、土師器、須恵器が極少量出土したのみである。ただ、R・S・T区には落し穴とみられる土壙もある。

以下、調査区順に記述するが、調査区の幅に制限があり、遺構の全容がわかるものが少ないため、調査区ごとの特徴と主要な遺構について記述する。他の遺構の属性は第1表(78~84頁)に示した。

1. N区(第5図)

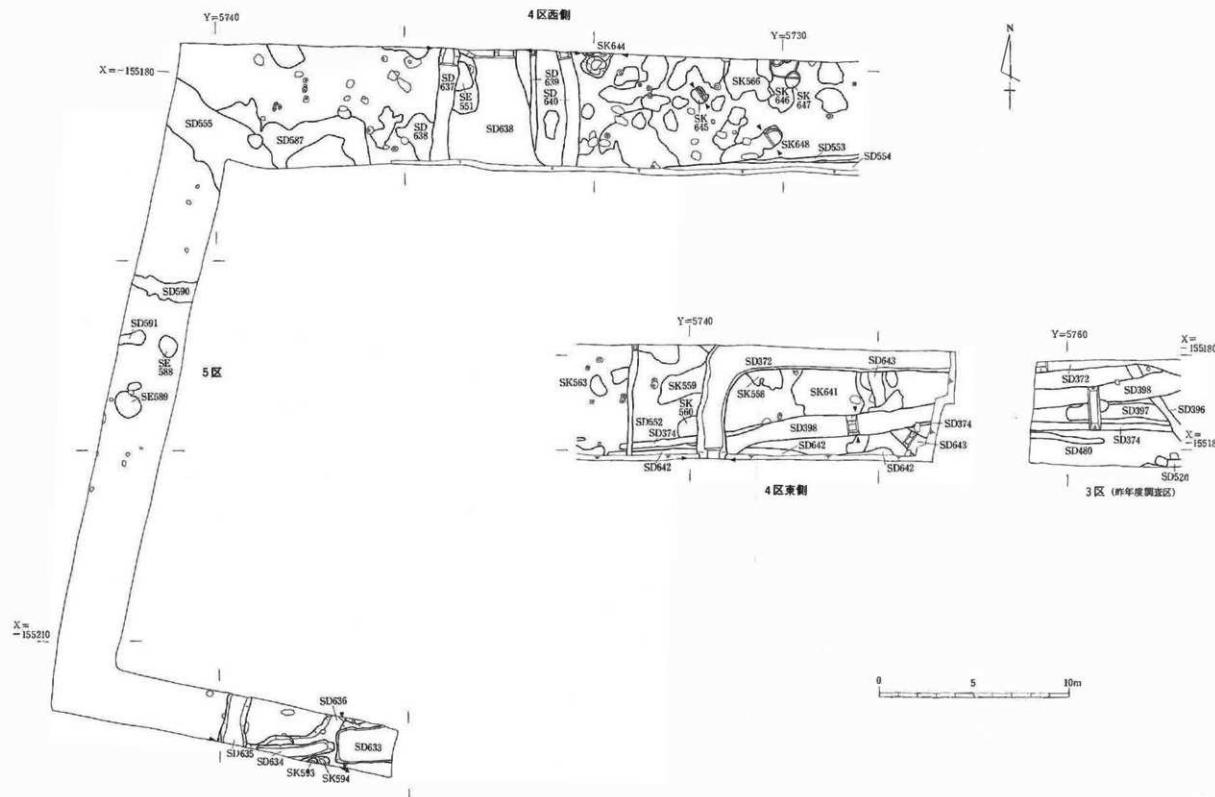
第II工区南東部の調査区である。昨年調査の1~3区に続き、今年は4・5区を調査した。4区は3区西側の東西調査区、5区は4区西端から南のL字状の調査区で、5区南端の東西部分以外は確認調査である。遺構は井戸跡3、溝跡20、土壙44を確認した。その密度は東側が濃密、西側ほど希薄で、5区南西部では遺構は確認されなかった。

(1) 井戸跡(第5図)

4区西側で1基(SE551)、5区南北部分の中央部で2基(SE588・589)確認した。これらは掘下げていないため、構造や深さは不明である。SE551はSD637より古い。平面形は隅丸方形で、規模は東西が1.1m以上、南北が1.5mである。検出面の堆積土は灰白色火山灰をブロック状に含む黒褐色シルトである。SE588・589の平面形は横円形で、規模は長軸1.2~1.5m、短軸1.1~1.2mである。検出面の堆積土は黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 溝跡(第5・6図)

20条確認した。5区南西部を除く調査区全体に分布する。4区東側のSD372・374・398(373)は、昨年調査の3区からの延長である。溝跡は東西方向または南北方向のものが多いが、北西から南東へ延びるもの(SD555・643)や弯曲するもの(SD587)もある。規模は①上幅1.5mを越えるのもの(SD372・555・633・636・638)、②上幅0.5~1.5mのもの(SD398・590・591・634・635・637・640・643)、③上幅0.5m未満のもの(SD374・552・553・554・639・642)、④不明(SD587)があり、中・小規模な溝が主体である。断面形は一部を掘り下げたものについてはU字形や皿状が多いが、箱形や逆台形のものもある。堆積土はSD398・633・634・639・643が黒褐色砂質シルトや粘土の人为的な埋土で、その他は黒褐色シルト主体の自然堆積である。遺物は、後述する溝跡以外からは出土していない。



第5図 N-4・5区平面図

【SD372・374・398(373)溝跡】

いずれも昨年3区で検出した中世の東西溝跡で、延長を4区東側で確認した。SD372は調査区東端から西に12mの地点で南に折れ、そのまま調査区外に延びる。17.0m分を検出した。3区からの総長は65.8mである。SD374・398・642・643、SK558・559・560・641より新しい。SD374は調査区東端から西に17mの地点で途切れる。3区からの総長は61.2mである。SD372・398・552より古く、SK560より新しい。SD398(373)は調査区東端から西に11.5mの地点でSD372に切られる。SD372の西側では確認されなかった。この地点で途切れるか、SD372と同様に南に折れるものと思われる。3区からの総長は43.7mである。SD372より古く、SD374・642・643、SK641より新しい。

これらの溝跡の規模や断面形、堆積土の特徴は昨年と同様である。遺物はSD372の堆積土から土師器壺、須恵器壺・甕、瓦、SD398の堆積土から土師器甕、須恵器壺・甕が少量出土している。

【SD633溝跡】

5区東西部分の東側で確認した東西溝跡で3.3m分を検出した。SD636より古い。上幅は2.0m、下幅は1.6m、深さは50cmある。底面は平坦で、断面形は箱形である。方向はE-8°-Nである。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトで、2層に地山ブロックが多い。人為的な埋土である。

遺物は埋土から須恵器甕が極少量出土している。

【SD634溝跡】

5区東西部分の東側で確認した東西溝跡で4.6m分を検出した。SD636、SK593・594・1157より古い。上幅は0.8m、下幅は0.5m、深さは50cmある。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。方向はE-8°-Nである。堆積土は8層に分けられる。地山ブロックを含む黒色や黒褐色の粘土・砂などで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SD635溝跡】

5区東西部分の東側で確認した南北溝跡で2.6m分を検出した。SD636より新しい。上幅は1.1~1.5m、下幅は0.7~1.1m、深さは40cmある。断面形は逆台形である。方向はN-10°-Eである。堆積土は自然堆積で5層に分けられる。3・5層は地山小ブロックを含む黒褐色粘土で崩落土である。2・4層にはぶい黄褐色粘土で4層は砂を互層に含む。1層は黒褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

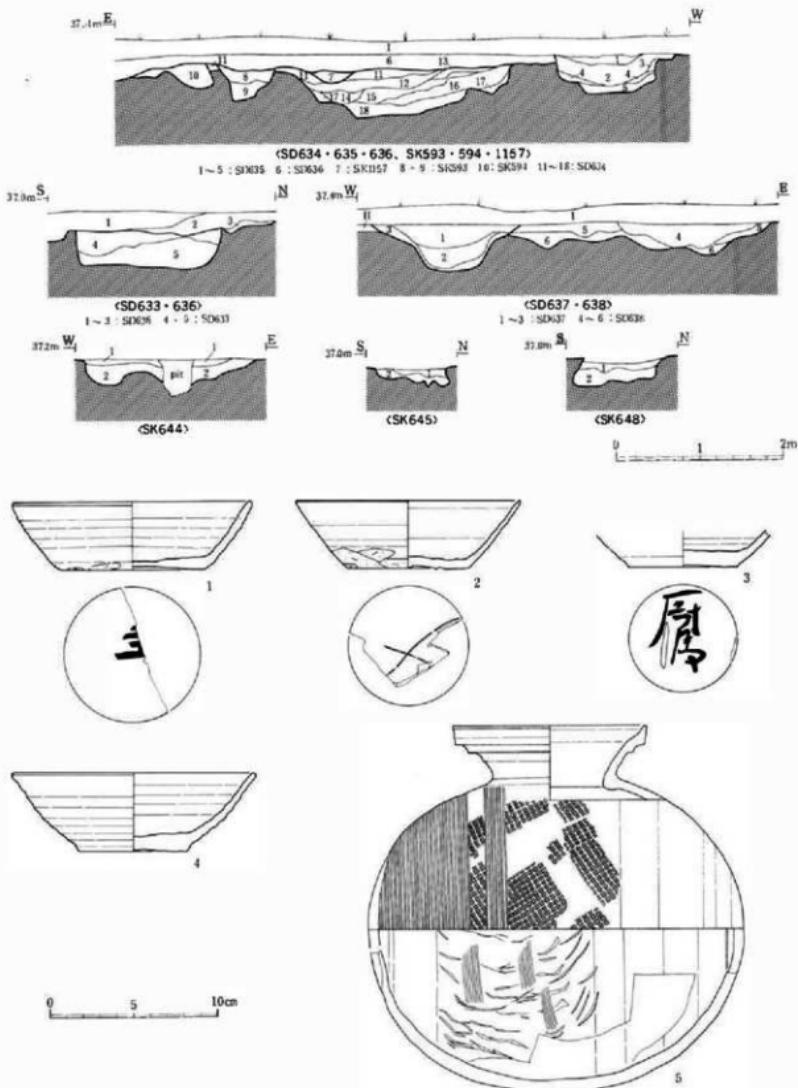
【SD636溝跡】

5区東西部分の東側で確認した東西溝跡である。南側の肩は検出されていない。長さ8.7m分を検出した。SD635より古く、SD633・634、SK593・594・1157より新しい。上幅は3.7m以上、下幅は2.4m、深さは30cmある。断面形は皿状と思われる。方向はE-8°-Nである。堆積土は3層に分けられる。3層は地山ブロックを含む黒褐色粘土で、人為的な埋土である。2層は黒褐色粘土、1層は黒褐色シルト質粘土である。

遺物は堆積土から非クロロ調整の土師器甕と須恵器甕が極少量出土している。

【SD637溝跡】

4区の西側で確認した南北溝跡である。P-2区検出のSD632とは一連の溝とみられる。4区で6.2



No.	施設名	出土遺物・附註	特徴	口径	底径	脚跡	高さ	年代表
1	泊施設・坑	SD637・堆積土	外壁：細粒、手切り・手打ちケズリ 底部に傷跡「口」	(14.4)	(6.2)	4.1	2/5	8-1, 10-6
2	泊施設・坑	SD638・堆積土	外壁：ヘラ切り・手打ちケズリ 底部に傷痕の×紋の痕跡	(13.4)	(7.2)	4.1	1/2	8-2, 10-7
3	泊施設・坑	SD638・堆積土	外壁：ヘタ切り一ナタ 底部に魚骨「網口」と焼成跡の一式の跡跡	6.5	—	—	—	14-8
4	泊施設・坑	SD638・堆積土	外壁：ヘタ切り 異間に焼成痕跡	(14.6)	(6.5)	4.8	1/2	—
5	泊施設・傾壺	SD641・傾壺	外壁：底子クリヤー・カロ日 内壁：厚文合・瓦底一ナテ・ヨコナデ	11.6	—	—	122.17	8-4

第6図 N-4・5区溝跡、土壤断面図及び出土遺物

m 分、P-2 区で9.5m 分を検出しており、総長は70m 以上と思われる。SE551、SD638 より新しい。上幅は0.7~1.0m、下幅は0.6m、深さは50cm ある。断面形は U 字形である。方向は N-6°-E である。堆積土は3層に分けられる。3層が灰色粘土、2層が暗灰色粘土、1層が砂粒や炭化物を少し含む黒褐色シルトで、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦が少量出土している。第6図1は回転糸切りののち手持ちヘラケズリ調整された須恵器坏である。底部に判読できないが墨書きが認められる。

【SD638溝跡】

4区の西側で確認した南北溝跡で6.4m 分を検出した。堆積土は南側がオーバフロー気味に広がっており、溝の末端部と思われる。SD637より古く、SD639より新しい。上幅は2.3~7.0m、下幅は2.0m、深さは25cm ある。断面形は皿状である。方向は N-7°-W である。堆積土は3層に分けられる。3層が褐色シルト質粘土、2層が黒褐色砂質シルト、1層が黒褐色シルトで、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕が出土している。第6図2~4はヘラ切りの須恵器坏で、切り離し後に2は手持ちヘラケズリ調整、3・4はナデ調整が施されている。また、2の底部には×状の刻書(焼成前)、3の底部には「蔚口」の墨書きが認められる。

(3) 土壌 (第5・6図)

43基確認した。4区に多く、特に中央部に集中する。平面形は全体に形が整わないが、①長軸0.8~1.5m の橿円形のもの(SK563・645・647など)、②長さ2.0~4.0m、幅1.0m 前後の溝状のもの(SK568・648など)、③長さ3.0m 以上、幅2.0m 以上と大型で不整形のもの(SK566・641・644・646など)があり、①と③が主体をしめる。一部を掘り下げたものの断面形は皿状(SK644)や一方の壁がオーバーハングする袋状(SK645・648)で、底面は凸凹している。深さは15~35cm である。堆積土はいずれも2層は砂や地山ブロックを多く含む黄灰・オリーブ黒色シルト、1層が砂粒を含む黒褐色シルトで、人为的に埋め戻されている。掘り下げなかったものも検出面の堆積土は、上記の黒褐色シルトまたは黄灰・オリーブ黒色シルトであり、一様である。

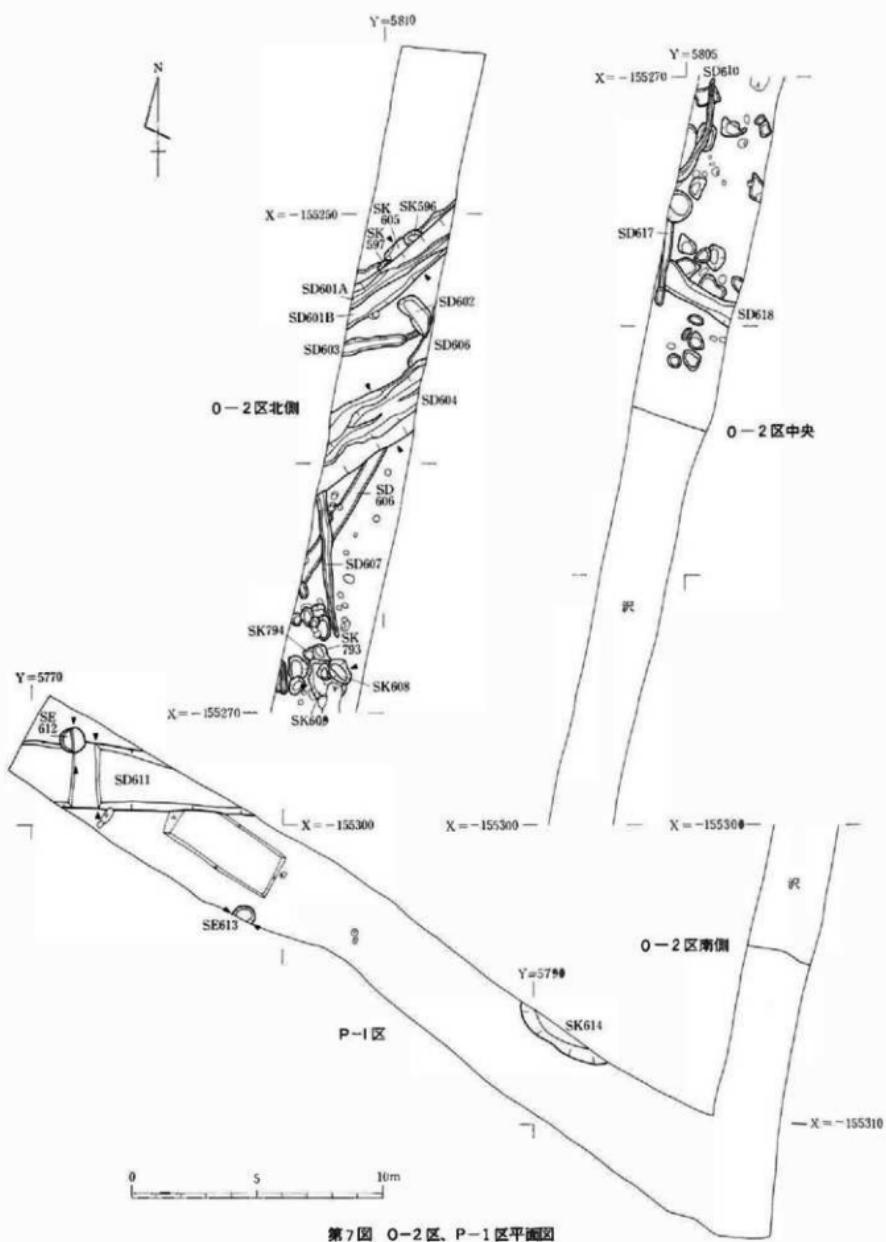
遺物はSK641の検出面から土師器の破片と須恵器の横瓶(第6図5)が出土している。

2. O区(第7図)

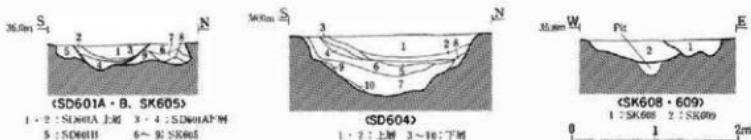
第II工区南東部の調査区である。昨年調査したO区(O-1区とする)に続き、今年は2区を調査した。2区は1区の南側の南北調査区である。調査区南側には東から沢が入っている。この沢はこれまで中世の名生城の掘跡とみてきたが、地形や隣接するN・P区で延長が確認されないことなどから沢と思われる。遺構は調査区北側で、溝跡10、土壤37を確認した。

(1) 溝跡(第7・8図)

10条確認した。調査区北側全体に分布する。おおむね東西溝と南北溝とに分けられるが、その方向



第7図 O-2区、P-1区平面図



第8図 0-2区溝跡、土壤断面図

は真北や真東に対して大きくふれるものが多い。規模は①上幅1.5mを越えるもの(SD604)、②上幅0.5~1.5mのもの(SD601A・B・602・606・618)、③上幅0.5m未溝のもの(SD603・607・610・617)があり、中・小規模な溝が主体である。また、①・②は調査区北端近く、③はその南に多い。断面形はU字形、堆積土は黒褐色砂質シルトのものが主体をしめる。後述する溝跡以外で遺物はSD607の堆積土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SD601A・B溝跡】

北端近くで確認した溝跡で5.0m分を検出した。2時期(B→A)ある。SK595・596・597・605より新しい。Aは上幅0.6~1.1m、下幅は0.2~0.4mで、深さは25cmある。断面形はU字形で、方向はE-31°-Nである。堆積土は人為的な埋土の上層(1・2層)と自然堆積の下層(3・4層)に大別される。下層は砂を少し含む黒褐・暗褐色粘土である。上層は地山ブロックを多く含む極暗褐色砂質シルトや褐灰色の粘土質シルトである。

Bは北側がAに焼されている。残存する上幅は0.7mである。下幅は0.5m、深さは20cmである。断面形はU字形とみられる。方向はE-32°-Nである。堆積土は黒褐色の砂質シルトである。

遺物は、Aの上層から非ロクロ調整の土師器甕・須恵器壺・甕が少量出土している。

【SD604溝跡】

北端近くで確認した溝跡で4.4m分を検出した。SD606・607より新しい。上幅は2.3m、下幅は0.7mで、深さは75cmである。断面形はU字形で、方向はE-32°-Nである。堆積土は人為的な埋土の上層(1・2層)と自然堆積の下層(3~10層)に大別される。下層は黒色や黒褐色の砂・粘土を主体とする。上層は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。

遺物は下層でロクロ調整の土師器壺・須恵器壺・高台壺・蓋・甕が、上層ではロクロ調整の土師器壺・非ロクロ調整の土師器壺・甕のほか、須恵器壺・甕・砥石が出土している。

(2) 土壤(第7・8図)

37基確認した。調査区北側の南部から北にかけて集中する。平面形はやや不整な梢円形が多い。規模は①長軸2.0~1.0mのもの(SK608・609・616など)と、②長軸1.0m以下のもの(SK1015・1016など)があり、①は少なく、②が主体をしめる。断面形は一様に皿状で、底面がやや凸凹したものもある。深さは20cmほどが多い。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色粘土・極暗褐色粘土質シルトのものが主体である。遺物は出土していない。

【SK608土壤】

調査区北側の南部で確認した。SK609・793より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が1.1

m、短軸が0.9mで、深さは20cmである。断面形は皿状で、堆積土は地山ブロックを多く含む極暗褐色粘土質シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK609 土壌】

調査区北側の南部で確認した。SK608より古く、SK793・794より新しい。平面形はやや不整な梢円形である。規模は長軸が1.9m、短軸が1.4mで、深さは25cmである。断面形は皿状で、堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土で、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

3. P 区 (第7・9図)

第II工区南東部の調査区である。O-2区南端からN-5区東西部分東端に至る調査区で、水路で2区に細分される。遺構は堀跡1、掘立柱建物跡4、井戸跡2、溝跡7、土壌5を確認した。全体に1区西側から2区東側にかけて遺構が集中しており、その他の部分ではまばらである。

(1) 堀跡 (第9・10図)

【SA630堀跡】

2区東側の西よりで確認した南北1間以上一本柱列による堀跡である。柱穴は2ヵ所で検出しておらず、ともに柱材を確認している。堀跡の規模は2.3m以上で、方向はN-3°-Eである。柱材は径12cmの丸太を2つに割ったもので、丸いほうの面を縦方向に削って整形している。柱穴は梢円形で、長軸が30cm前後、短軸が20cm前後であり、深さは深いもので25cmある。埋土は地山小ブロックを含む黒色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 掘立柱建物跡 (第9・10図)

4棟確認した。SB631以外は2区東側のSA630堀跡の東に集中する。調査区の制限から全容がわかるものは少ないが、いずれも柱穴が小さく、小規模な建物が多いと思われる。建物の方向は①真北のもの(SB625・631)、②北に対し13°東にふれるもの(SB627)、③19°西にふれるもの(SB629)がある。

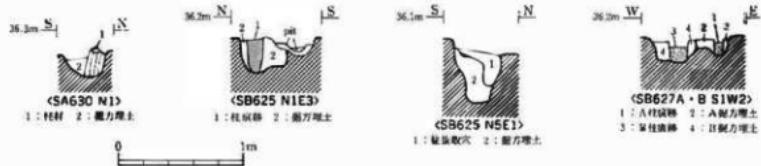
【SB625建物跡】

2区東側で確認した桁行4間、梁行2間の南北棟である。SK622より古い。柱穴は7ヵ所で検出しておらず、6ヵ所で径15cm前後の柱痕跡、1ヵ所で柱抜取穴を確認した。平面規模は桁行が東側柱列で総長7.0m、柱間寸法は南から1.4m、1.8m、2.3m、(1.6)m、梁行は北妻で総長4.2m、柱間寸法は西から2.1m、(2.1)mである。方向は東側柱列で真北である。柱穴は隅丸長方形で、長辺が50cm前後、短辺が45cm前後であり、深さは深いもので52cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色または黒褐色の砂質シルトである。

遺物は柱穴埋土から非クロロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SB627A・B建物跡】

2区東側で確認した東西2間以上、南北1間以上の建物跡で、2時期(B→A)ある。SD621より古



第10図 P区塙・建物跡柱穴断面図

い。Aの柱穴は4ヵ所で検出しており、すべてで径15cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が南側柱列で総長4.4m以上、柱間寸法は西から2.2m等間、南北は西側柱列で総長1.8m以上である。方向は南側柱列でE-13°-Sである。柱穴は隅丸長方形で、長辺が25cm前後、短軸が20cm前後であり、深さは深いもので15cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

Bの柱穴は4ヵ所で検出しており、3ヵ所で径15cm前後の柱痕跡を確認している。平面規模は東西が南側柱列で総長4.5m以上、柱間寸法は西から2.3m、2.2m、南北は西側柱列で総長1.9m以上である。方向は南側柱列でE-13°-Sである。柱穴は隅丸長方形で、長辺が30cm前後、短軸が25cm前後であり、深さは深いもので20cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色のシルトである。

遺物はAの柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕、Bの柱穴埋土から土師器の破片が極少量出土している。

(3) 井戸跡 (第7・11図)

1区で2基確認した(SE612・613)。ともに平面形が円形の素掘りの井戸跡である。SE612はSD611より新しい。規模はSE612が径1.0m、SE613が径0.8mで、深さはSE612が70cm、SE613が60cmである。ともに断面形は箱形で、堆積土は人為的な埋土の上層(SE612の1層、SE613の1・2層)と自然堆積の下層(SE612の2・3層、SE613の3・4層)に大別される。下層は黒色や褐灰色の砂質シルトである。上層は地山ブロックを多量に含む黒色粘土質シルトである。

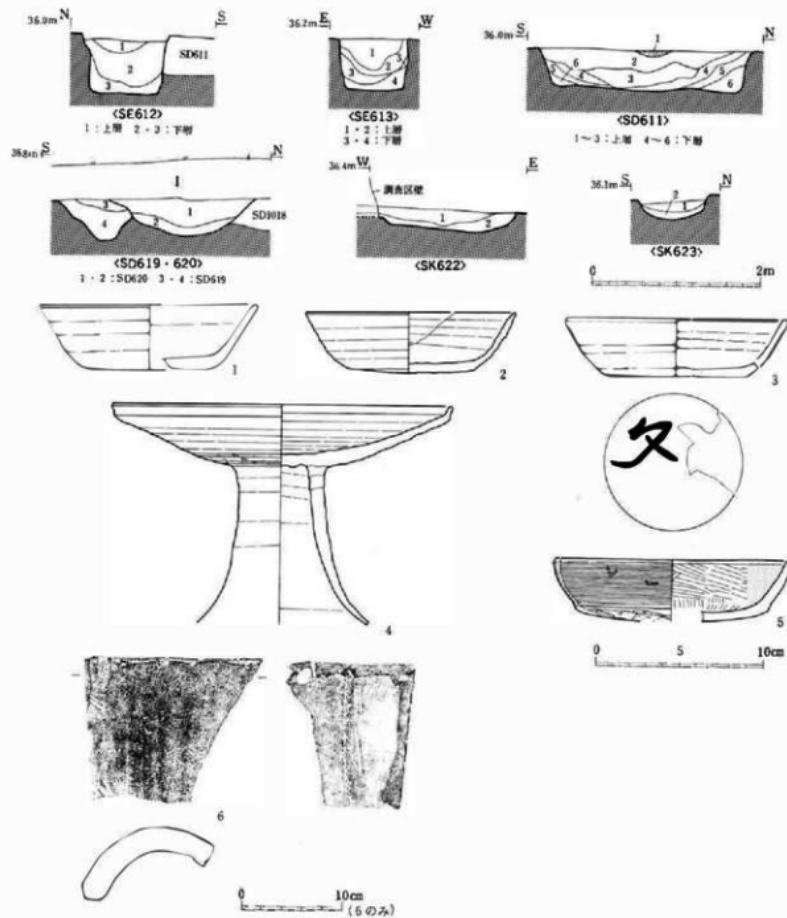
遺物はSE612の上層からロクロ調整の土師器甕、SE613の上層から土師器の破片が極少量出土している。

(4) 溝跡 (第7・9・11図)

7条確認した。このうち2区西側の南北溝SD632は、N-4区検出のSD637と一連の溝とみられる。その他の溝跡は1区西側から2区東側にかけて集中する。SD1018以外は東西溝である。規模は①上幅2.6mのもの(SD611)、②上幅0.5~1.0mのもの(SD619・620・621・632)、③上幅0.5m未満のもの(SD1019)があり、SD1018は不明である。後述する溝跡以外の断面形はU字形で、堆積土は黒色シルトの自然堆積である。また、遺物は出土していない。

[SD611溝跡]

1区西側で確認した溝跡で9.7m分を検出した。SE612より古い。上幅は2.6m、下幅は1.4~2.2m



%	種別	出土遺物・層位	形	口径	底径	高さ	横径	写真回数
1	漆器鉢・片	SD611・下層	外面: ヘラ切りナゲ 全体に火ダスキ	13.0	8.2	3.9	3/5	8-3
2	漆器鉢・片	SD611・上層	外面: ヘラ切りナゲ 距離に墨線(□)	12.4	7.5	3.6	3/4	8-7
3	漆器鉢・片	SD611・上層	外面: ヘラ切りナゲ 内面に墨線(□)	(13.2)	8.3	3.5	1/2	8-8, 10-9
4	漆器鉢・萬葉	SD611・上層	外面: ロクサナゲー・因断ケナギ 内面: ロクロナゲー・工具ナゲ	20.3			5/6	8-5, 6
5	土師器・片	SD619・2層	6形丸底 外面: ヨコナゲー・ヘラケズリ 内面: ヘラケズリ・褐色瓦礫	(14.1)			1/4	8-9
6	丸瓦	SD611・上層	地書き作り 口面: ケヅリ・ナゲ 出面: 布目・ケヅリ(一側) 鋼面: ケヅリ				-5	10-24

第11図 P区井戸・溝跡、土壤断面図及び出土遺物

で、深さは50cmである。断面形は逆台形で、方向はE-2'-Sである。堆積土は上層(1~3層)と下層(4~6層)に大別される。下層は壁の崩落とみられる地山土と黒色砂質シルトの互層である。上

層は1層が灰白色火山灰の1次堆積層、2・3層は黒色や黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。遺物は上・下層ともに出土している。下層では非ロクロ調整の土師器壺、須恵器壺が出土している。須恵器壺にはヘラ切り後ナデ調整のものがある(第11図1)。上層では非ロクロ調整の土師器壺・高壺・壺・櫃、須恵器壺・高台壺・高盤(4)・蓋・壺・壺、瓦(6)が出土している。須恵器壺にはヘラ切り後ナデ調整のものがある(2・3)。また、3の底部には判読できないが、墨書きが認められる。なお、上層の遺物は3層からの出土量が多く、炭化したものの中でも2・4は3層出土である。

【SD619溝跡】

2区東側で確認した溝跡で3.6m分を検出した。SD620より古い。上幅は0.6~0.8m、下幅は0.3~0.4mで、深さは45cmである。断面形はU字形で、方向はE-20°-Nである。堆積土は2層が黒色砂質シルトの自然堆積で、1層は地山ブロックを主体とする淡黄色シルトで人為的な埋土である。

遺物は2層から非ロクロ調整の土師器壺・壺が極少量出土している。土師器壺には口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底の壺がある(第11図5)。

【SD620溝跡】

2区東側で確認した溝跡で4.0m分を検出した。SD619・1018より新しい。上幅は0.5~0.8m、下幅は0.3mで、深さは40cmである。断面形はU字形で、方向はE-18°-Nである。堆積土は2層が黒色砂質シルト、1層が黒色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器壺が極少量出土している。

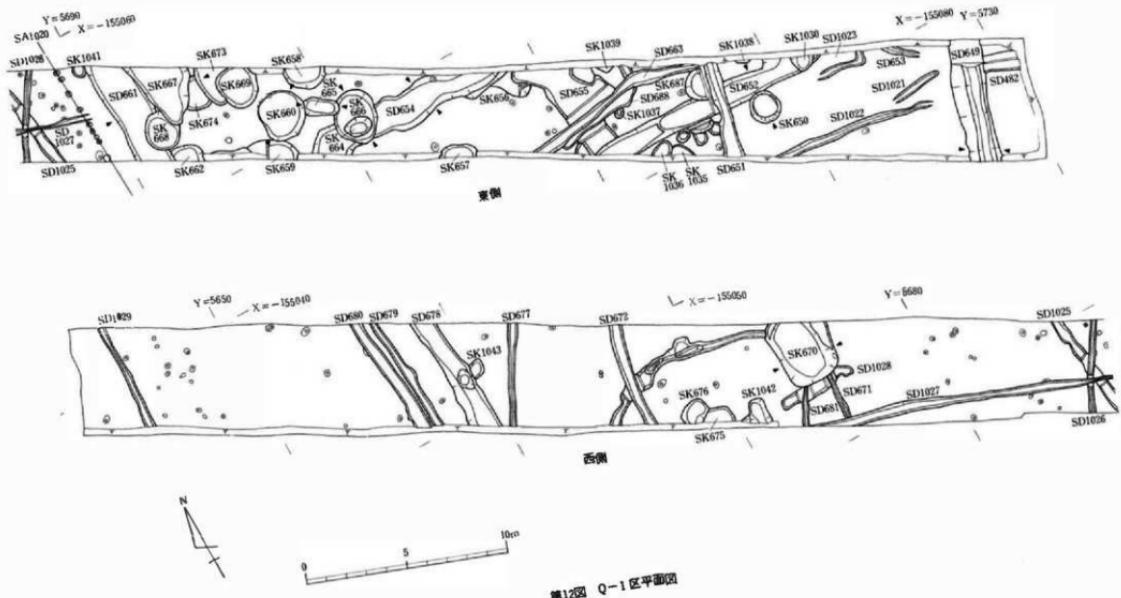
(5) 土壌(第7・9・11図)

5基確認した。1区東側のSK614以外は2区東側に集中する。平面形はすべて橢円形である。規模はSK614が長軸4.1m以上、SK622が長軸1.8m以上と比較的大型だが、その他は長軸0.9m以下と小規模である。断面形はすべて皿状である。深さはSK614が49cmある以外は12~30cmと浅い。堆積土はいずれも自然堆積である。砂の混じる黒色シルトが主体で、底面付近に黄灰色粘土質シルト(SK622)や灰黄色砂(SK623)が堆積するものもある。

遺物はSK622で土師器壺、須恵器壺、SK624で土師器壺、SK626で土師器壺・壺が各々堆積土から極少量出土している。土師器壺はロクロ調整であるが、土師器壺はすべて非ロクロ調整のものである。

4. Q区(第12・15・17図)

第II工区中央部の調査区である。昨年調査したM区西端から第II工区を北東から南西に横断する舗装道路までの約400mの調査区と、西端付近にある住宅の東と北を巡る調査区とからなる。農道や水路で東から9区に細分される。遺構は堀跡1、溝跡44、土壤42を確認した。このうち7割は1区に集中する。また、1区のなかでも中央部付近にあるSD661南北溝跡より東側で遺構が濃密である。一方、2区から西側では遺構の分布が希薄である。また、4区東側と住宅の東と北を巡る6・7区では遺構は確認されなかった。



第12圖 Q-1區平面圖

1区（第12図）

(1) 塚跡（第12図）

【SA1020 塚跡】

調査区中央部で確認した柱列による南北塚跡で、5.3m分を検出した。残存状況が悪いため確認できなかったが、本来は柱を密に並べたものと思われる。柱穴は9ヶ所で検出しており、8ヶ所で径12cm前後の円形の柱痕跡を確認している。柱穴は梢円形や隅丸長方形で、長軸が30cm前後、短軸が25cm前後であり、深さは深いもので13cmある。埋土は地山小ブロックを含む黒・黒褐色シルトである。柱列の方向はN-3°-Wである。遺物は出土していない。

(2) 溝跡（第12～14図）

26条確認した。調査区全体に分布する。大きく東西溝と南北溝に分けられるが、なかには弧状に巡る溝（SD671）もある。また、調査区東側に東西溝が多い。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD649・654・655・661）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD482・651・652・663・671・672・678～680・688・1025・1027・1028）、③上幅0.5m未満のもの（SD653・677・681・1021～1024・1026・1029）があり、②が13条、③が9条と中・小規模な溝が主体である。後述する溝跡以外の断面形はU字形や皿状、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD651・671で土師器甕、須恵器壺・甕、SD653・672で須恵器甕、SD655・677で土師器・須恵器甕、SD663で土師器甕、須恵器高台壺・高盤、SD678・680・681で土師器甕、SD679で須恵器高台壺がいずれも堆積土から極少量出土している。土師器にロクロ調整のものはみられない。

【SD649溝跡】

調査区東端で確認した南北溝跡で6.2m分を検出した。SD482より新しい。上幅は1.4～1.8m、下幅は0.3～0.4mで、深さは90cmである。断面形は中段がつくU字形で、方向はN-19°-Eである。堆積土は自然堆積の上層（1層）と人為的な埋土の下層（2・3層）に大別される。下層は地山ブロックを多く含む黒色粘土で、地山ブロックは3層により多い。上層は黒色粘土である。

遺物は上層から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器壺・甕が少量出土している。

【SD652溝跡】

調査区東側で確認した東西溝跡で12.2m分を検出した。SK650・687・1030より古く、SD655、SK1032より新しい。上幅は1.1～1.4m、下幅は0.5～0.9mで、深さは30cmである。断面形は皿状で、方向はE-1°-Sである。堆積土は黒色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕・甕、須恵器甕、瓦（第14図11）が少量出土している。

【SD654溝跡】

調査区東側で確認した東西溝跡で、12.2m分を検出した。西側では南にやや屈曲する。SK664・666より古く、SK656より新しい。上幅は1.5～2.0m、下幅は0.6～1.4mで、深さは25cmである。断面形は皿状で、方向はE-3°-Sである。堆積土は3層に分けられる。3層が黒褐色砂質シルト、2層が暗

灰黄砂、1層が黒色シルトで、すべて自然堆積である。

遺物は堆積土から非クロロ調整の土師器壺、須恵器壺が極少量出土している。

【SD661溝跡】

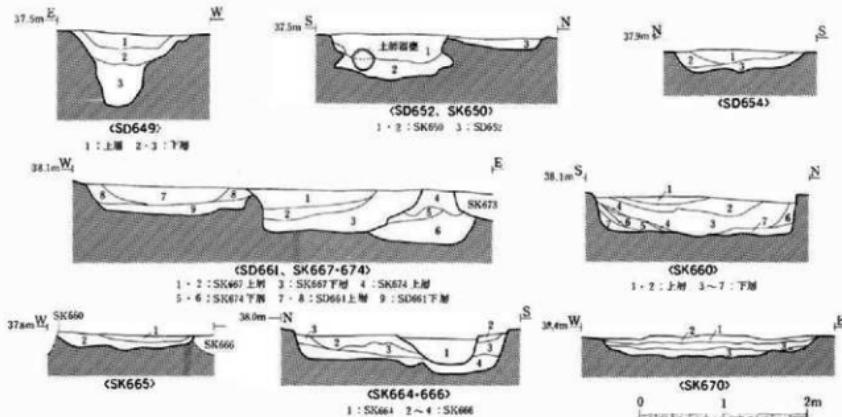
調査区中央部で確認した南北溝跡で5.3m分を検出した。U-3区で北の延長が確認されており、全体では長さ175m以上に及ぶものとみられる。SD859 (U-3区)・860 (U-3区)、SK667・668より古く、SK662より新しい。以下、本調査区での所見を中心に述べる。

上幅は1.9m、下幅は1.6~1.7mで、深さは35cmである。断面形は逆台形で、方向は真北である。堆積土は上層（1・2層）と下層（3層）に大別される。下層は壁の崩落とみられる褐色粘土である。上層は2層が黒褐色砂質シルト、1層が黒色シルトで、自然堆積である。

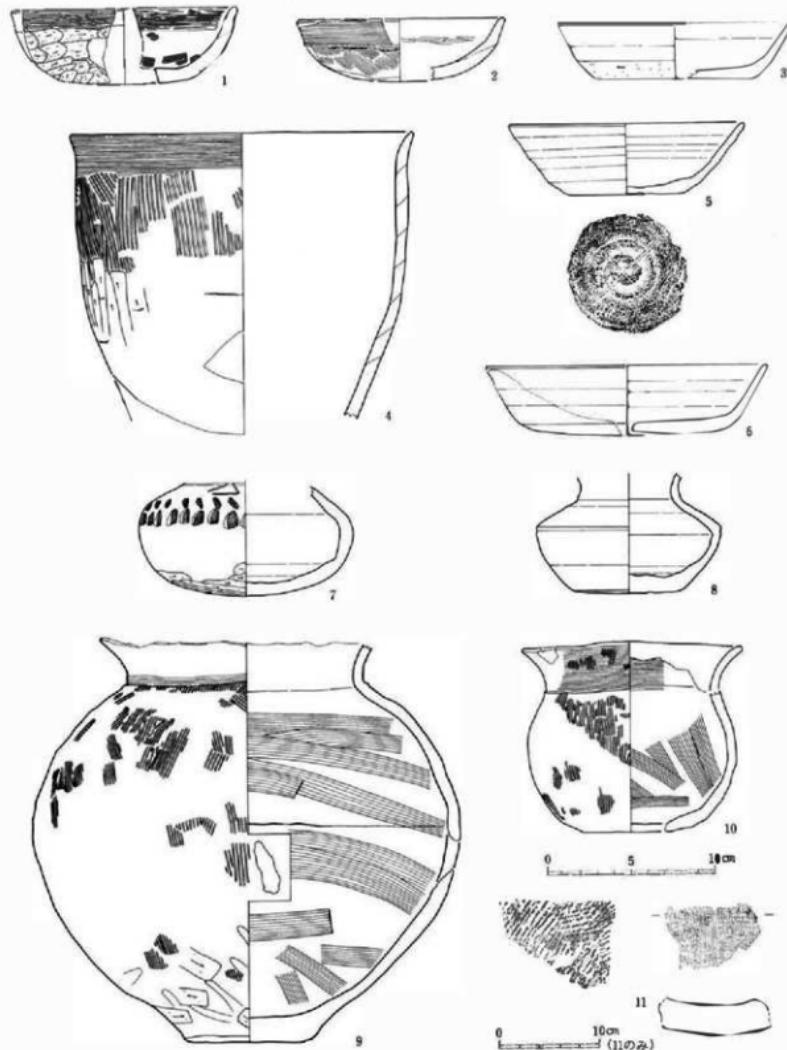
遺物は上・下層ともに出土している。下層では非クロロ調整の土師器壺、須恵器壺が極少量出土している。須恵器壺には回転ヘラケズリ調整のもの（第14図3）と、静止糸切り後手持ちヘラケズリ調整のものがある。上層では非クロロ調整の土師器壺・高壺・甕・瓶（4）、須恵器壺・甕・壺が出土している。土師器壺には関東系のもの（2）がある。須恵器壺にはヘラ切り後ナデ調整のもの（5）があり、底部には焼成前に施された×状の刻書が認められる。須恵器壺には体部が扁平な球形で肩部に櫛齒状の列点があるもの（7）と、体部が算盤玉状で肩部に沈線が施された広口壺（8）がある。なお、U-3区で遺物は出土しなかった。

（3） 土壤（第12~14図）

33基確認した。調査区東側に多く分布する。平面形は円形や橢円形が主体で、他には楕円長方形のものなどがある。規模は①長軸（辺）が2.0mを越えるもの（8基）、②長軸（辺）1.0~2.0mのもの（13基）、③長軸（辺）1.0m未満のもの（12基）があり、全体的にやや大きめなものが多い。後述するもの以外のものの断面形は皿状や逆台形が主体である。堆積土は黒・黒褐色シルト主体の自然堆積



第13図 Q-1区溝跡、土壤断面図



No.	種別	出土遺物・辨証	特徴	口径	底径	高さ	残存率	写真記載
1	土器部・环	SD661・上層	素面丸底 外面:ハケメーヨコナゲ→ヘラケズリ 内面:ハケメーヨコナゲ	(13.6)	(4.6)	1/4		
2	土器部・环	SD661・上層	高茎系土器部 外面:ナゲ→ヨコナゲ 内面:ヤメツ(中央部ヘラヘザキ)	(17.0)	(3.8)	1/4	8-10	
3	土器部・环	SD661・下層	外面:切ク離レーニー型→ヨコナゲ	(14.0)	(9.4)	2.4	1/2	8-11
4	土器部・環	SD661・上層	外面:ヨコナゲ→ハケメーヘラケズリ 内面:ヤメツ	(20.6)			1/5	
5	土器部・环	SD661・上層	外面:ヘラ切りナゲ底部に既成前のX状の割離	(14.1)	7.3	4.3	1/1完形	8-12, 10-10
6	土器部・环	SD661・上層	外面:切り離し不明→手取らちナゲ	(16.0)	(11.0)	4.7	1/3	
7	土器部・环	SD661・上層	外面:ヨコナゲ→ヨコナゲ→ヨコナゲ→ヨコナゲ				4/5	8-13
8	土器部・壳	SD661・上層	外面:ヘラ切りナゲ底部に次錐		6.6		2/3	8-14
9	土器部・壳	SK650・1-3層	外面:ヨコナゲ→ヨコナゲ→ヨコナゲ→ヨコナゲ→ヨコナゲ		8.0		1/2完形	8-17
10	土器部・壳	SK650-1層	外面:ハケメーヨコナゲ 内面:ヨコナゲ・ナゲ 底部に円錐から穿孔	(13.2)	(5.2)	11.5	4/5	8-16
11	平瓦	SD652・埴生土	縦目瓦形 台面:平行テタナ 前面:前目				一部	10-23

第14回 Q-1区溝跡、土壤出土遺物

のものと、地山ブロックを含む黒・黒褐色シルト主体の人为的な埋土のものがある。遺物はSK657で曲物の底板、SK658・676で土師器甕、SK668・675で土師器甕、須恵器壺が各々堆積土から極少量出土している。土師器甕は非ロクロ調整のものが主体だが、SK676のものにはロクロ調整のものも含まれる。

【SK650 土壙】

調査区東側で確認した。SD652より新しい。平面形は径1.6mの円形である。深さは56cmある。断面形は、底面近くで壁が崩れてオーバーハングしているが、本来は逆台形と思われる。堆積土は地山ブロックを含む黒色粘土質シルトで、地山ブロックは2層により多い。人为的な埋土である。

遺物は埋土から、非ロクロ調整の土師器甕（第14図9・10）が極少量出土している。9は球胴形、10は小型の甕で、ともに口縁部と胴部との境に段のつくものである。また、9は胴部、10は底部に孔が穿たれている。

【SK660 土壙】

調査区東側で確認した。SK659・665より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が2.5m、短軸が2.3mで、深さは56cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1・2層）と人为的な埋土の下層（3～7層）に大別される。下層は地山ブロックを多く含む黒・黒褐色砂質シルトや暗灰黄粘土などである。上層は2層が暗灰黄粘土と砂の互層、1層がオリーブ黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

【SK664 土壙】

調査区東側で確認した。SD666より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が1.5m、短軸が1.0mで、深さは42cmである。断面形は逆台形である。堆積土は炭粒を少し含む黒色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SK665 土壙】

調査区東側で確認した。SK660より古く、SD654、SK666より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が2.0m、短辺が0.9mで、深さは20cmである。断面形は逆台形である。堆積土は2層が黃灰色、1層が黒色のシルトで、ともに地山ブロックを多く含む人为的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器甕が極少量出土している。

【SK666 土壙】

調査区東側で確認した。SK664・665より古く、SD654より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が3.0m、短軸が2.1mで、深さは56cmである。断面形は逆台形である。堆積土は3層に分けられる。3層が褐灰色、2層が黒色、1層は黒褐色のシルトで、いずれも地山ブロックや砂を多く含む人为的な埋土である。

遺物は静止糸切り後回転ヘラケズリ調整の須恵器壺が出土したのみである。

【SK667 土壙】

調査区東側で確認した。SD661、SK668・674より新しい。平面形は溝状で、長さ3.5m分を検出し

た。上幅は2.1m、下幅は1.9mで、深さは52cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1・2層）と人為的な埋土の下層（3層）に大別される。下層は地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルトである。上層は2層が褐灰色粘土、1層が黒色シルトである。

遺物は上層から土師器壺・甕、須恵器壺・甕が少量出土している。土師器甕にはロクロ調整のものがある。

【SK670 土壙】

調査区西側で確認した。SD671・681・1028より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が3.6m以上、短辺が3.0mで、深さは28cmである。断面形は皿状である。堆積土は3層に分けられる。いずれも黒色で2・3層が粘土質シルト、1層が砂質シルトであり、自然堆積である。3層には地山ブロックが含まれる。

遺物は堆積土から土師器壺・甕、須恵器壺・甕が少量出土している。土師器壺にはロクロ調整のものがある。

【SK674 土壙】

調査区東側で確認した。SK667・673より古い。平面形は橢円形である。規模は長軸が1.7m、短軸が1.3mで、深さは65cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層（1層）と人為的な埋土の下層（2・3層）に大別される。下層は3層が浅黄色、2層がよい黄色の粘土で、ともに地山ブロックを主体とする。上層は黒色シルトである。遺物は出土していない。

2～4区（第15図）

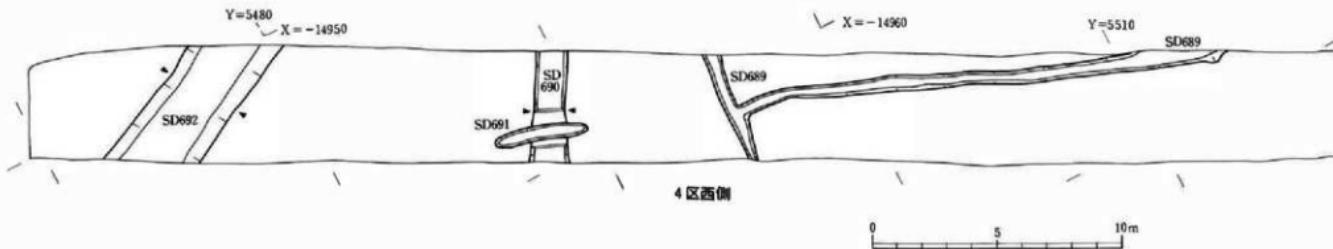
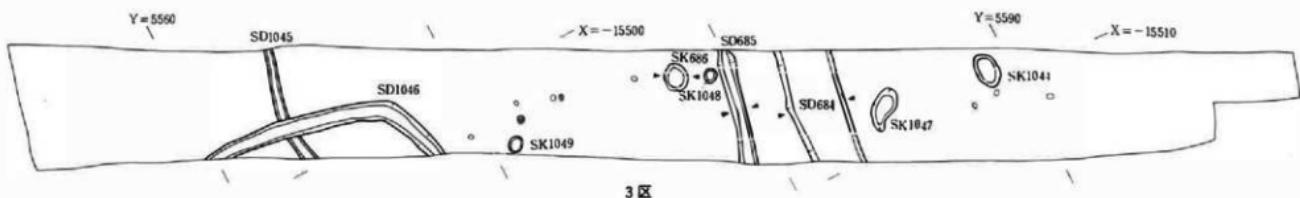
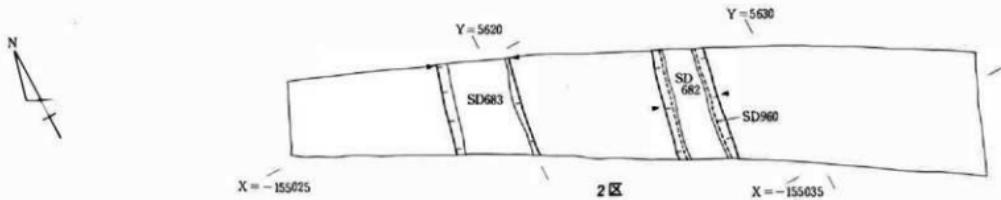
（1）溝跡（第15・16図）

11条確認した。4区東側以外の調査区全体に分布する。南北溝が多いが、東西溝（SD691・692）、南北溝と東西溝がT字状に連結する溝（SD689）、弧状に巡る溝（SD1046）もある。また、南北溝のうちSD682～684・960は、窯跡調査区やV-4区で北の延長を確認している。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD682～684・690・692・960）、②上幅1.0m未溝のもの（SD685・689・691・1045・1046）とがある。断面形は①は逆台形、②はU字形が多い。堆積土は、①はSD960を除き黒・黒褐色の粘土や粘土質シルト、砂質シルトのものが主体である。また、SD682～684・692の堆積土中には灰白色火山灰の一次堆積層が認められる。②は黒・黒褐色のシルトや砂質シルトのものが主体である。遺物は少なく、SD683の堆積土から須恵器甕が1片出土したのみである。なお、SD682・684・960についてはここでは本調査区での断面図を載せるのみとし、V-4区で詳述する。

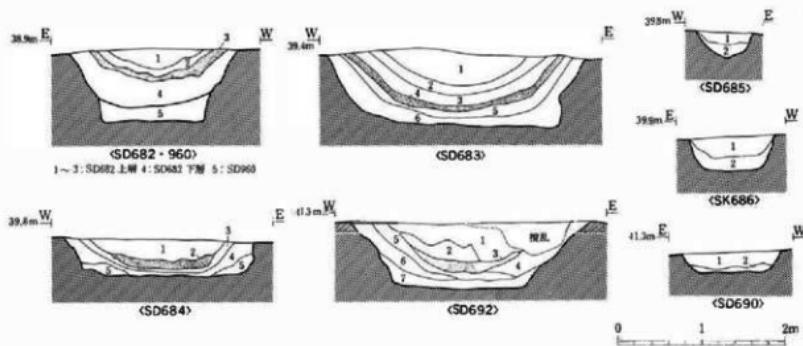
【SD683 溝跡】

2区で確認した南北溝跡で4.0m分を検出した。窯跡調査区とV-4区で北の延長が確認されており、全体では長さ230m以上に及ぶものとみられる。SK650・687・975（V-4区）・1030より古く、SD655、SK1032より新しい。以下、本調査区での所見を中心に述べる。

上幅は2.9～3.1m、下幅は2.3～2.6mで、深さは88cmである。断面形は逆台形で、方向はN-15°-Eである。堆積土は6層に分けられる。このうち4層は灰白色火山灰の一次堆積層で、他は黒色や黒褐色



第15図 Q-2~4区平面図



第16図 Q-2~4区溝跡、土壤断面図

色の粘土・粘土質シルトを主体とした自然堆積層である。

遺物は本調査区の堆積土から須恵器甕が1片出土したのみである。

【SD692溝跡】

4区西端で確認した東西溝跡で5.8m分を検出した。上幅は2.9~3.2m、下幅は1.8~2.2mで、深さは82cmである。断面形は逆台形で、方向はE-28°-Nである。堆積土は7層に分けられる。このうち4層は灰白色火山灰の一次堆積層で、他は黒・黒褐色の粘土や粘土質シルト、黒色砂質シルトを主体とした自然堆積層である。遺物は出土していない。

(3) 土壌 (第15・16図)

5基確認した。3区中央部だけに分布する。平面形は楕円形や円形である。規模は①長軸2.0~1.0mのもの (SK686・1044・1047) と、②長軸1.0m以下のもの (SK1048・1049) がある。断面形は皿状や逆台形である。堆積土は黒色や黒褐色のシルトを主体とし、底面付近では砂を含むものもある (SK686)。遺物は出土していない。

5・8・9区 (第17図)

(1) 溝跡 (第17・18図)

8条確認した。調査区全体に分布し、西側に隣接するR・S区も含めて複数の調査区にわたるものが多くみられる。東西溝が主体であるが、南北溝もある。東西・南北溝ともに真東・北に対して方向が大きくふれるものが多い。また、湾曲したり蛇行するとみられるものもある。規模は①上幅1.5mを越えるもの (SD694A・B・798)、②上幅0.5~1.5mのもの (SD695~698)、③上幅0.5m未満のもの (SD1050・1052) がある。断面形はU字形が主体である。堆積土はSD694BとSD696の1層が地山ブロックを多く含む黒・黒褐色のシルトで人為的な埋土である以外は、黒色や黒褐色、灰褐色シル

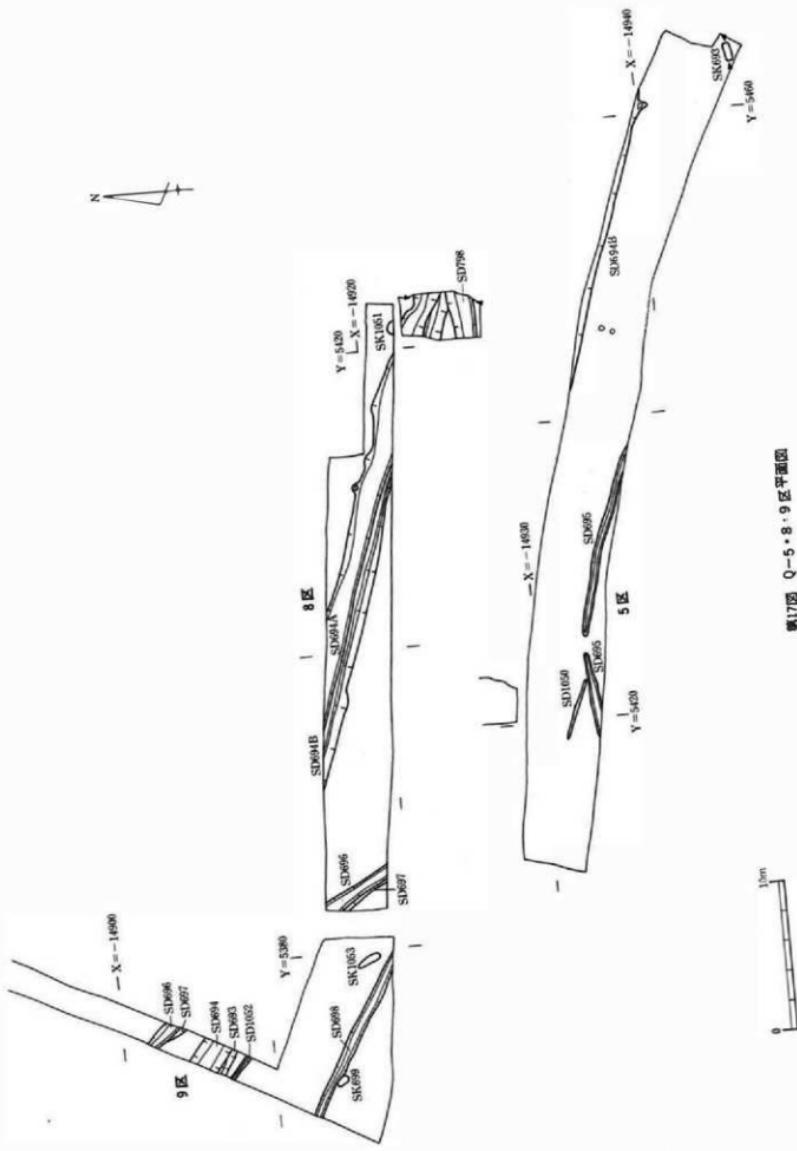


圖 17-9-5-a 圖

トなどの自然堆積である。遺物は、後述する溝跡のほかには SD695 の堆積土から須恵器甕が極少量出土している。

【SD694A・B 溝跡】

5・8・9区で確認した東西溝跡である。西側に隣接するR-1区、S-1区で延長が確認されており、全体では長さ180m以上に及ぶ溝跡とみられる。2時期(B→A)ある。SD798・1056(R-1区)より古く、SK731・732(ともにS-1区)より新しい。Aは上幅1.3~2.0m、下幅0.7~0.8mで、深さは48cmある。断面形はU字形で、方向はE-19°~35°-Sである。堆積土は2層が黒褐色、1層が黒色のシルトで、ともに自然堆積である。

Bは北側がAに埋されている。残存する上幅は1.1~1.7m、下幅は0.4~1.0mで、深さは72cmである。断面形と方向はAと同じである。堆積土は2層が黒褐色、1層が黒色のシルトで、ともに地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は、Aの堆積土から須恵器甕が極少量出土している。また、遺構確認時にS-1区で繩文土器(第26図1)が出土している。

【SD696溝跡】

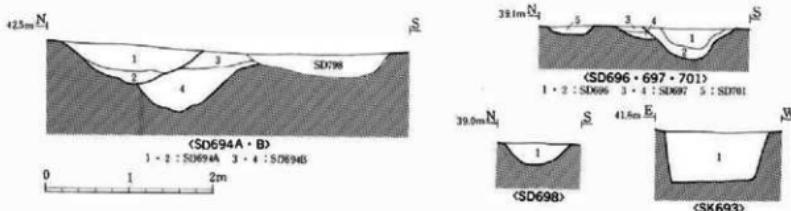
8・9区で確認した溝跡である。西側に隣接するR-1区、S-1区で延長が確認されており、全体では長さ70m以上に及ぶものとみられる。8・9区ではほぼ南東から北西に向かって延びており、R-1区で方向をさらに西向きに転じる。SD697より新しい。上幅は0.4~1.3m、下幅は0.2~0.7mで、深さは38cmである。断面形はU字形で、方向はN-31°~50°-Wである。堆積土は2層が黒色シルトの自然堆積、1層は地山土の粒を多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SD697溝跡】

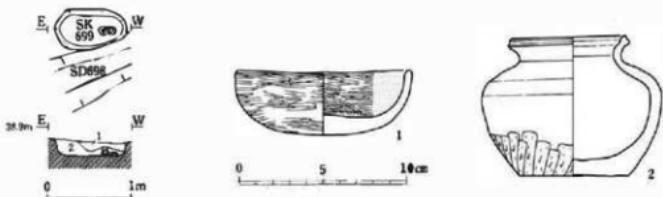
8・9区で確認した南北溝跡である。西側に隣接するR-1区で延長が確認されており、全体では長さ32m以上に及ぶものとみられる。SD696より古い。上幅は0.8m、下幅は0.2mで、深さは16cmである。断面形はU字形で、方向はN-31°-Wである。堆積土は2層が灰褐色砂質シルト、1層が黒褐色シルトで、ともに自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD698溝跡】

8・9区で確認した東西溝跡である。西側に隣接するR-1区、S-1区で延長が確認されており、



第18図 Q-5・8・9区溝跡、土壤断面図



第19図 SK699 土壌

全体では長さ45m以上に及ぶものとみられる。SK699・735～737(S-1区)より新しい。上幅は0.5～1.0m、下幅は0.2～0.5mで、深さは28cmである。断面形はU字形で、方向はE-30°-Sである。堆積土は灰褐色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

(2) 土壌(第17～19図)

4区確認した。まばらに分布する。平面形は楕円形や隅丸長方形などで、規模はいずれも長軸(辺)1.0m前後、短軸(辺)0.5m前後である。断面形は箱形や逆台形、皿状などで統一性はない。堆積土は、SK699が地山土を多く含む黒・暗褐色シルトで人為的な埋土であるほかは、黒色シルトの自然堆積である。遺物は後述する土壌以外では出土していない。

【SK693 土壌】

5区で確認した。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が1.2m、短辺が0.4mで、深さは62cmである。断面形は逆台形である。堆積土は黒色粘土質シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK699 土壌】

9区で確認した。SD698より古い。平面形は楕円形である。規模は長軸が0.9m、短軸が0.5mで、深さは22cmである。断面形は箱形である。堆積土は2層が汚れた地山土や主体とする暗褐色砂質シルト、1層が地山土の粒を多く含む砂質シルトで、ともに人為的な埋土である。遺物は底面から土師器壺と須恵器壺の完形品が出土している(第19図1・2)。土師器壺は底面に伏せられた状態、須恵器壺はその脇に正位に置かれた状態で検出された。土師器壺は非クロ調整で、外面に段をもたないものである。この土壌は形状や規模、堆積土の状況、遺物の出土状況からみて墓壙と考えられる。

5. R・S・T区(第20～22図)

第II工区西部の調査区である。南東から北西に延びる調査区のうち南側をS区、北側をR区、R・S区の接点から北をT区とした。各調査区は農道や水路でR-1～6区、S-1～3区、T-1・2区に細分される。遺構は掘立柱建物跡4、井戸跡2、溝跡15、土壤80を確認した。これらは調査区に広く分布するが、比較的南側のS区に濃密である。北側のR・T区では希薄であり、T-2区にいたつ

てはまったく遺構が確認されなかった。

なお、T-1区中央部の遺構検出時に石器(フレーク)が出土した。そこで出土地点を中心に3m四方の範囲を、VI層(ハードローム層)途中まで掘り下げたが、他に遺物は出土しなかった。

(1) 据立柱建物跡(第20図)

4棟確認した。R-3区のSB1059以外はR-4区で検出した。いずれも柱穴が小さいことから小規模な建物と思われる。調査区の制限から建物の全容は必ずしも明らかではないが、SB746・747は桁行3間、梁行2間の東西棟、SB745は東西2間以上、南北1間以上、SB1059は東西2~3間、南北1間以上の建物とみられる。

検出した柱穴ではすべてで径10~20cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模はSB746・747でみると、SB746の桁行が北側柱列で総長8.7m、柱間寸法が西から2.8m、3.1m、(2.8)mで、梁行は東妻で総長5.2m、柱間寸法は2.6m等間である。SB747は桁行が北側柱列で総長9.0m、柱間寸法が西から3.1m、3.0m、(2.9)mで、梁行は東妻で総長5.2m、柱間寸法は2.5m等間である。全体に柱間寸法はやや広めである。方向はいずれも北側柱列でSB745~747がE-8~12°-S、SB1059がE-33°-Sである。柱穴は隅丸長方形や橢円形である。SB1059の柱穴がやや大きく長辺(軸)が40cm前後であり、深さは深いもので42cmある。ほかは長辺(軸)が25cm前後と小さく、深さも深いもので34cmである。どの柱穴も埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

(2) 井戸跡(第21・23図)

2基確認した。

【SE764 井戸跡】

S-2区で検出した円形の素掘りの井戸跡である。規模は径1.4mで、深さは168cmである。断面形はロート状である。堆積土は3層に分けられる。3層は暗褐色砂質シルト、2層は黄褐色砂質シルト、1層は黒色シルトで、いずれも地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。遺物は出土していない。

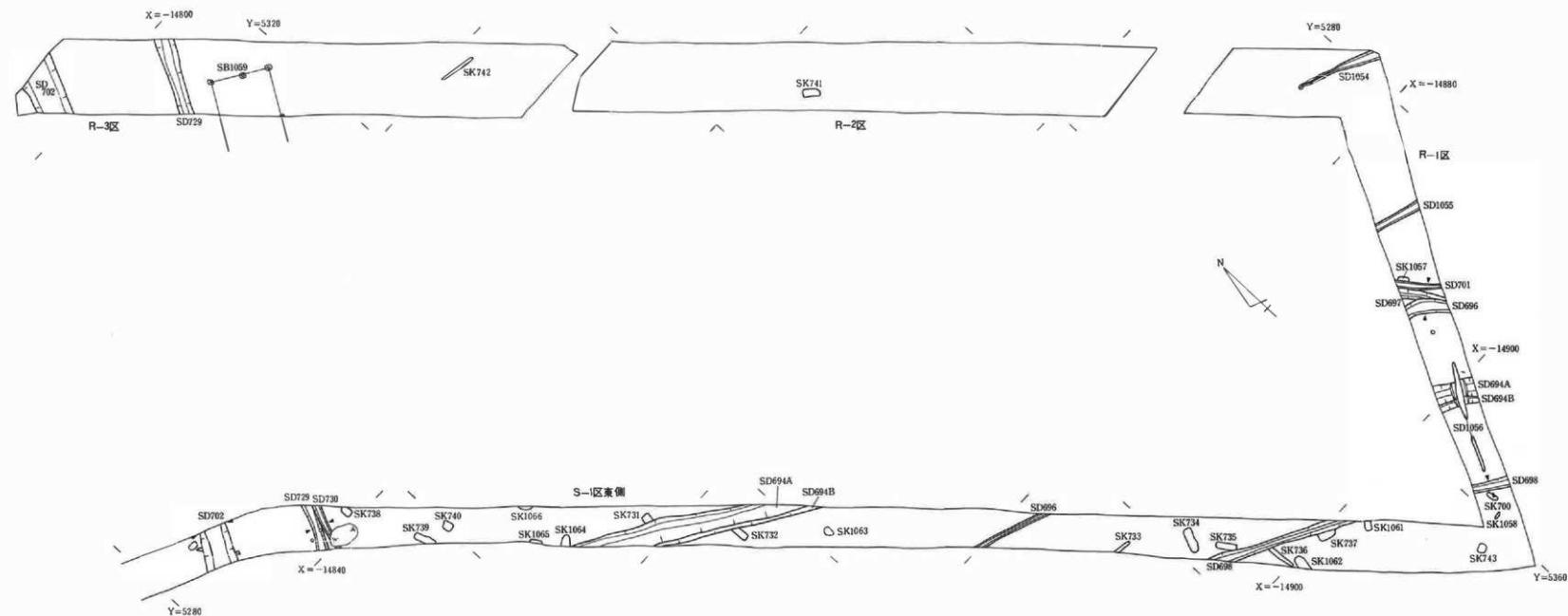
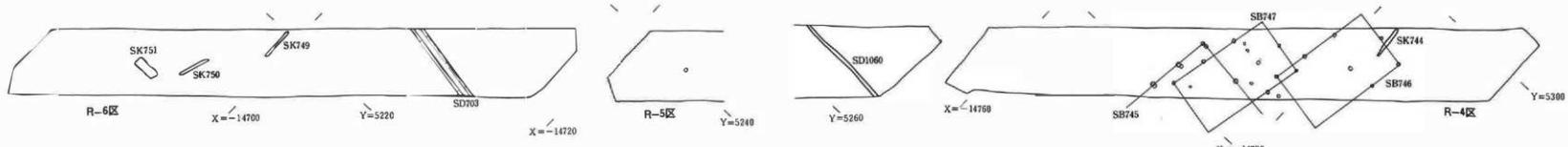
【SE775 井戸跡】

S-3区で検出した素掘りの井戸跡である。平面形は円形とみられる。規模は径2.5m以上で、深さは140cmである。断面形は逆台形である。堆積土は自然堆積の上層(1層)と人為的な埋土の下層(2~4層)に大別される。下層は地山ブロックを多く含む黒色シルトで、2~4層は特にブロックが多い。上層は黒色シルトである。遺物は出土していない。

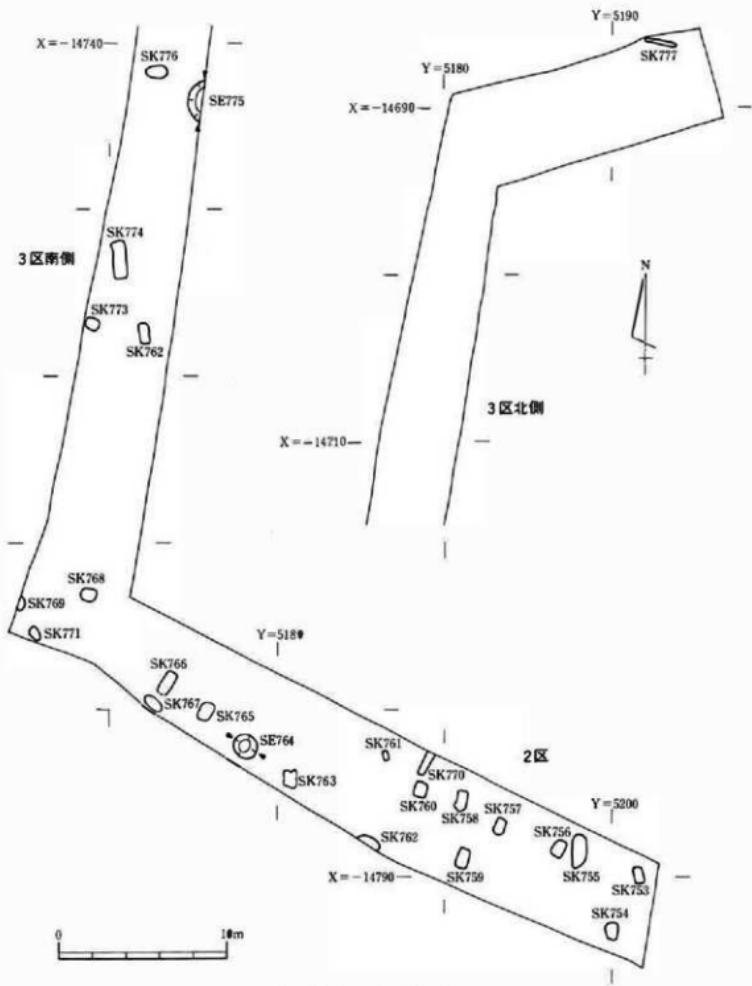
(3) 溝跡(第20・22・23図)

15条確認した。このうちR-1・S-1区の東側に隣接するQ-5・8・9区でも確認したSD694A・B、SD696~698についてはそこで記述したので、以下ではそれら以外のものについて述べる。

SD694A・B、SD696~698以外の溝跡は11条確認した。全体にまばらに分布している。南北溝が多く、また方向が大きく東にふれるものが多い。規模は①上幅1.5mを越えるもの(SD702・729・785)、



第20図 R区、S-I区平面図

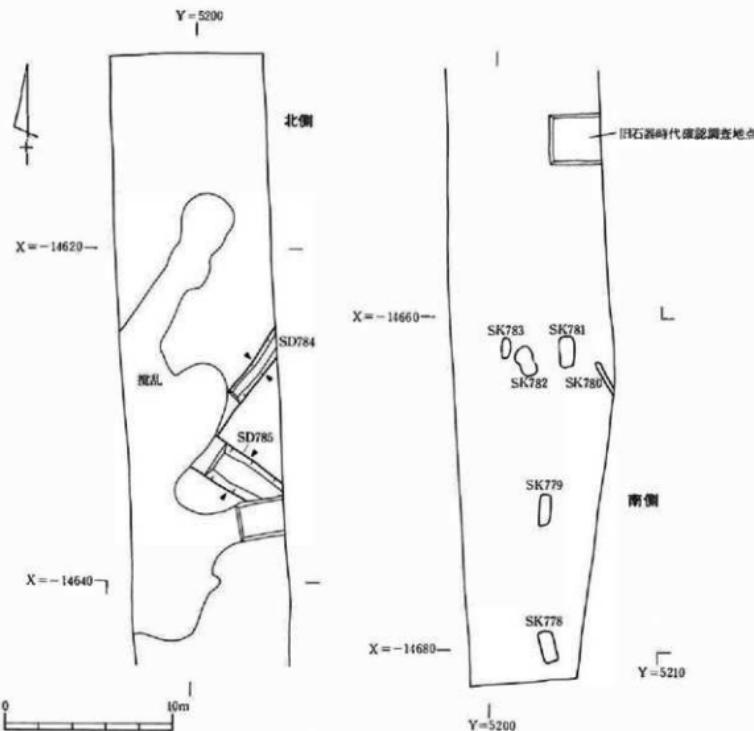


第21図 S-2・3区平面図

②上幅0.5~1.5mのもの(SD701・703・730・784・1054~1056)、③上幅0.5m未満のもの(SD1060)がある。断面形は逆台形やU字形が主体で、規模が大きいほど逆台形のものが多い。後述する溝跡以外では、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物は出土していない。

【SD702溝跡】

R-3区で5.5m分、S-1区で3.4m分を確認した南北溝跡である。全体では長さ45m以上に及ぶも



第22図 T-1区平面図

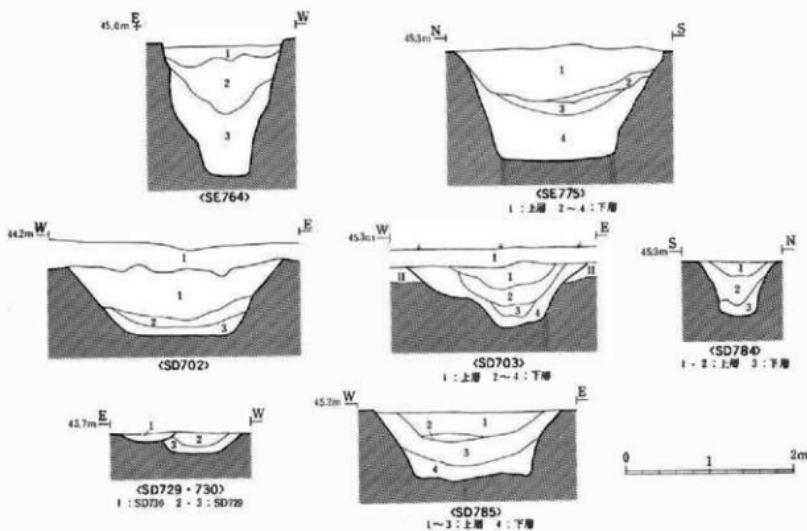
のとみられる。SK728より新しい。上幅は2.2~3.1m、下幅は1.5~2.0mで、深さは95cmである。断面形は逆台形で、方向は、N-30°-Eである。堆積土は3層に分けられる。3層がにぶい黄褐色の砂、1・2層は炭粒や地山土粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

【SD703溝跡】

R-6区で6.8m分、S-1区で6.1m分を確認した南北溝跡である。全体では長さ65m以上に及ぶものとみられる。上幅は検出面で0.8~1.0m、下幅は0.3~0.5mで、深さは54cmである。断面形は軽く段のつくU字形で、方向はN-6~10°-Eである。堆積土は人為的な埋土の上層(1層)と自然堆積の下層(2~4層)に大別される。下層は黒褐色と黒色のシルトの互層である。上層は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SD729溝跡】

R-3区で6.3m分、S-1区で3.8m分を確認した南北溝跡である。全体では長さ45m以上に及ぶものとみられる。SD730より古い。上幅は0.8~1.6m、下幅は0.4~0.7mで、深さは38cmである。断面形は逆台形で、方向はN-29~33°-Eである。堆積土は2層が黒褐色砂質シルト、1層が黒色シルト



第23図 S・R・T区井戸・溝跡断面図

で、ともに自然堆積である。

遺物は堆積土から須恵器甕が極少量出土している。

【SD730 溝跡】

S-1区で確認した南北溝跡で、3.9m分を検出した。SD729より新しい。上幅は0.5~0.7m、下幅は0.3m前後で、深さは13cmである。断面形はU字形で、方向はN-21°-Eである。堆積土は黒色シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整で外面に段のない土師器坏が極少量出土している。

【SD784 溝跡】

T-1区で確認した溝跡で、5.9m分を検出した。調査区西側は搅乱に壞されている。SD785より古い。上幅は1.0m、下幅は0.5mで、深さは66cmである。断面形は逆台形で、方向はN-38°-Eである。堆積土は自然堆積の上層(1・2層)と人为的な埋土の下層(3層)に分けられる。下層は地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。上層は地山土の粒を含む黒褐色粘土質シルトである。地山土の粒は1層により多い。遺物は出土していない。

【SD785 溝跡】

T-1区で確認した溝跡で、5.0m分を検出した。調査区西側は搅乱に壞されている。SD784より新しい。上幅は2.2~2.4m、下幅は1.2~1.5mで、深さは88cmである。断面形は逆台形で、方向はE-32°-Sである。堆積土は自然堆積の上層(1~3層)と人为的な埋土の下層(4層)に分けられる。下層は地山ブロックを含む黒褐色砂質シルトである。上層は地山土の粒を含む黒褐色粘土質シルトである。2層は地山土の粒がやや少ない。遺物は出土していない。

(4) 土壌 (第20~22・24・25図)

80基確認した。R区、T-1区にもあるが、比較的S-1・2区に多い。形状をみると①平面形が溝状で、横断面形がU字形のもの、②平面形が隅丸長方形で、横断面形が箱形を主体とし、底面にpitのあるもの、③平面形が隅丸長方形で、横断面形が箱形を主体とし、底面にpitのないもの、④平面形が隅丸長方形や方形を基調とし、横断面形は一方の壁がオーバーハングするもの、⑤上記の①~④以外のものがある。このうち①~④は形状だけでなく、分布や規模、堆積土などにもそれぞれまとまりが認められる。よって、以下では①~④について各々まとめて述べることにする。なお、⑤については堆積土は黒・黒褐色シルトが主体で、遺物は出土していない。

【①類】

9基確認した (SK728・733・736・742・744・749・750・777・780)。R-3区からS・T区の接点部分にかけて6基、S-1区東側に3基があり、それぞれまばらに分布する。SK728はSD702より、SK736はSD698より古い。

規模は長さ2.0~3.6m、幅20~36cmで、深さは29~75cmである。SK728の南端はオーバーハングしている。長軸方向はR-3区からS・T区にかけてのSK780以外のものは20°までの範囲で東か西にふれた東西方向をとる。S-1区東側のものは東西、南北、南東~北西とバラバラである。堆積土は地山土の粒を含む黒色や黒・暗褐色のシルトで、自然堆積である。地山土の混ざる度合いで2~3枚に層が分かれる場合もある。遺物は出土していない。

【②類】

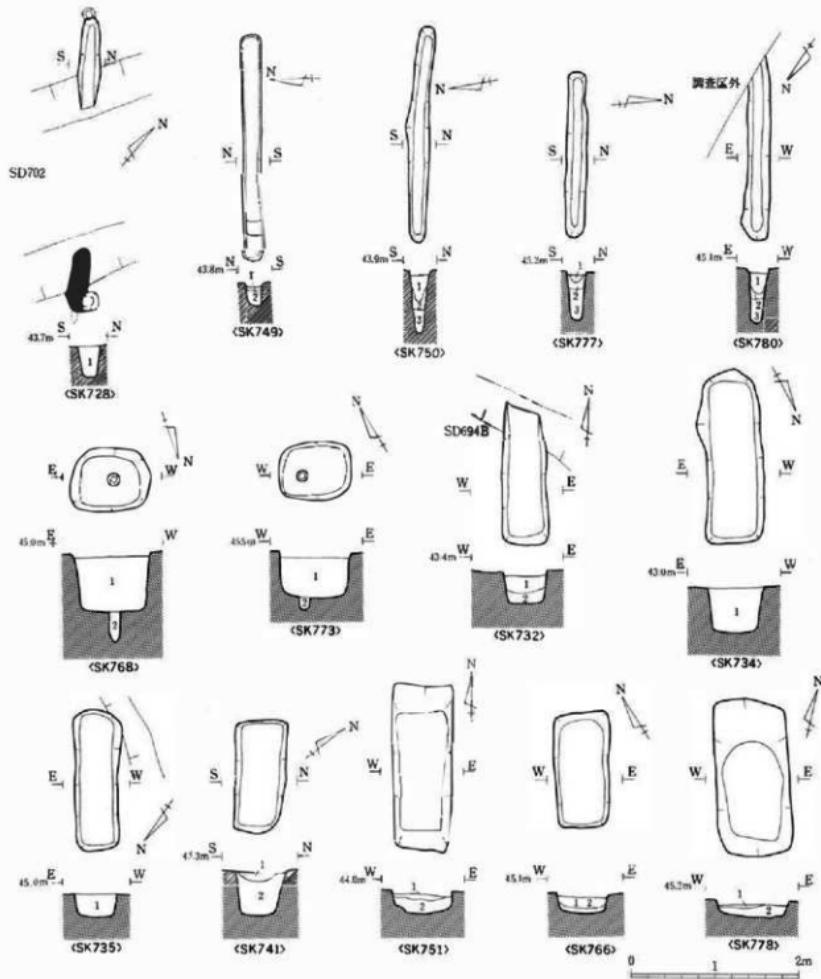
S-3区で2基確認した (SK768-773)。SK768の平面形はやや梢円形に近い。規模は長辺0.9m前後、短辺0.8m前後で、深さは54~70cmである。堆積土は黒色シルトで、自然堆積である。底面のpitは、円形のものがともに1つ確認された。SK768では底面ほぼ中央、SK773では中央からやや西よりにある。径は13cm前後、深さは18~39cmである。堆積土は小さい地山ブロックを少し含み、やや粘性のある黒色シルトで、杭の痕跡と思われる。②類の長軸方向はSK768がE-10°-S、SK773がE-31°-Sで、東に対し南にふれる。遺物は出土していない。

【③類】

15基確認した (SK700・706・731・732・734・735・739・741・751・766・770・772・774・778・780)。R-2区とS-1区東側に9基、S-2・3区接点近くに3基、R-6区とT-1区の接点近くに3基があり、S・R・T区全体でみると南東部に多く分布する。SK731・732はSD694より、SK735はSD698より古い。

規模は長辺が1.0~2.1m、短辺が0.4~0.9mである。深さは16~55cmで、30cm前後のものが多い。横断面形は箱形が主体だが、逆台形のものも少しある。SK741以外の長軸方向は35°までの範囲で東か西にふれた南北方向をとる。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色、褐色のシルトで、人為的な埋土である。地山ブロックは下層ほど多い。

遺物はSK700の埋土から貝殻条痕文が施文された縄文土器が出土している (第26図2)。

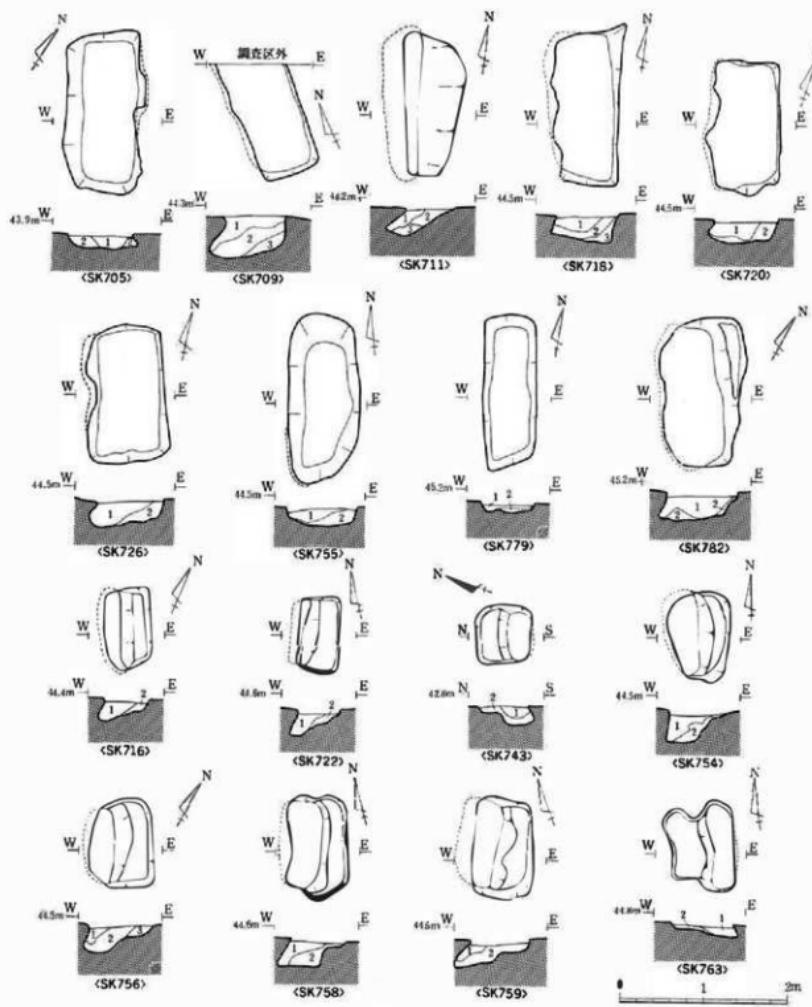


第24図 土壌①～③類

【●類】

39基確認した。(SK704・705・707～718・720～727・738・740・743・753～761・763・765・771・779・782)。R区とS-3区以外に分布し、特にS-1区西側とS-2区に集中する。遺構の全容がほぼわかるものでみると、長軸が1.5m以上の大きいa類と1.5m未満の小さいb類がある。

a類は10基ある。平面形は橢円に近いものや不整な長方形のものもある。規模は長辺(軸)は1.6～2.0mで1.8m前後のものが多く、短辺(軸)は0.4～0.9mで0.8m前後のものが多い。深さは13～37cmである。長軸方向は34°までの範囲で西にふれた南北方向のものが多い。横断面形は一方の壁がオーバー



第25図 土壠④類

ハングする袋状または平行四辺形である。a類中最も東で確認されたSK705以外は、すべて西壁がオーバーハングする。

b類は25基ある。平面形は橢円を2つ並べたやや不整なものもある。規模は長辺(軸)は0.6~1.3mで1.0m前後のものが多く、短辺(軸)は0.3~0.8mで0.6m前後のものが多い。深さは10~41cmである。長軸方向はb類中最も東で確認されたSK743以外は、34°までの範囲で東か西にふれる南北方向を

とる。横断面形は一方の壁が袋状や平行四辺形状にオーバーハングする点はa類と同じだが、反対側が段状のものが多くみられる。また、西壁がオーバーハングするものが主体をしめるが、SK740・743・763・771は東壁がオーバーハングする。

a・b類とも堆積土は、2・3層は地山ブロックを多く含む褐色シルトで人為的な埋土とみられる。1層は地山土の粒を少し含む黒色や暗褐色のシルトである。人為的な埋土か、自然堆積かは判別できなかった。遺物はSK720の1層から縦走縄文が施文された弥生土器が出土している（第26図3）。

6. U区（第28図）

第III工区北の東部の調査区である。東側の南北調査区を1区（昨年調査のL区の北側）、西側の南北調査区を3区、1・3区の間の東西調査区を2区とした。3区は確認調査部分である。2区は北側が東西方向の沢に面しており、調査区全体が沢に向かってゆるやかに下る地形となっている。また、2区西端と3区北端には沢の一部が分岐して入りこんでいる。遺構は掘立柱建物跡5、竪穴住居跡5、井戸跡1、溝跡22、土壤64を確認した。これらは分岐した沢以外の部分に広く分布するが、特に1区北側と、沢に近い2区西側に多い。掘立柱建物跡や竪穴住居跡、井戸跡もその周辺で確認された。

なお、2区北側の東西方向の沢は西隣りのV区に及ぶもので、これまで中世名生城の掘跡とみてきたものである。しかし、これまでの調査をふまえた全体的な地形からみて沢と思われる。

（1）掘立柱建物跡（第27・28図）

5棟確認した。SB871以外は2区中央から西側の沢までの範囲にある。調査区の制限から全容がわかるものは少ない。柱穴は小さく、長辺（軸）が35cm前後の隅丸長方形や楕円形のものが主体である。また、柱穴の並びは1～3間程度でまとまるものが多い。したがって、小規模な建物が主体とみられる。方向は①ほぼ真北のもの（SB855・871）、②北に対し6～17°東にふれるもの（SB844・854・886）がある。遺物は後述するもの以外からは、SB854の柱穴埋土から土師器壺、須恵器壺が極少量出土している。なお、SB854・855は建物としたが、柱穴の形や配置からみて、竪穴住居跡の主柱穴のみが検出されたものである可能性がある。

【SB844 建物跡】

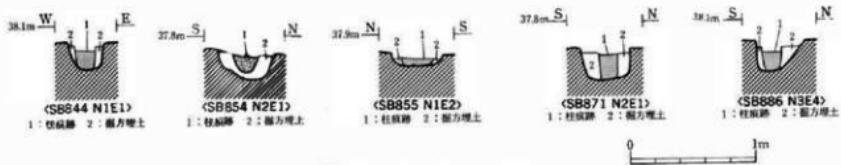
2区西側で確認した桁行2間、梁行1間の東西棟である。柱穴はすべて検出しており、各々で径14cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北側柱列で総長2.6m、柱間寸法は東から1.35m、1.25m、梁行は東妻で総長2.2mである。方向は北側柱列でE-6°-Sである。柱穴は隅丸長方形で、長辺が30cm前後、短辺が25cm前後であり、深さは深いもので24cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトである。

遺物は柱穴埋土から土師器が極少量出土している。



No.	層	発見場所・解法	年代	層	年齢区分
1	褐色土層	SDH94・ sondage	赤陶束羽状輪文 (LR - RL)		10-16
2	褐色土層	SK709・ sondage	赤陶束底式		10-17
3	弥生土層	SK720・ sondage	縦走輪文(東), 天王山式		10-18

第26図 S・R・T区出土遺物



第27図 U区建物跡柱穴断面図

【SSB886 建物跡】

2区西側で確認した桁行3間、梁行2間の東西棟である。SI841より古く、SI842より新しい。柱穴は8ヵ所で検出しており、すべてで径20cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が南側柱列で総長5.6m、柱間寸法は東から1.8m、1.85m、1.85m、梁行は西妻で総長3.7m、柱間寸法は北から1.8m、1.9mである。方向は南側柱列でE-17°-Sである。柱穴は隅丸長方形や楕円形で、長辺(軸)が45cm前後、短辺が35cm前後であり、深さは深いもので38cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色のシルトである。遺物は出土していない。

(2) 積穴住居跡 (第28~31図)

5軒確認した。SI804が1区で確認された以外は、2区西側に集中する。いずれも残存状況が悪い。床面が残るものはSI804・841のみで、他は周溝や主柱穴が一部確認されたにとどまる。

【SI804 住居跡】

1区中央で確認した。堆積土や壁は残存していない。SD853より古い。

【平面形・規模】東西4.8m、南北4.6mの隅丸長方形である。

【床面】西側拡張部で確認した。地山ブロックを含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

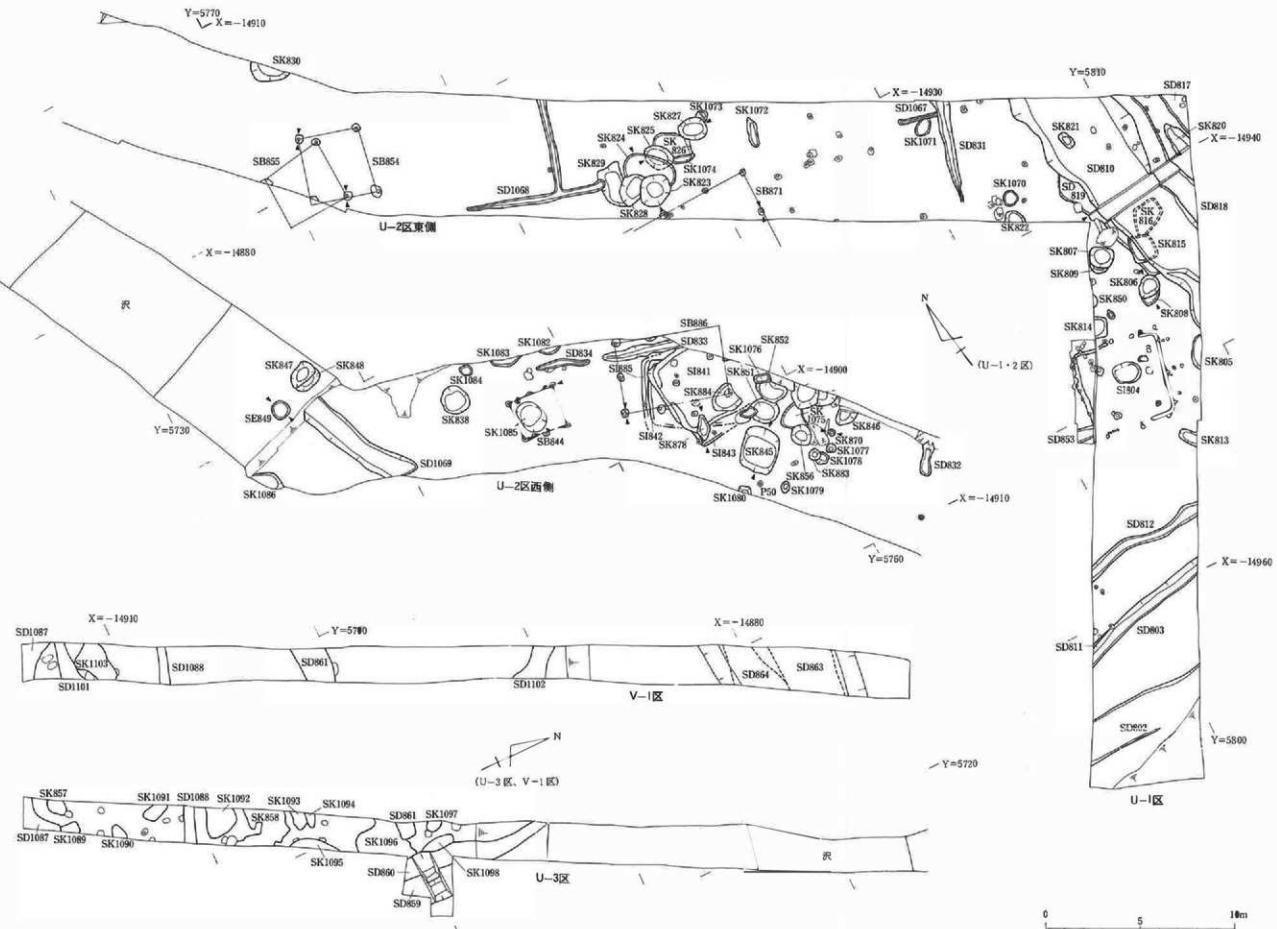
【主柱穴】4ヵ所確認した。掘方は長軸(辺)が30~44cm、短軸(辺)が25~36cmの楕円形や隅丸長方形で、深さは深いもので28cmである。柱痕跡は径15~20cmの円形である。柱間寸法は東西が2.3m、南北が2.5mである。なお、北東の柱は切り取られている。

【壁柱穴】12ヵ所確認した。各辺に3個ずつある。掘方は長軸(辺)が20cm前後の楕円形や隅丸長方形で、深さは深いもので18cmである。柱痕跡は8ヵ所で確認された。径10cm弱の円形を呈している。

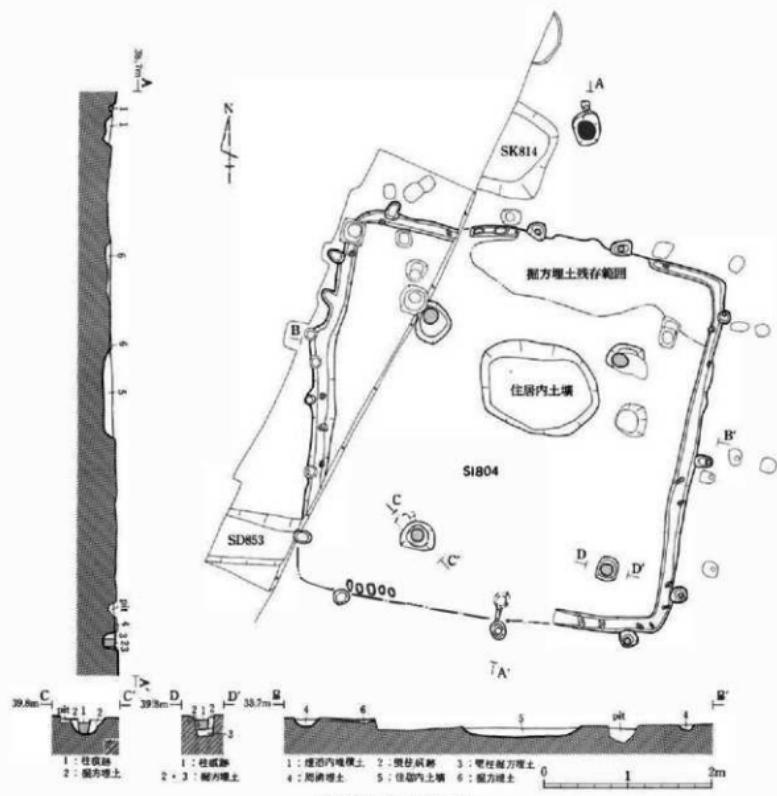
【周溝】全辺で確認された。南辺は残りが悪い。幅は15~30cmで、深さは西辺で15cmある。地山ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。底面には所々に径15cm程の楕円形の凸凹がある。その間隔は南辺の狭いところで10cmである。この凸凹と堆積土の状況からみて、本住居の壁際には丸材または割材等が並べ立てられていた可能性がある。

【カマド】住居内では確認されなかったが、煙道のpitが北側で検出されたこと、周溝が北辺中央の東よりにはないことから、そこに付設されていたとみられる。煙道pitの堆積土は炭粒を含む黒褐色シルトである。

【その他の施設】住居のほぼ中央、カマドの南側で楕円形の土壤を検出した。位置からみて、住居に



第28図 U区、V-1区平面図



第29図 SI804 住居跡

伴うものと思われる。規模は長軸が1.4m、短軸が1.1mで、深さは15cmである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルトで、人為的な埋土とみられる。

【方向】東辺でN-12°-Eである。

【遺物】床面、掘方埋土、煙道pit、住居内土壤から非クロロ調整の土師器坏・甕、須恵器蓋が少量出土している。また、柱穴埋土からロクロ調整の土師器片が出土している。

【SI841 住居跡】

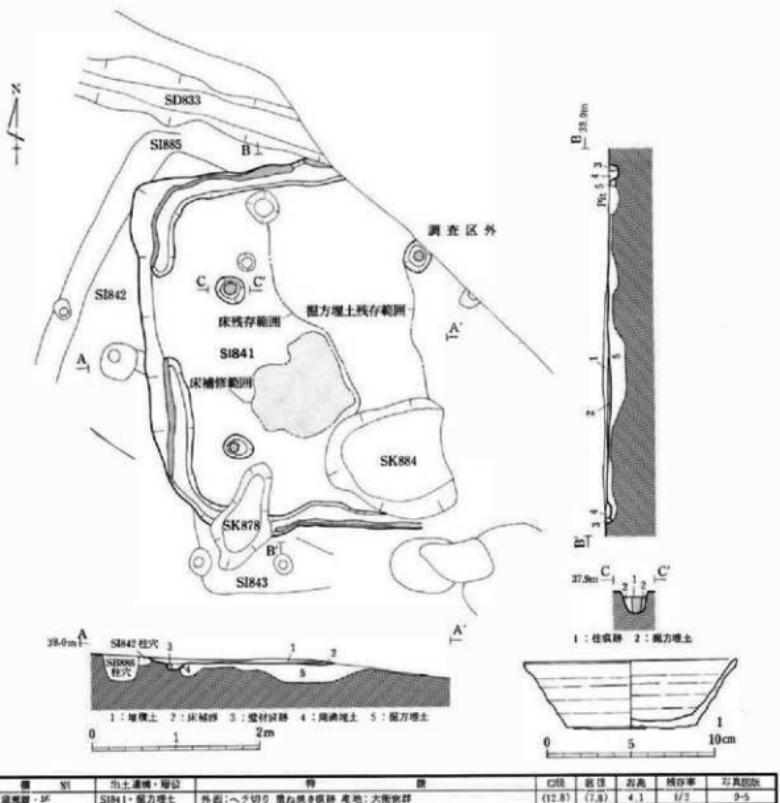
2区西側で確認した。東側は削平されている。SD853、SK878・884より古く、SB886、SI842・843より新しい。

【平面形・規模】隅丸長方形で、南北4.4m、東西は主柱穴の位置から4.5m程と推定される。

【堆積土】地山土の粒を少し含む黒色シルトで、自然堆積である。

【壁】斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい西辺で12cmである。

【床面】地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面とする。中央やや南西よりの部分は



第30図 SI841 住居跡

明黄褐色粘土で一度補修している。全体に平坦だが、補修前は中央付近が窪んでいたとみられる。

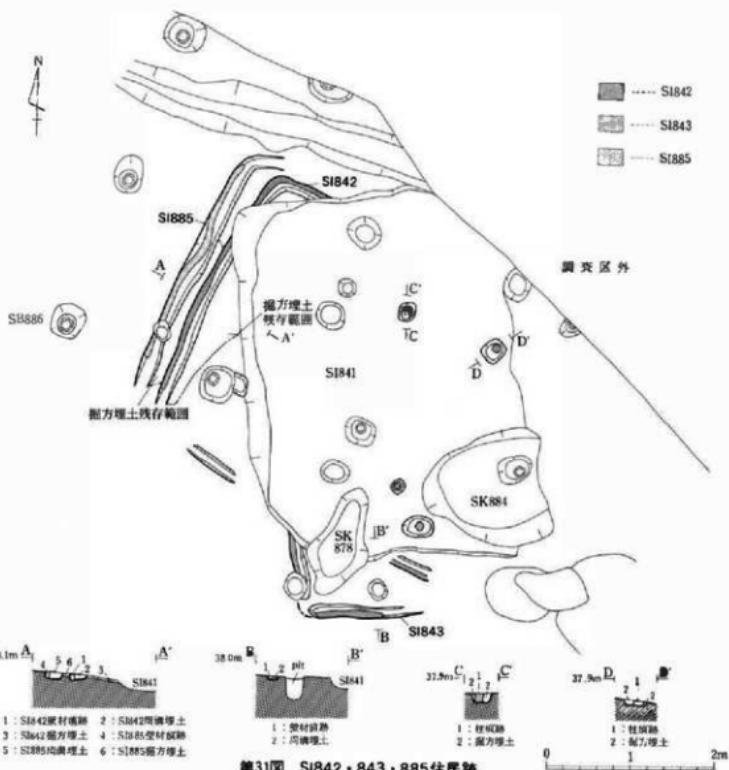
【主柱穴】3ヶ所確認した。配置からみて本来は4個あり、南東主柱穴はSK884に埋されたものと思われる。掘方は長軸(辺)が35cm前後、短軸(辺)が30cm前後の楕円形や隅丸長方形で、深さは深いもので24cmある。柱痕跡は径15cm前後の円形である。柱間寸法は東西が2.3m、南北が1.9mである。

【周溝】北・西・南辺で確認された。西辺は一部途切れている。幅は15~30cm、深さは深いところで15cmある。地山小ブロックを含む黒色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅5~14cm、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

【カマド】検出されなかった。

【方向】西辺でN-5°-Wである。

【遺物】堆積土から土師器壺・壺、須恵器壺、鉄鏃(図版10-30)、掘方埋土から土師器壺、須恵器壺・高盤、周溝埋土から土師器壺が出土している。土師器はいずれも非クロロ調整である。図化したもの



はヘラ切り無調整の須恵器壺で、掘方埋土から出土したものである。

【SI842 住居跡】

2区西側で確認した。SI841などにより床面以下まで大幅に削平されており、主柱穴と西側の周溝・掘方埋土が一部残存するのみである。SB886、SI841より古く、SI885より新しい。

【平面形・規模】隅丸長方形で、南北3.5m、東西は主柱穴の位置から4.0m程と推定される。

【床面】地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としていたと思われる。

【主柱穴】3ヶ所確認した。配置からみて本来は4個あり、北西主柱穴はSI841に埋されたものと思われる。掘方は長辺18~28cm、短辺15~25cmの隅丸長方形で、深さは深いもので12cmである。柱痕跡は2ヶ所確認した。径15cm前後の円形をしている。柱間寸法は東西が2.8m、南北が2.3mである。

【周溝】北・西・南辺で確認された。北・南辺は残りが悪い。幅は15~20cm、深さは深いところで6cmである。地山小ブロックを含む黒色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅5~8cm、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

【方向】西辺で N-25°-E である。

【遺物】出土していない。

【SI843 住居跡】

2 区西側で確認した。SI841 などにより床面以下まで大幅に削平されており、南西隅の周溝と西側の主柱穴が残存するのみである。SI841 より古い。

【平面形・規模】周溝と主柱穴の位置から東西1.7m 以上、南北4.6m 程の隅丸長方形と推定される。

【主柱穴】2ヶ所確認した。配置からみて本来は4個あり、東側主柱穴は削平されたものと思われる。掘方は長辺22~38cm、短辺20~26cmの隅丸長方形で、深さは深いもので12cmある。柱痕跡は径10cm前後の円形をしている。柱間寸法は南北が2.55m である。

【周溝】南西隅の南辺と西辺で確認された。隅部分では途切れている。幅は12~18cm、深さは深いところで5cmである。地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅6~12cm、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

【方向】南辺で E-5°-N である。

【遺物】出土していない。

【SI885 住居跡】

2 区西側で確認した。SI841・842 などにより床面以下まで大幅に削平されており、西側の周溝と掘方埋土が一部残存するのみである。SI842 より古い。

【平面形・規模】周溝のあり方から東西0.5m 以上、南北3.2m 以上の隅丸長方形と思われる。

【床面】地山小ブロックを含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としていたと思われる。

【周溝】北・西辺の一部が確認された。幅は16~24cm、深さは深いところで10cmである。地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅8cm前後、深さ10cm前後の黒色シルトの堆積土が認められる。

【方向】西辺で N-26°-E である。

【遺物】出土していない。

(3) 井戸跡 (第28・32図)

1 基確認した。

【SE849 井戸跡】

2 区西側で確認した井戸跡である。完掘していないため構造は不明である。平面形は横円形で、規模は長軸1.0m、短軸0.9m である。深さは88cm以上、断面形は箱形とみられる。堆積土は4層に分ける。1・4層は砂ブロックを多く含む黒褐色シルト、3層はオリーブ褐色砂、2層は黒褐色シルト質砂で、すべて人為的な埋土である。遺物は出土していない。

(4) 溝跡 (第28・32図)

22条確認した。1区と3区に多く、2区ではまばらである。大きく東西溝と南北溝に分けられるが、

南東から北西に延びるもの（SD1069）や南北・東西の溝がT字状に連結するもの（SD1068）もある。規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD802・810・859・860）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD803・812・831～833・853・1069）、③上幅0.5m未溝のもの（SD811・834・1067・1068）、④不明なもの（SD661・817～819・861・1087・1088）がある。後述する溝跡以外の断面形はU字形や皿状、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体で、SD819の最上層には灰白色火山灰の一次堆積がみられる。また、遺物はSD802で土師器壺・須恵器壺、SD803で土師器と須恵器の壺・甕、SD818で土師器壺、SD819・833・834で土師器甕、SD831で土師器と須恵器の甕、SD859で土師器と須恵器の甕・瓦（第32図8）、陶器がいざれも堆積土から極少量出土している。土師器にロクロ調整のものはみられない。

【SD810溝跡】

1区北側で確認した南北溝跡で15.8m分を検出した。SD818・819、SK815・816・821より新しい。上幅は3.3～5.1m、下幅は2.9～3.5mで、深さは36cmである。断面形は皿状で、方向はN-18°-Wである。堆積土は3層に分けられる。3層がにぶい黄橙色粘土質シルト、2層が黒褐色シルト、1層が黒色シルトで、いざれも自然堆積である。

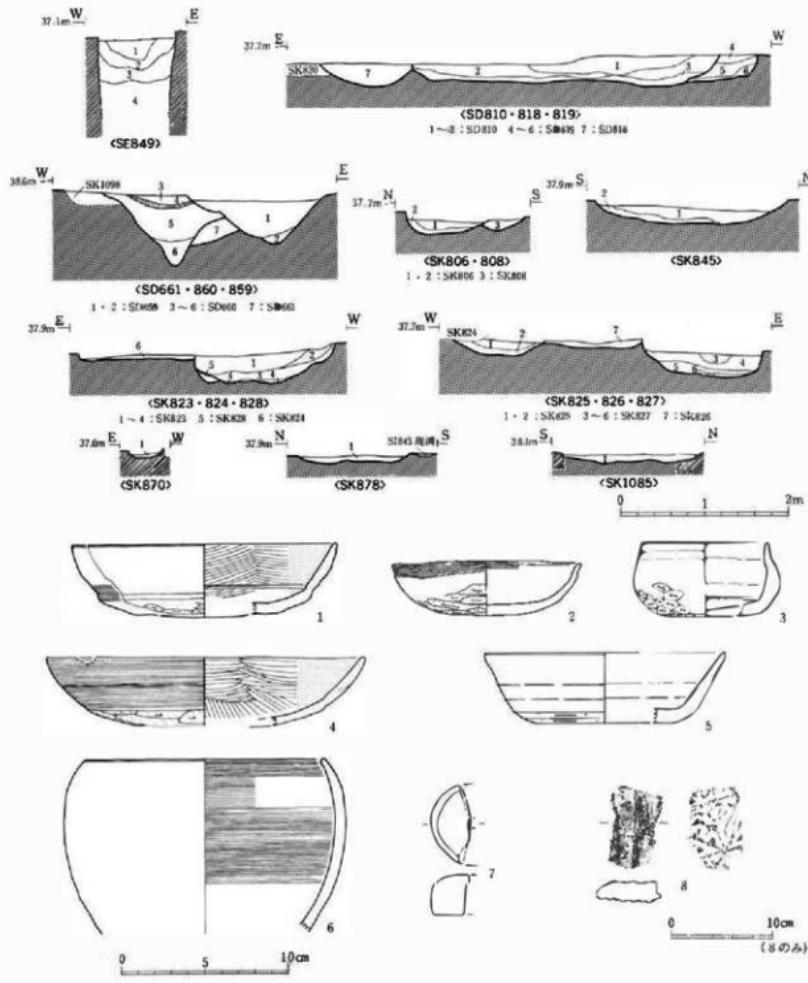
遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器壺・甕・高壺・須恵器壺・甕が出土している。土師器壺には口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底の壺（第32図1）のほか、関東系のものもある（2）。また、須恵器壺には器形からみて7世紀代のものとみられるもの（3）もある。ただし、これらの遺物は本溝が灰白色火山灰の一次堆積がみられるSD819より新しいことから、周辺の遺物が流れこんだものと思われる。

【SD860溝跡】

3区中央で確認した南北溝跡で8.1m分を検出した。SD859、SK1098より古く、SD661より新しい。上幅は0.6～1.6m、下幅は0.3～0.4mで、深さは88cmである。断面形はU字形で、方向はN-6°-Eである。堆積土は4層に分けられる。4層が暗褐色、3層が黒褐色の砂質シルト、2層が灰白色火山灰の一次堆積層、1層が黒色シルトで、いざれも自然堆積である。遺物は出土していない。

（5） 土 壤（第28・32図）

64基確認した。その分布は1・2区では建物跡や住居跡の周辺に集中する傾向がある。3区では沢の南側で平均的に分布する。平面形は梢円形が主体で、他に隅丸長方形のものなどがある。規模は①長軸（辺）が2.0mを越えるもの（8基）、②長軸（辺）1.0～2.0mのもの（38基）、③長軸（辺）1.0m未溝のもの（18基）があり、大きいものは少なく、②が多い。後述するもの以外の断面形は皿状や逆台形、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSK807で土師器壺・甕・須恵器壺・高台壺、SK809・821・830・836・852・856・884で土師器甕、SK813で土師器と須恵器の甕、SK822で土師器壺・甕、SK835で土師器甕・須恵器壺（第32図5）、SK846で土師器壺・甕・須恵器壺、SK857で土師器壺・須恵器壺・甕、SK883で土師器壺・甕・須恵器甕が各々堆積土から出土している。土師器は非ロクロ調整が主体だが、SK807・857の甕にはロクロ調整が含まれる。



番	種別	堆土過篩・層度	特徴	口径	底径	高さ	残存率	写真箇所
1	土師器・灰	SD810・堆積土	引抜丸底 外面：ヨコナデ・ヘラケツリ 内面：ヘラミガキ・褐色厚膜	(15.9)	(4.4)	1/4	9-2	
2	土師器・灰	SD810・堆積土	既製系土器型 灰面：ヨコナデ・ヘラケツリ 内面：ヨコナデ	(11.4)		3.3	2/5	9-3
3	瓦質器・灰	SD810・堆積土	外面：切り離し不明・手持もケヅリ 内面：笠上状	7.6	6.2	4.3	3/4	9-4
4	土師器・灰	SK835・堆積土	引抜丸底 外面：ヘラケツリ・ヨコナデ 内面：ヘラミガキ・褐色厚膜	(19.0)		4.1	1/4	9-6
5	瓦質器・灰	SK835・堆積土	外面：切り離し不明・手持もケヅリ 口縁部に使用痕	(14.0)	(8.3)	4.2	1/4	
6	土師器・敷林地土器	SK870・堆積土	外面：アメノ・四面・ヨコナデ				1/3	
7	土師器・前縁土	SK806・堆積土	厚さ 2.4cm				1/2	10-27
8	平底	SD810・堆積土	焼色合せ 〇 口面：タテナ ボ面：有目・板状或一舟ナゲ(一部)				一概	10-26

第32図 U区井戸・溝跡・土壤断面図及び出土遺物

【SK806 土壙】

1区北側で確認した。SD819、SK808より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.3m、短軸が1.0mで、深さは17cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層が塊灰色、1層が黒色のシルトで、ともに自然堆積である。

遺物は、堆積土から非クロロ調整の土師器壺・甕、須恵器甕、土製紡垂車（第32図7）が出土している。土師器壺には関東系のものもある。

【SK815 土壙】

1区北側で確認した。SD810より古く、SD819、SK816より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が1.4m、短辺が1.3mで、深さは35cmである。断面形は箱形である。堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトで、人为的な埋土である。

遺物は、埋土から非クロロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。土師器壺には口縁部が内湾気味に立ち上がる有段丸底の壺がある（第32図4）。

【SK823 土壙】

2区東側で確認した。SK824・828より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.9m、短軸が1.6mで、深さは50cmである。断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられる。地山小ブロックや焼土の粒を少し含む黒色や黒褐色のシルト、暗褐色のシルト質砂などで、自然堆積である。

遺物は、堆積土から非クロロ調整の土師器壺・甕、須恵器高盤が少量出土している。

【SK824 土壙】

2区東側で確認した。SK824より古く、SK825より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が2.9m、短軸が1.2m以上で、深さは9cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人为的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK825 土壙】

2区東側で確認した。SK824より古く、SK826・1074より新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.6m、短軸が1.2mで、深さは20cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層が地山小ブロックを含む黒褐色シルト、1層が黒色シルトで、ともに自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK845 土壙】

2区西側で確認した。平面形は隅丸長方形である。規模は長辺が2.4m、短辺が1.9mで、深さは32cmである。断面形は皿状である。堆積土は2層が灰黄褐色シルト、1層が地山小ブロックや焼土の粒を含む黒色シルトで、ともに自然堆積である。

遺物は、堆積土から非クロロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・甕が少量出土している。

【SK870 土壙】

2区西側で確認した。平面形は楕円形である。規模は長軸が0.4m、短軸が0.35mで、深さは8cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山小ブロックを含む黒色シルトで、人为的な埋土である。遺物は埋土から非クロロ調整の土師器甕・鉄鉢形土器（第32図6）が極少量出土している。鉄鉢形土器の外面は磨滅しているが、内面にはナデ調整がみとめられる。

【SK878 土壙】

2区西側で確認した。平面形は橢円形である。規模は長軸が1.7m、短軸が0.7mで、深さは12cmである。断面形は皿状である。堆積土は炭や焼土の粒、地山小ブロックを含む褐色シルトで、人為的な埋土である。遺物は埋土からロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺、鉄製品が極少量出土している。鉄製品は小刀で刀身から茎にかけての破片である（図版10-29）。

7. V区（第28・33・43図）

第III工区北の中央部と西部の調査区である。中央部は東側の南北調査区を南から1・2区、西側の南北調査区を5区、2・5区の間の東西調査区を東から3・4区とした。1区は確認調査部分である。また、3・4区は東端から40m西のSD888までを3区、そこから30m西のSD975までを4区東、それより西を4区西とした。一方、西部はU区の北側からのびる沢の沢頭にあたり、大部分が溜池や湿地になっている。このため遺構の存在は考えにくく、標高の高い部分を6区として調査するにとどめた。

遺構は掘立柱建物跡14、竪穴住居跡5、溝跡48、溝の付属施設（橋跡？）1、土壤119を確認した。建物跡や住居跡は4区東までのV区東側に分布する。遺物もその周辺が多い。4区西から西側は、4区西の東側に土壙が密集する以外は、5区南側と6区に溝跡と土壙がまばらにある程度である。4区西の西側と5区北側では遺構は確認されなかった。これらの調査区では遺物も極めて少ない。

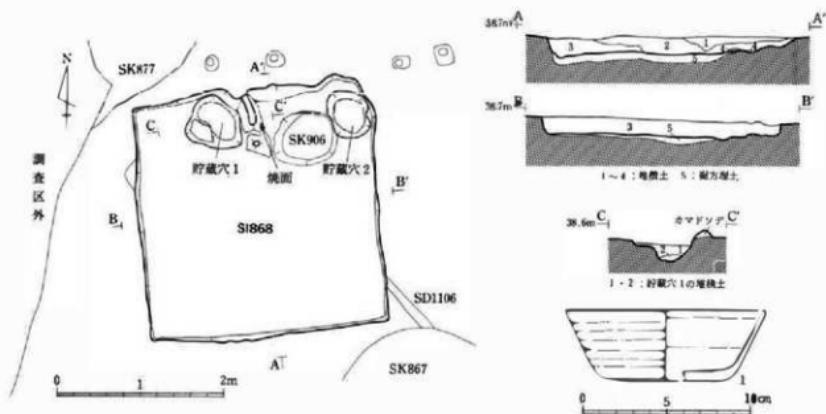
1～3区（第28・33図）

（1）掘立柱建物跡（第33図）

9棟確認した。3区に7棟が集中する。ほかの2棟は2区南側で検出された。調査区の制限から全容がわかるものは少ない。柱穴は長辺（軸）が30cm前後の隅丸長方形や橢円形のものが主体である。また、柱穴の並びは1～3間程度でとまるものが多い。したがって小規模な建物が主体とみられる。方向は①ほぼ真北のもの（SB917）、②北に対し9～15° 東にふれるもの（SB918・1104・1105・922）、③4～6° 西にふれるもの（SB916・919）、④28～31° 西にふれるもの（SB920・921）がある。遺物は後述するもの以外では、SB1105の柱穴埋土から土師器甕、須恵器甕が極少量出土している。なお、SB920は建物跡としたが、柱穴の形や配置から竪穴住居跡の主柱穴のみが検出されたものである可能性がある。

【SB919 建物跡】

3区中央で確認した東西3間、梁行2間以上の建物跡である。SI887より新しい。柱穴は7ヶ所で検出しておおり、そのうち4ヶ所で径15cm前後の円形の柱痕跡を確認した。平面規模は東西が北側柱列で総長5.0m、柱間寸法は東から1.8m、1.5m、1.7m、南北は西側柱列で総長3.9m以上、柱間寸法は北から1.9m、1.9m、以下不明である。方向は北側柱列でE-3°-Nである。柱穴は隅丸長方形や橢円形で、長辺（軸）が30～35cm、短辺が25～30cmであり、深さは深いもので18cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。



第34図 SI868 住居跡

遺物は柱穴埋土から非クロ調整の土器器變が極少量出土している。

(2) 積穴住居跡 (第33~36図)

4軒確認した。SI868のみ2区で、他は3区にある。SI868以外は残存状況が悪い。

【SI868 住居跡】

2区中央で確認した。SK906より古く、SD1106より新しい。

【平面形・規模】東西2.9m、南北3.1mの圓丸長方形である。

【堆積土】地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトや黒褐色シルトなど(1~3層)で、埋め戻されている。

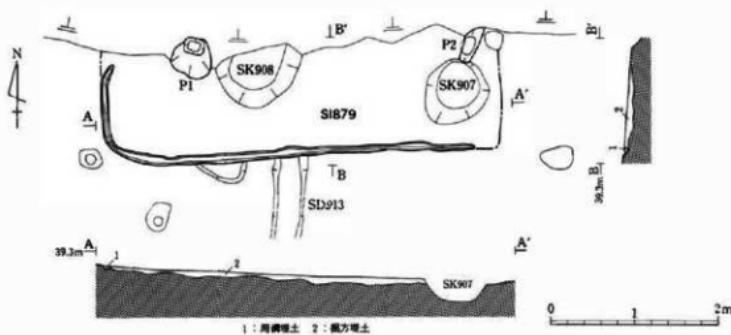
【壁】ほぼ直立する。高さは最も残りのよいところで22cmである。

【床面】地山ブロックを主体とする黄褐色粘土の掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

【主柱穴・周溝】検出されなかった。

【カマド】北辺中央のやや東よりに付設されている。カマド側壁は黄褐色粘土で構築されているが、残存状況が悪く、東の側壁は残っていない。西の側壁は一部壊れつつも長さ70cm、高さ10cmほどが残存しており、焼面もわずかに認められる。西の側壁もそれほど残存がよくないことから、カマドは住居廃絶時に壊されたものと思われる。堆積土は前述の1・2層の下に赤褐色の焼土(4層)が認められる。なお、煙道は検出されなかった。

【貯藏穴】カマドの両脇にある(貯藏穴1・2)。1は長軸72cm、短軸66cmの橢円形で、西側には段が付く。深さは28cmである。堆積土は地山ブロックや砂を含む黒褐色や褐色のシルトで、埋め戻されている。2は長軸58cm、短軸48cmの橢円形で、深さは16cmである。堆積土は炭粒や焼土粒を含む暗褐色



第35図 SI879 住居跡

シルトで、埋め戻されている。

〔方向〕 東辺で N-6°-W である。

〔遺物〕 床面からロクロ調整の土師器甕、須恵器壺が極少量出土している。須恵器壺にはヘラ切り無調整のものがある。堆積土からは土師器 壺・甕、須恵器壺・甕が少量出土した。須恵器壺にはヘラ切り後ナデ調整のものがある(第34図1)。そのほか掘方埋土と貯蔵穴 2 から土師器の破片、貯蔵穴 1 から須恵器甕が各々極少量出土している。

【SI879 住居跡】

3 区東側で確認した。北側は沢に壊されている。また、南側も床面以下まで削平されており、周溝掘方埋土などが残存するのみである。SK907・908 より古く、SD913 より新しい。

〔平面形・規模〕 東西4.8m、南北1.5m以上の隅丸長方形と思われる。

〔床面〕 地山ブロックや炭化物を多く含む黒色砂質シルトの掘方埋土を床面としていたと思われる。

〔周溝〕 南辺と西辺で確認された。幅は 7~13cm、深さは深いところで10cmある。地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔その他の施設〕 pit を 2 個確認した(P 1・2)。1は検出面で長軸50cm、短軸46cmの楕円形、検出面から20cm下がると長辺24cm、短辺18cmの隅丸長方形となる pit で、深さは52cmある。主柱穴の可能性もあるが、断定できなかった。2は長辺48cm、短辺20cm前後の不整な長方形の pit で、西壁はオーバーハングしている。深さは71cmある。

〔方向〕 南辺で E-4°-N である。

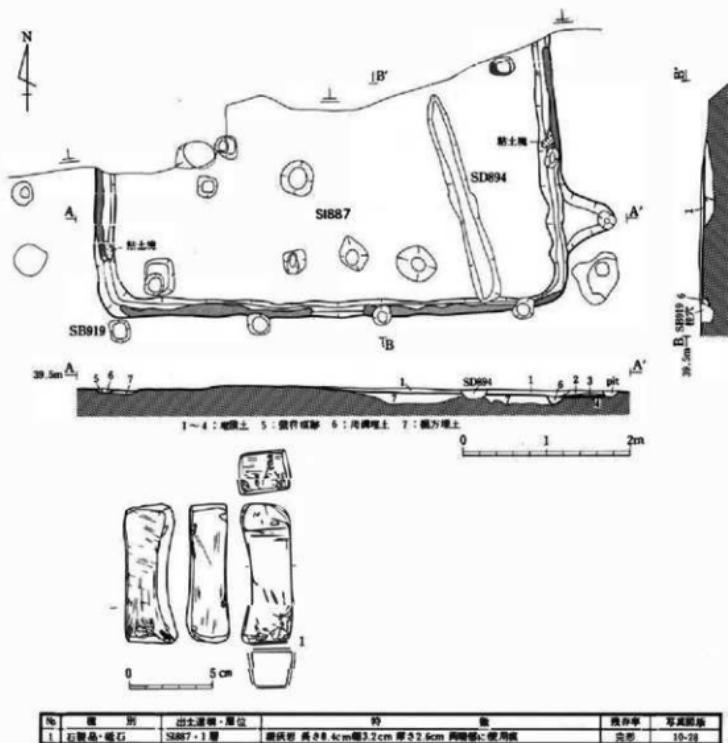
〔遺物〕 掘方埋土と P 1 から非ロクロ調整の土師器 甕が各々極少量出土している。

【SI887 住居跡】

3 区中央で確認した。北側は沢に壊されている。SB919・920、SD894 より古い。

〔平面形・規模〕 東西5.6m、南北3.2m以上の隅丸長方形と思われる。

〔堆積土〕 地山土の粒と焼土を含む黒褐色砂質シルト（1層）である。



第36図 SI887 住居跡

【壁】 残存状況が悪く不明瞭だが、ほぼ直立する。高さは残りのよいところで6cmである。

【床面】 地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としている。西側がやや高いが、ほぼ平坦である。

【周溝】 検出した全辺を一続きに巡る。幅は13~33cm、深さは深いところで14cmある。地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、壁沿いには壁材の痕跡と思われる幅6~16cm、深さ4~9cmの極暗褐色シルトの堆積土が認められる。壁材痕跡はカマドや南西隅では途切れている。その先端では押さえとみられる灰白色粘土塊を2ヵ所で検出した。塊はともに長さ20cm程、幅10cm程、高さ4cm程のものである。

【カマド】 南東隅の東壁が外側に掘込まれており、そこに付設されていたとみられる。側壁やその痕跡は残存しない。また、焼面も検出されなかった。堆積土は前述の1層の下に、地山土の粒と焼土、炭化物を多く含む黒褐色砂質シルト(2層)、橙色砂(3層)、黄灰色シルト(4層)があり、3層はカマドの崩落土、4層は機能時の灰層とみられる。

【方向】南辺で真東である。

【遺物】掘方埋土から非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が少量出土している。須恵器壺には回転ヘラケズリ調整のものがある。堆積土からは非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕のほか、磁石（第36図1）と鉄錆が少量出土している。須恵器壺にはヘラ切り無調整のものがある。

（3）溝跡（第28・33・37図）

21条確認した。おおむね東西にのびる溝と南北にのびる溝とに分けられ、1区は東西溝、2・3区は南北溝が多い。1区の溝は調査区全体に分布する。このうちSD861・1087・1088はU-3区でも確認しており、前述したものである。2・3区では各々中央部に小規模な溝が集中し、他の部分では2区南端と3区西端にやや大きい溝がある。

規模は①上幅1.5mを越えるもの（SD863・864・865・888）、②上幅0.5～1.5mのもの（SD881・1101・1102・1106～1108）、③上幅0.5m未溝のもの（SD894・913・923～925・1109・1110・1115）があり、全体に小規模な溝が多い。後述するもの以外の断面形はU字形や皿状、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD881で土師器甕・須恵器壺・剝片石器、SD894で土師器と須恵器の壺・甕、繩文土器、SD913で土師器壺・甕がいずれも堆積土から極少量出土している。土師器はすべて非ロクロ調整である。

【SD863・864 溝跡】

ともに1区北側の沢の下で確認した東西溝跡で、2.7m分を検出した。2つの溝は重複しておりSD864が古く、SD863が新しい。確認調査部分のため掘下げはしていない。上幅はSD863が2.7～3.0m、SD864が1.4～2.2mである。方向はSD863がほぼ真東、SD864がE-4°-Nである。検出面での堆積土はともにグライ化した緑黒色粘土で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

【SD865 溝跡】

2区南端で確認した東西溝跡で6.2m分を検出した。SB1105より古く、SB1104より新しい。上幅は3.4～5.2m、下幅は1.9～3.4mで、深さは55cmである。断面形は皿状で、方向はE-3°-Nである。堆積土は2層が黄褐色シルト質砂で自然堆積、1層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は1層から土師器壺・甕、須恵器壺・高台壺（第37図2）・甕が出土している。土師器にはロクロ調整のものが含まれる。須恵器壺にはヘラ切り後ナデ調整のものがある（1）。底部には「口万」の墨書きも認められる。

【SD888 溝跡】

3区西端で確認した南北溝跡で6.8m分を検出した。SB922・986、SD892より新しい。上幅は2.1～2.7m、下幅は0.5mで、深さは132cmである。断面形はロート状で、方向はN-9°-Eである。堆積土は3層に分けられる。3層は砂を含むオリーブ粘土質シルト、2層は黒褐色シルト、1層は黒色シルトで、いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土から須恵器高台壺・甕が極少量出土している。

(4) 土壌 (第28・33・37図)

30基確認した。2区北端と建物跡や住居跡のある2・3区の中央部とに集中し、他の部分では少ない。また、2区北端のSK874～876・893と、2区中央部のSK906・909～912には各々形態的に似た特徴がある。平面形は橢円形や隅丸長方形が主体である。規模は①長軸(辺)が2.0mを越えるもの(7基)、②長軸(辺)1.0～2.0mのもの(15基)、③長軸(辺)1.0m未満のもの(8基)があり、②が多い。後述するもの以外の断面形は皿状、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSK866で須恵器甕、SK877・890で土師器甕、SK873・882・915で土師器と須恵器の甕、SK87・914で土師器の破片が各々堆積土から出土している。土師器にロクロ調整のものはみられない。

【SK872 土壌】

2区北側で確認した。SK1112より新しい。平面形は径3.4mの円形である。深さは17cmで、断面形は擂鉢状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・高坏、須恵器甕が極少量出土している。土師器坏には有段丸底の坏がある(第37図5)。高坏は脚部のみの破片である。

【SK874・875・876・893 土壌】

2区北端で確認した。これらは形態的に似た特徴を持ち、配置も雁行状で規則性が認められることから一括して述べることにする。平面形はいずれも隅丸長方形である。規模は長辺が1.1～1.4m、短辺が0.6mで、深さは38～82cmである。横断面形は箱形、逆台形のほかU字形もあるが、基本的には箱形を基調とするとみられる。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色や黒褐色シルトなどで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK882 土壌】

3区中央で確認した。SD881、SK889より新しい。平面形は橢円形である。規模は長軸が1.7m、短軸が1.1mで、深さは30cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを少し含む黒色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が少量出土している。

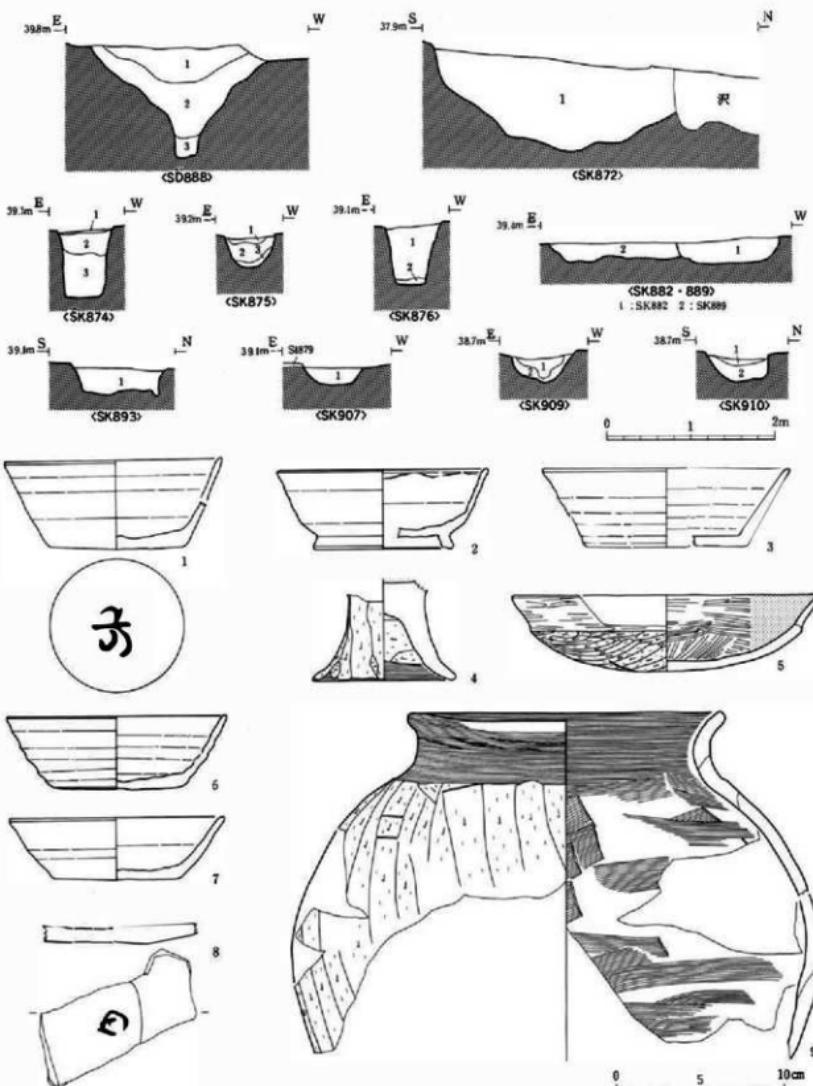
【SK889 土壌】

3区中央で確認した。SD881、SK882より古く、SK890より新しい。平面形は不整な橢円形である。規模は長軸が3.5m、短軸が1.6m以上で、深さは22cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SK906・909・910・911・912 土壌】

2区中央で確認した。これらは形態的に似た特徴を持つことから一括して述べることにする。平面形はいずれもやや不整な橢円形である。規模は長軸が0.7～1.0m、短軸が0.6～0.8mで、深さは19～40cmである。断面形は擂鉢状を主体とする。堆積土は地山ブロックと炭灰、土器片を多く含む黒褐色シルトや褐色砂質シルトなどで、人為的な埋土である。

遺物はSK906で土師器甕、須恵器坏・高盤・甕、SK909で土師器甕、須恵器坏・甕、SK910で土師器甕、須恵器坏・蓋・盤、SK911で土師器甕、SK912で土師器甕、須恵器坏・蓋が埋土から出土して



%	種別	出土遺物・部位	特徴	寸法	底径	高さ	周長	円周率	平均径深
1	漆器蓋・坪	SD465-1層	外面: ヘラ切りナメラ底部に墨書き「上万」	(33.0)	8.0	5.6	1/2	9.8	
2	漆器蓋・萬字坪	SD465-1層	外面: ハラ切りナメラ底部墨書きロゴナメラ 内面に火グスキ、粘土結晶上げ底	(32.7)	(8.4)	4.6	1/2	9.9	
3	漆器蓋・坪	SK906-1堆積土	内面: ヘラ切りナメラ	(34.8)	(9.5)	4.8	1/3	9.4	
4	土師器・萬字坪	SK907-堆積土	表面外観: モコナメラヘラナメラの複数箇所; モコナメラヘラナメラ(ナメラ状)	直径幅8.4cm					調査のみ
5	土師器・坪	SK907-堆積土	表面外観: モコナメラヘラナメラの複数箇所; モコナメラヘラナメラ(ナメラ状)	(18.5)		4.6	1/3	9.7	
6	漆器蓋・坪	SK909-堆積土	内面: ヘラ切りナメラ 内面に火グスキ	(33.2)	7.7	4.4	1/2	9.4	
7	漆器蓋・坪	SK910-堆積土	内面: ヘラ切りナメラ	12.9	7.6	3.8	2/3	9.4	
8	漆器蓋・盤	SK908-堆積土	外面: ヘラ切り-輪郭ケズリ 底部に墨書き「内」						10-11
9	土師器・盤	SKH4-堆積土	外面: モコナメラ-ヘラナメラ(ナメラ状) 内面: モコナメラ-ナメラ-ヘラナメラ	19.0			1/3	9.4	

第37図 V-2・3区溝跡、土壤断面図及び出土遺物

いる。土師器壺は非ロクロ調整が主体だが、SK906・909・912ではロクロ調整のものも混じる。須恵器壺の底部資料はいずれもヘラ切り後ナデ調整である(第37図6・7)。また、須恵器盤の底部には「内」の墨書が認められる(8)。

【SK907 土壙】

3区中央で確認した。SI1879より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が0.8m、短軸が0.7mで、深さは20cmである。断面形は擂鉢状である。堆積土は地山ブロックと焼土粒、炭粒を多く含む黒褐色砂質シルトで、人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器壺、須恵器壺が少量出土している。壺の内面には漆が付着している(図版10-23)。

【SK908 土壙】

3区中央で確認した。SI1879より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が0.9m以上、短軸が0.8m以上で、深さは25cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山小ブロックや焼土粒、炭粒を含む黒褐色砂質シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非ロクロ調整の土師器壺・壺が極少量出土している。壺の内面には漆が付着している(図版10-22)。

【SK1114 土壙】

2区中央で確認した。平面形は径0.4mの円形である。深さは45cmで、断面形は擂鉢状である。堆積土は地山小ブロックを含む褐色砂質シルトで、人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器壺(第37図9)が出土している。

4区東(第39図)

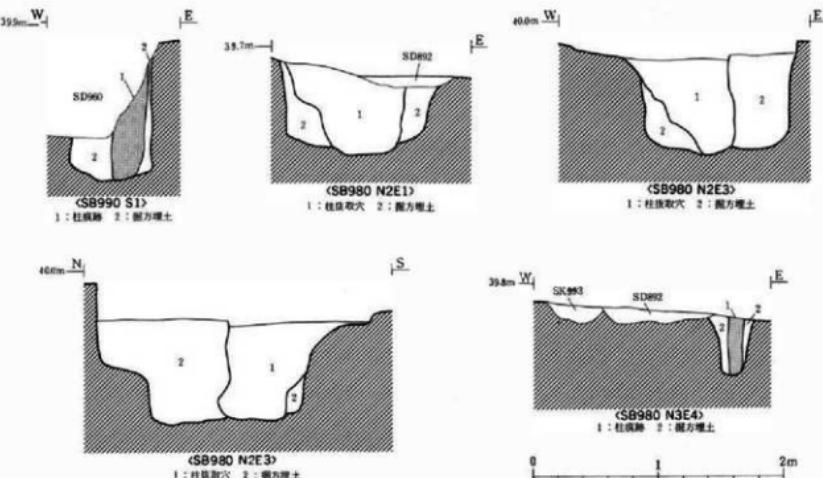
(1) 堀立柱建物跡(第38・39図)

5株確認した。東側に多い。柱穴が隅丸長方形で長辺(軸)35cm前後のものが主体だが、SB980の柱穴は1mをこえる大きなものである。方向は①ほぼ真北のもの(SB980・987・989)、②北に対し4~6°東にふれるもの(SB986・988)がある。遺物は、後述するもの以外からは出土していない。

【SB980 建物跡】

東側で確認した桁行3間、梁行1間の東西棟である。SD892・978より古い。柱穴は8ヵ所検出しており、すべてで柱の抜取穴を確認した。柱痕跡が残っていないため推測となるが、平面規模は桁行が南側柱列で総長5.6m、柱間寸法は東から1.8m、1.9m、1.9m、梁行は西妻で総長3.5mである。方向は南側柱列でE-1°-Nである。

柱穴は方形に近い隅丸長方形だが、西妻柱穴は長辺が長い。規模は西妻柱穴以外の長辺が1.2m前後、短辺が1.1m前後で、深さは深いもので91cmある。西妻柱穴は長辺が1.4m、短辺が1.0mで、深さは南西隅柱穴で110cmある。また、南西隅柱穴の北側には段がある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取穴はやや不整な梢円形が主体である。長軸は0.9~1.3m、短軸は0.6~1.2mで、深さは深いもので114cmある。地山小ブロックを含む黒褐色または灰黄褐色シルトで埋戻されている。



第38図 V-4区東建物跡等柱穴断面図

遺物は抜取穴埋土から非クロロ調整で外面に段を持つ土師器壺と須恵器壺。甕が極少量出土している。

【SB986 建物跡】

東側で確認した桁行3間、梁行2間の東西棟である。SD888・892より古い。柱穴は6ヵ所で検出しており、そのうち5ヵ所で径10~12cmの円形の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が南側柱列で総長6.7m、柱間寸法は西から1.9m、2.4m、2.4m、梁行は西妻で総長4.1m、柱間寸法は南から1.9m、2.1mである。方向は南側柱列でE-4°-Sである。柱穴は隅丸長方形や楕円形で、長辺が30~50cm、短辺が30~40cmで、深さは深いもので46cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトである。遺物は出土していない。

【SB987 建物跡】

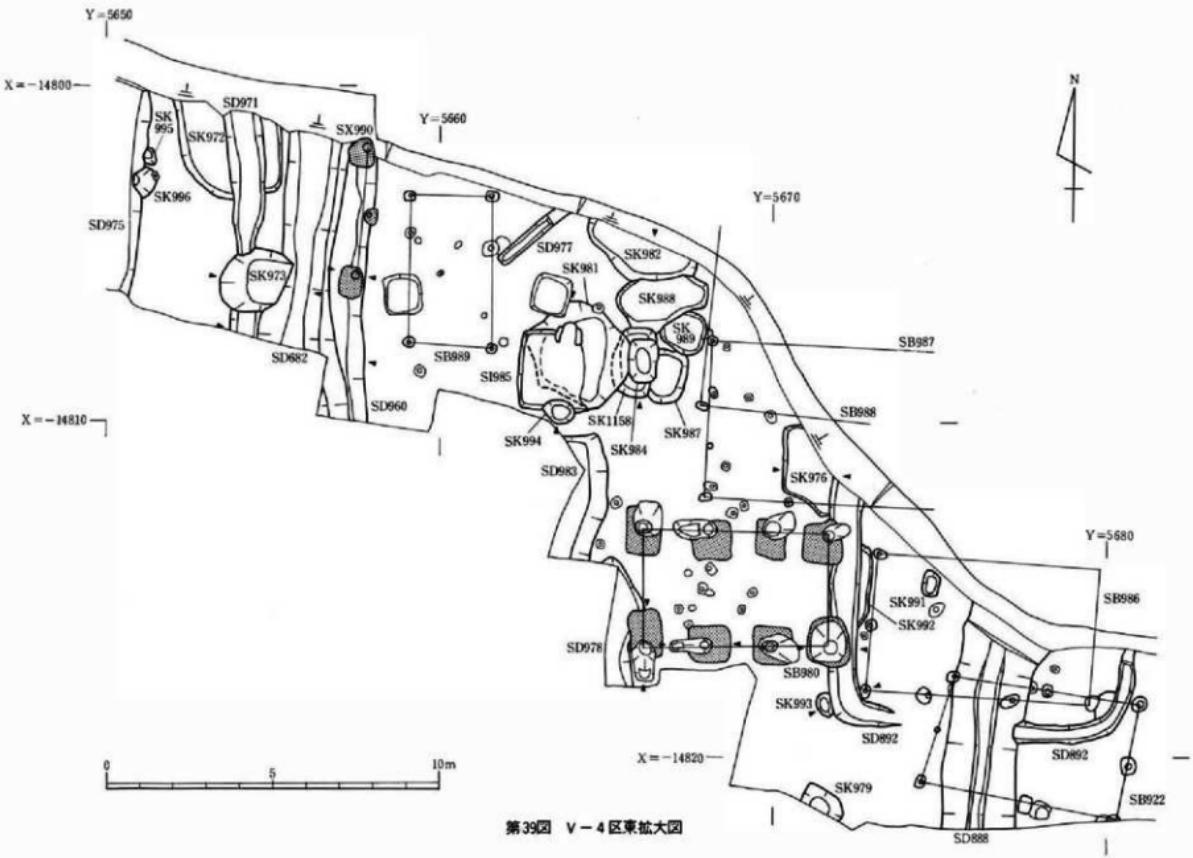
東側で確認した東西1間以上、南北3間の建物跡で、SD892より古い。柱穴は4ヵ所で検出しており、すべてで径12cm前後の円形の柱痕跡を確認した。また、南西隅柱から北に1間目では柱痕跡のみが確認された。平面規模は東西が南側柱列で総長2.5m以上、南北は西側柱列で総長4.7m、柱間寸法は北から1.6m、1.6m、1.5mである。方向は西側柱列でN-3°-Eである。遺物は出土していない。

(2) 積穴住居跡（第39・40図）

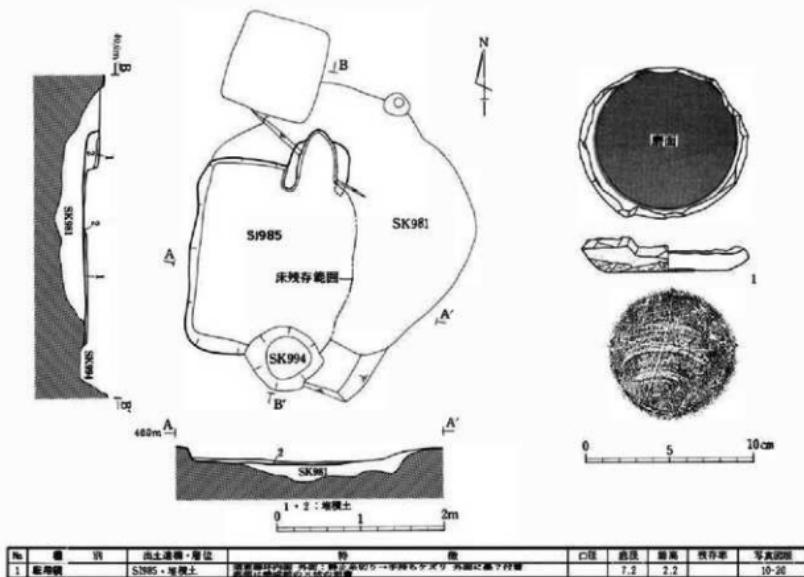
1軒確認した。

【SI985 住居跡】

中央で確認した。東側は削平されている。SK994より古く、SK981より新しい。



第39図 V-4区東拡大図



第40図 SI985住居跡

【平面形・規模】カマドの位置からみて東西2.8m前後、南北2.4mの隅丸長方形と推定される。

【堆積土】地山土の粒、焼土粒、炭粒を含む暗褐色シルト（1層）である。

【壁】斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい西辺で20cmである。

【床面】南西部は地山、他はSK981埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

【主柱穴・周溝】検出されなかった。

【カマド】北辺中央に付設されていたと思われる。壁を外側に掘込んでつくられている。側壁は黄褐色粘土で構築されている。粘土は掘込み部の両壁から張りつけられ、住居内に延びる。東の側壁では南端が削平されているが、西の側壁は長さ60cm、高さ7~17cmが残存する。堆積土は前述の1層の下に、焼土と炭粒を含む地山小ブロック主体のよい黄褐色シルト（2層）が認められた。カマドの崩落土とみられる。また、その底面では薄い炭層が確認されたが、焼面は検出されなかった。

【方向】西辺でN-5°-Eである。

【遺物】堆積土から非ロクロ調整の土器壺、須恵器壺、転用硯、鐵鑄（図版10-31）が少量出土した。転用硯は須恵器壺の転用で、体部を打欠いて整形し、内面を硯に使用する（第40図1）。なお、壺は静止糸切り後に手持ちヘラケズリ調整されたもので、底部には焼成前のX状の刻書が認められる。

(3) 溝跡及び付属施設（第39・41図）

溝跡7条と付属施設（橋？）1基を確認した。溝跡は西端に3条、中央に2条、東端から3区にま

たがって1条あり、東端のもの以外は南北溝である。また、西端のもののうちSD682・960は窯跡調査区とQ-2区で南の延長が検出されている。規模は①上幅1.5mを越えるもの(SD682・960)、②上幅0.5~1.5mのもの(SD892・971)、③上幅0.5m未満のもの(SD977)、④不明なもの(SD978・983)がある。後述するもの以外の断面形は皿状やU字形で、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD983から土師器の破片が極少量出土している。

【SD682 溝跡】

西端で確認した南北溝跡で8.4m分を検出した。窯跡調査区とQ-2区で南の延長が検出されており、全体では長さ235m以上に及ぶものとみられる。SD971、SK973より古く、SD960より新しい。以下、本調査区での所見を中心に述べる。上幅は1.5~2.3m、下幅は0.4~1.0mで、深さは90cmである。断面形はU字形で、方向はN-7°-Eである。堆積土は自然堆積の上層(1~3層)と人為的な埋土の下層(4層)に大別される。下層は地山小ブロックを含む黒色シルトである。上層は3層がにぶい黄褐色砂質シルト、2層が黒褐色シルトで、1層は灰白色火山灰の一次堆積層である。

遺物は本調査区の下層から土師器壺・甕、須恵器壺が極少量出土している。土師器壺・甕にはロクロ調整のものがある(第41図1・2)。また、須恵器壺にはヘラ切り無調整のものもみられる。その他、窯跡調査区の下層から須恵器甕が極少量出土している。

【SD892 溝跡】

東端から3区にまたがって確認した溝跡で、4区でL字状に8.0m分、3区で逆L字状に5.1m分を検出した。北側が削平されているので不明だが、4区北端で溝の方向がやや東にふれることから、方形または長方形に巡る溝であった可能性がある。SD888より古く、SB980・986、SK976・992・993・1118より新しい。上幅は0.4~1.0m、下幅は0.3~0.8mで、深さは14~27cmである。断面形はU字形で、方向は西辺で真北である。堆積土は暗褐色シルトで、自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器壺・甕、須恵器壺、高台壺・甕が出土している。土師器壺・甕にはロクロ調整のものがある(第41図3)。また、須恵器高台壺には焼成前に底部に一状の刻書をしたものがある(4)。

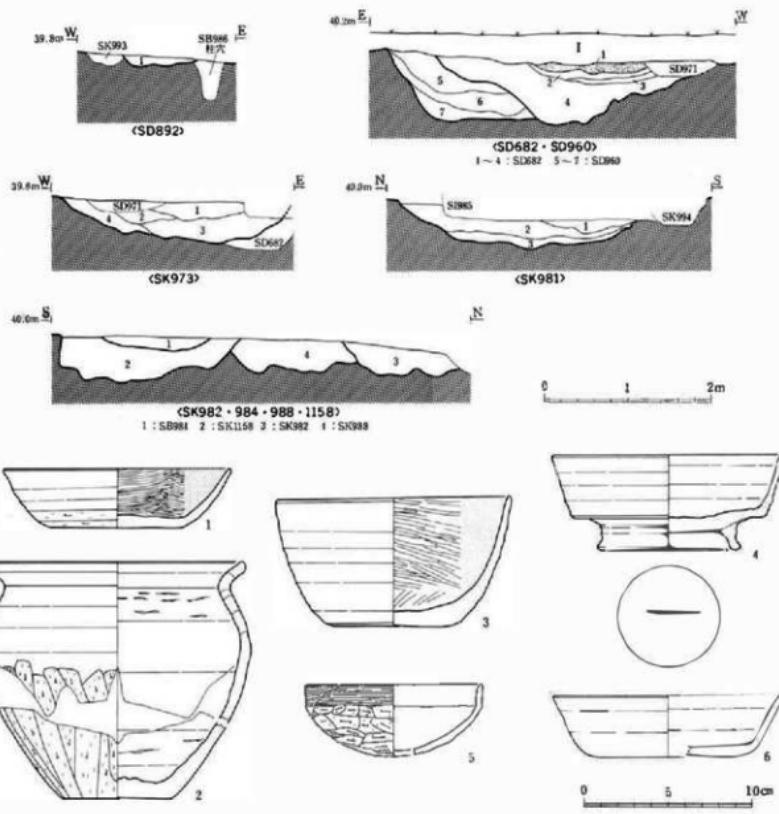
【SD960 溝跡】

西端で確認した南北溝跡で8.4m分を検出した。窯跡調査区とQ-2区で南の延長が検出されており、全体では長さ235m以上に及ぶものとみられる。SD682より古い。以下、本調査区での所見を中心に述べる。SD682に西側が壊されているため明確ではないが、上幅は1.8m以上、下幅は1.2m以上ある。深さは86cmである。断面形は逆台形で、方向はN-2°-Eである。堆積土は3層に分けられる。3層が灰黄褐色、2層が黒褐色、1層が黄褐色のシルトで、いずれも地山小ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器壺・甕が極少量出土している。土師器壺には関東系のものがある(第41図5)。

【SX990付属施設】(第38・39図)

西端にあるSD960溝跡の東壁に沿って確認した3個の柱穴跡である。SD960溝跡の東壁に沿うこ



地質	北土壌層・厚さ	特徴	口径	底径	深さ	種別	等高図面
1 上部層・柱	SB962・下層	外面: 切り落し不明・柱軸ケズリ 内面: ハラミガタ・褐色処理	13.7	7.9	3.7	柱形実芯	9-17
2 上部層・埋	SD682・下層	外面: 平滑もケズリ(ナゲ底) 内面: 地盤土施設・けい質 裏面: えん状の付着物	(15.0)	6.5	(14.3)	M2	9-20
3 上部層・坪	SD992・埋覆土	外面: ハラ切り・手持ちケズリ 内面: ハラミガタ・褐色処理	14.1	8.2	7.7	4/5	9-15
4 中部層・高台坪	SD991・埋覆土	外面: ハラ切り・高台基岩露出ロコロカニア 西側に崩落跡の一例の知跡	(14.0)	8.6	5.8	3/5	9-14
5 土壌層・柱	SD966・埋覆土	芯面承土土跡 外面: タコツバヘラケズリ 内面: マツツ	(16.7)	(4.3)	1.7	U3	9-16
6 地盤層・坪	SK981・埋覆土		(13.8)	(9.4)	3.7	U3	9-18

第41図 V-4区東溝跡、土壤断面図及び出土遺物

と、北側は不明だが東と南には展開しないこと、西側がSD682に埋された可能性があること、中央の柱穴が小さいことなどから、SD960溝跡に伴う橋跡かと思われる。

東側柱列の総長は3.7mで、柱間寸法は1.85m等間である。柱穴の平面形は隅丸長方形で、南と北の柱穴が長辺80~90cm、短辺70cmで、深さは北の柱穴で98cmある。中央の柱穴は長辺46cm、短辺42cmで、深さは63cmある。埋土は地山小ブロックを含む暗褐色シルトである。柱痕跡は円形で、南と北のものが径25cm前後、中央のものが径16cmある。遺物は出土していない。

(4) 土壙 (第39・41図)

17基確認した。住居跡のある中央に多い。平面形は梢円形とやや不整な隅丸長方形が主体である。規模は①長軸(辺)が2.0mを越えるもの(8基)、②長軸(辺)1.0~2.0mのもの(5基)、③長軸(辺)1.0m未満のもの(4基)があり、①が多い。後述するもの以外の断面形は皿状や逆台形、堆積土は黒色や黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSK976で土師器壺、静止糸切り後回転ヘラケズリ調整の須恵器壺、SK979で須恵器壺、SK987で土師器壺・壺が各々堆積土から極少量出土している。土師器はいずれも非クロロ調整のものである。

【SK973 土壙】

西端で確認した。SD971より古く、SD682より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が2.7m、短軸が1.9mで、深さは56cmである。断面形は皿状である。堆積土は4層に分けられる。4層が黄褐色、1・3層が暗褐色、2層がにぶい黄褐色のシルトで、いずれも地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非クロロ調整の土師器壺・壺、須恵器壺が極少量出土している。

【SK981 土壙】

中央で確認した。SI985、SK984より古く、SK1158より新しい。平面形は不整な梢円形である。規模は長軸が3.1m、短軸が3.0mで、深さは60cmである。断面形は皿状である。堆積土は3層に分けられる。1・3層が黒褐色、2層が黒色のシルトで、地山ブロックを多く含む人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非クロロ調整の土師器壺、ヘラ切り後ナデ調整の須恵器壺(第41図6)が極少量出土している。

【SK982 土壙】

中央で確認した。SK988より新しい。平面形は梢円形である。規模は長軸が3.5m、短軸が1.3m以上で、深さは44cmである。断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロックを含む黒色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は、埋土から非クロロ調整の土師器壺・壺、須恵器壺が少量出土している。

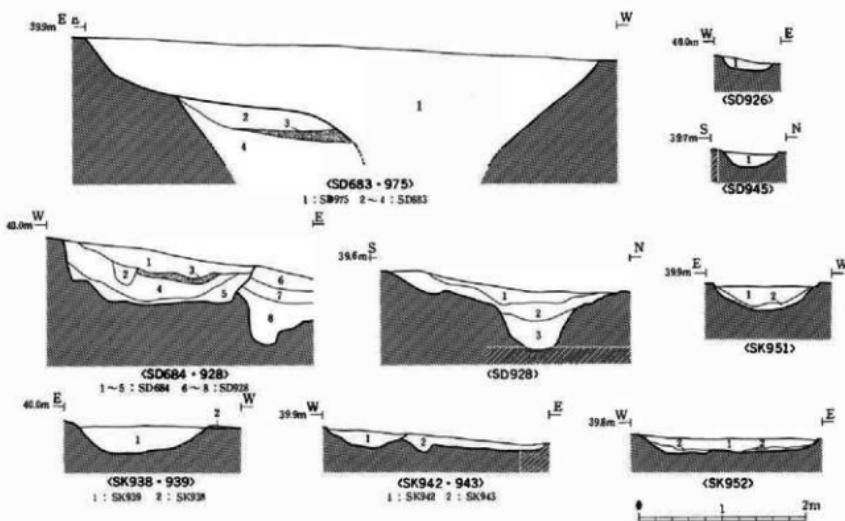
【SK1158 土壙】

中央で確認した。SK981・984より古く、SK987・988より新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸が2.2m、短軸が1.3mで、深さは58cmである。断面形は逆台形である。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

4区西 (第33・42図)

(1) 溝跡 (第33・42図)

12条確認した。東側に比較的広く分布する。南北溝が多い。このうち SD683・684は窓跡調査区とQ-2・3区で南北の延長が検出されており、SD683については前述した。規模は①上幅1.5mを越えるもの(SD683・684・928・975・1000)、②上幅0.5~1.5mのもの(SD926・944・945・999)、③上幅0.5m未満のもの(SD997-1151)、④不明なもの(SD998)がある。後述するもの以外の断面形は皿状やU字



第42図 V-4区西溝跡、土壤断面図

形などで、堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。また、遺物はSD944から非クロロ調整の土師器壺、須恵器の破片が極少量出土している。なお、SD1000は形状などから北側の沢の分岐したものと思われる。

【SD684 溝跡】

中央で確認した南北溝跡である。12.7m分を検出した。Q-3区で南の延長が検出されており、全体では長さ235mに及ぶものとみられる。SD926・928、SK929-931・933より新しい。上幅は2.2~2.4m、下幅は1.3~1.6mで、深さは78cmである。断面形は逆台形で、方向はN-13°-Eである。堆積土は4層に分けられる。4層がにおい黄褐色砂質シルト、3層が黒褐色シルト、1層が黒色シルトの自然堆積層で、2層は灰白色火山灰の一次堆積層である。遺物は出土していない。

【SD928 溝跡】

中央で確認した。SD684溝跡にT字につながる東西溝跡で、3.7m分を検出した。SD684より古く、SK931より新しい。上幅は2.7~3.0m、下幅は0.5~1.4mで、深さは94cmである。断面形は段をもつU字形で、方向はE-12°-Nである。堆積土は3層に分けられる。3層がにおい黄褐色砂質シルト、2層が灰黄褐色シルト、1層が黒褐色シルトで、自然堆積である。なお、平面上でSD684溝跡と切り合いで確認できたこと、堆積土の状況からみて、本溝跡はSD684溝跡より早く埋没したとみられる。

遺物は底面から剝片石器が1点出土している。

【SD975 溝跡】

東端で確認した南北溝跡で、7.2m分を検出した。安全のため完掘していない。SD683-997、SK995-996・1119・1120より新しい。上幅は5.5~6.0mである。下幅は3.9m未満、深さは135cm以上とみら

れる。断面形は東側に段をもつU字またはV字形と思われる。方向はN-20°-Eである。堆積土は黒色粘土質シルトで、自然堆積である。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕が極少量出土している。土師器甕にはロクロ調整のものがある。また、須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整のものがある。

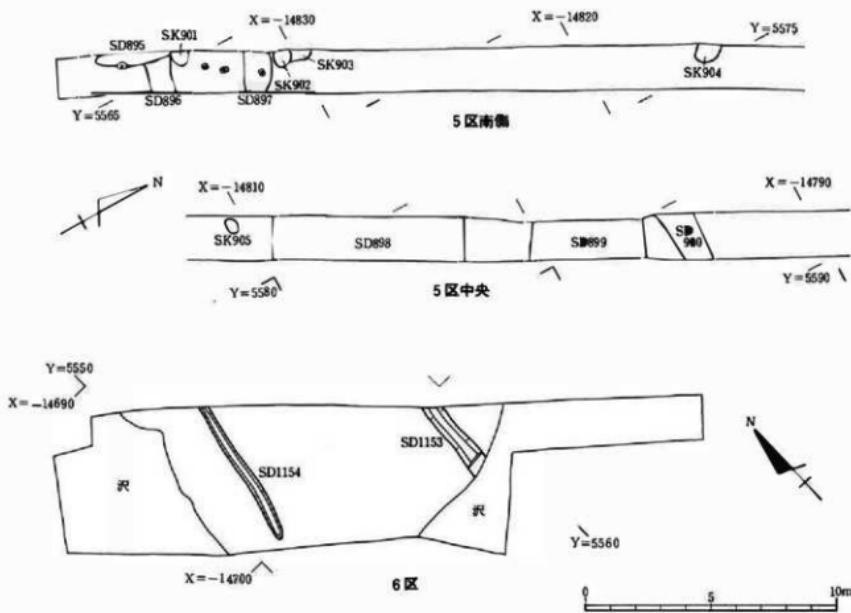
(2) 土壌 (第33・42図)

67基確認した。SD975とSD926の間に密集する。平面形は橢円形が主体である。規模は①長軸が2.0mを越えるもの(2基)、②長軸1.0~2.0mのもの(38基)、③長軸1.0m未満のもの(27基)があり、大きいものは少なく、2.0m以下のものが多い。断面形は皿状が主体で、底面が凸凹したものもみられる。深さは10~30cmの浅いものが多いが、なかには64cmもあるものもある。堆積土は黒色や黒褐色シルトが主体で、底面付近で灰黄褐色シルトが認められるもの(SK951・952など)もある。いずれも地山ブロックを多く含み、人為的に埋め戻されている。遺物は少なく、SK931で土師器の破片 SK952で織文土器と土師器の破片、SK953で土師器甕が各々埋土から極少量出土したのみである。

5・6区 (第43図)

(1) 溝跡 (第43図)

5区で6条、6区で2条確認した。5区のものは南端と中央に分布する。東西溝が主体で、南北溝



第43図 V-5・6区平面図

は SD895 のみである。規模は南端のもの (SD895~897) は上幅 0.5~1.1m と小規模で、中央のもの (SD898~900) は上幅 1.5~7.7m と大きい。確認調査部分であり、掘下げていないため下幅や深さは不明である。検出面で確認された堆積土は黒・黒褐色シルトのものが主体である。遺物は出土していない。

6 区のもの (SD1153・1154) はともに南北溝である。規模は上幅 0.3~1.0m、下幅 0.2m 前後、深さ 16~28cm と小規模である。断面形は U 字形で、堆積土は黒色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。

(2) 土壌 (第43図)

5 区で 5 基確認した。南側にまばらに分布する。平面形はいずれも梢円形、規模は 1.0m 程度の小さいものが多い。確認調査部分であり、掘下げていないため深さは不明である。検出面で確認された堆積土は、黒・黒褐色シルトのものが主体である。遺物は出土していない。

8. その他の出土遺物 (第44図)

上述した以外にも堆積土や pit などから遺物が出土している。全体に土師器と須恵器が多い。土師器は非ロクロ調整の壺・甕が主体で、関東系のもの (第44図 2) もある。ロクロ調整のものもあるが、数は少ない。須恵器には壺・高台壺・甕のほか、蓋 (8) がある。壺は圓化したものみると、ヘラ切り後ナデ調整のもの (3・4・6・10) が多いが、静止糸切り後に手持ちヘラケズリをしたもの (5) や回転糸切り無調整のもの (9) もある。また、高台壺も含めて 9~13 には底部や体部に墨書きや刻書がある。墨書きのうち 9 は「下」、10 は「本」、11 は「□人々」(則天文字) と判読した。刻書は 12 が焼成前の X 状の刻書、13 は焼成後の刻書で「太」である。

以上のほかでは繩文土器、弥生土器 (1)、瓦、硯、鉄製品、石製品 (砥石、剝片石器) が出土しているが、出土量は極少ない。硯には転用硯のほか、円面硯がある (図版 10~21、V-3 区検出面出土)。

III. 考察

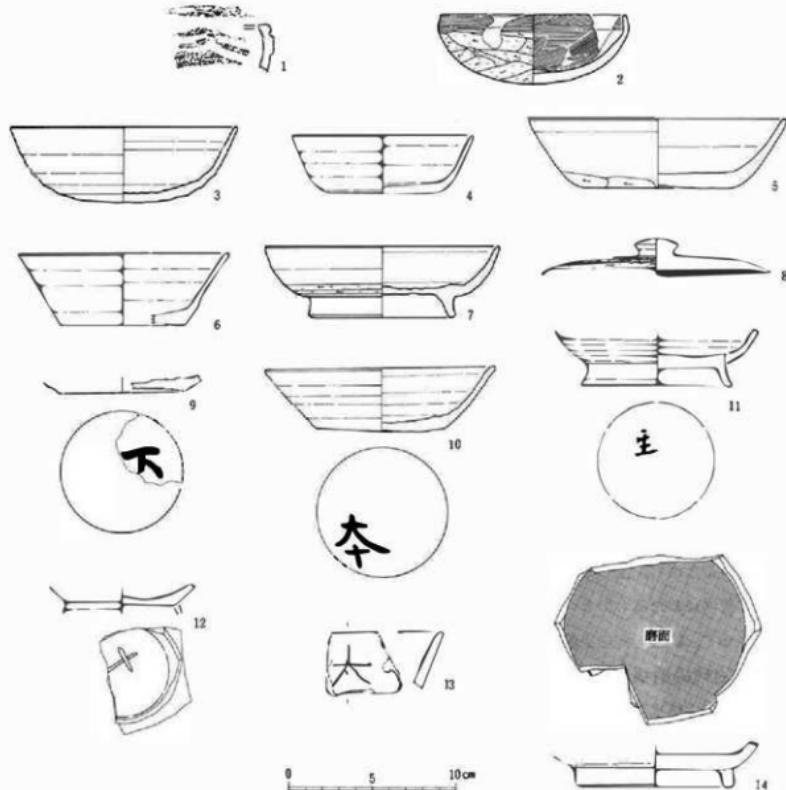
今回の調査区は広範囲に及ぶ。検出遺構は堀跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壤などであり、遺物も土師器、須恵器を中心に多数出土した。遺構・遺物の分布は調査区東側が濃密で、西側では希薄である。そこで以下では東側と西側に分けて検討する。

A. 東側調査区 (N・O・P・Q-1~4・U・V 区)

堀跡 2、掘立柱建物跡 23、竪穴住居跡 10、井戸跡 6、溝跡 143、土壤 307 を検出した。また、遺物の大部分がこの東側調査区から出土している。なかでも土師器と須恵器が圧倒的に多い。

1. 遺物について

繩文・弥生土器、土師器、須恵器、瓦、硯、鉄・土・石・木製品がある。その大半は東側調査区でも V-4・Q-2 区の SD960 溝跡の東側で出土しており、特に U-1・2 区、V-2~4 区東の掘立



番号	種別	出土場所・部位	特徴	口径	底径	高さ	保存状況	写真図版
1	弥生土器	V-4区・Fv65	内: 茶文・低鉢文 横走溝(「L」) 外: 山字彫				一部	10-19
2	土器壺・环	V-2区 Pcs5・配溝部	外面: ヨクナゲで、タカツリ 内面: タコナゲ・ナデ	(11.0)		4.2	1/2	9-19
3	須恵器・环	N-4区・奈緑	外面: ハラ切り・マツテ 内面にタガスキ	(13.6)	(7.6)	4.6	2/5	10-1
4	須恵器・环	N-1区・奈緑	外面: ハラ切り・マツテ 壁面にタガスキ 内面全体に網状	(11.8)	6.8	3.6	2/5	10-2
5	須恵器・环	O-1区・被出面	外面: ハラ切り・マツテ 壁面にタガスキ	(14.4)	9.8	4.2	3/4	
6	須恵器・环	U-2区・Fv16	外面: ハラ切り・マツテ 口縁部に使用痕 底: 大腹脚軒	(12.6)	(7.4)	4.35	1/2	10-3
7	須恵器・高台环	N-2区・奈緑	外面: ハラ切り・マツテ 脚部後回合後クロナゲ 井附部に自然転	(14.0)	8.9	4.0	4/5	10-4
8	須恵器・环	N-4区・被出面	底面つまみ(柱) 6cm				一部	
9	須恵器・环	N-4区・奈緑	外: ハラ切り・マツテ 口縁部に使用痕 底: 大腹脚軒	(14.0)	(7.4)	4.35	1/2	10-3
10	須恵器・环	N-5区・奈緑	外: ハラ切り・マツテ 底部に巻帯「主」				一部	10-12
11	須恵器・高台环	N-4区・奈緑	外: ハラ切り・マツテ 底部に巻帯「主」	13.6	7.7	3.8	はがれ形	10-5・15
12	須恵器・高台环	N-4区・奈緑	外面: 切り離し不規則・高台脚のクロナゲ 底部に横成筋のX状の刻痕	(9.0)			一部	10-13
13	須恵器・环	V-3区・被出面	口縁近くの外縁部に横成筋の「主」				一部	10-14
14	軒用板	O-1区・被出面	須恵器高台内面外壁: ハラ切り・高台接合後のクロナゲ 底面に横付筋		9.6			

第44図 その他の出土遺物

柱建物跡と竪穴住居跡周辺に多い。以下、遺物の大部分をしめる土師器と須恵器について述べる。

土師器は壺、高壺、甕、櫃、須恵器は壺、高台壺、蓋、高盤、甕、壺などがある。破片資料がほとんどで、量的には壺と甕が多い。以下では特徴をとらえやすい壺を中心に年代的な様相をみてみるとする。なお、土師器壺には関東系のものもあるが、ここでは在地のものについて述べる。

土師器壺には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがある。主体をしめる非ロクロ調整の壺は、有段のものが多い。それらは丸底で、口縁部は内湾気味であり、内面に段や屈曲がないものが主体である（第11図5、第32図4）。一方、ロクロ調整の壺は少なく、底部切り離し後に回転・手持ちヘラケズリが施されるものが主体をしめる（第41図1・3）。以上のような特徴の土師器壺は、東北地方南部や県内の土師器編年（氏家1957、加藤1989）からみて、7世紀末から9世紀前半のものといえる。

須恵器壺には底部切離しが静止糸切りのものとヘラ切りのものがある。前者の器形はほとんどが皿形とみられ、切離しののち手持ち・回転ヘラケズリが施されるものが主体である。後者の器形は皿形のもの（第11図3、第41図6など）と、底径がやや小さく器高も少し高い丸形に近いもの（第34図1、第37図1など）がある。また、切離し後に回転ヘラケズリ・ナデ調整が施されるものと、無調整のもののがみられる。以上のような特徴の須恵器壺は、色麻町日の出山窯跡や利府町硯沢・大沢窯跡、築館町伊治城跡SI173竪穴住居跡の須恵器壺などに類例がある（古川1993、宮城県教育委員会1987、菊地1991）。年代的には8世紀～9世紀初頭の須恵器壺の特徴をもつといえる。

なお、須恵器には体部がやや内側にくびれ、口縁部が直立する壺、胴部が算盤玉状の広口壺など7世紀に遡る特徴をもつものが少しある。広口壺は色麻町色麻古墳群に類例があり、年代は7世紀後半とされている（古川1985）。

以上のことから出土した土師器・須恵器壺は8世紀代を中心とし、やや広くみれば7世紀後半から9世紀前半にわたるものといえる。ところで、他の遺物も土師器・須恵器壺と分布状況は同様である。したがって、縄文・弥生土器、剥片石器以外のものは概ね同じ頃のものと思われる。

2. 古代の遺構について

①堀・掘立柱建物跡

古代の堀跡は2条、掘立柱建物跡は20棟検出した。V-4・Q-2区SD960溝跡の東側にある。

《年代》以下のものは遺構の重複・位置関係や方向などから、ある程度限定できる。

【SB625】8世紀代とみられるSD611に近接し、方向（南寄）が揃うことから8世紀代と考えられる。

【SB886】8世紀末～9世紀初頭のSI841竪穴住居跡より古く、それ以前とみられる。

【SB980】SD892より古い。SD892はロクロ調整で手持ちヘラケズリが施された土師器壺（第41図3）が出土したことから9世紀初頭頃のものとみられる。よって、SB980はそれ以前と考えられる。また、近接する7世紀後葉～8世紀のSD960、SX990と方向が揃うので同時期とみられる。

【SB986】SD892より古く、9世紀初頭以前とみられる。

堀や他の建物は遺物や遺構の重複関係が少なく、年代は特定できない。しかし、上記の建物の近くにあり、方向も類似することや、周辺から多く出土する遺物の年代観などから、それらも上記の建物と同じ頃のものと思われる。

《規模・構造・建替・柱穴》調査区の制約のため全容がわかるものは少ない。検出状況から桁行3間、梁行2間程度で、床面積が30m²以下の小規模なものが主体とみられる。構造は側柱建物のみであり、建替もSB627にあるのみである。柱穴は平面形が隅丸長方形を基調とし、長辺が50cm以下の掘方のものが主体だが、SB980の掘方は長辺1.1～1.4m、短辺0.85～1.2m、深さ1.0m以上あり、本遺跡

の政府内部の建物のものに匹敵するほど大型である。

《重複関係・方向》掘立柱建物跡同士の重複が少ないとや、竪穴住居跡と重複があることから、竪穴住居跡の項で述べる。

②竪穴住居跡

10軒検出した。すべてSD960溝跡東側のU・V区にある。残存状況はいずれもよくない。

《年代》以下のものは遺物や遺構の重複関係からある程度限定できる。

【SI804】主柱穴の掘方埋土からロクロ調整の土師器が出土しており、9世紀以降と考えられる。

【SI841】住居の掘方埋土から壇形に近いヘラ切り無調整の須恵器壺(第30図1)が出土しており、8世紀末~9世紀初頭とみられる。

【SI842・843・885】8世紀末~9世紀初頭のSI841より古く、それ以前とみられる。

【SI868】床面からロクロ調整の土師器甕、住居を埋め戻した土から壇形に近く、ヘラ切り後ナデ調整の須恵器壺(第34図1)が出土しており、9世紀初頭頃のものと考えられる。

【SI985】皿形で、ヘラ切り後ナデ調整の須恵器壺(第41図6)が出土した8世紀後半のSK981より新しく、それ以降とみられる。

他の住居は遺物や遺構の重複関係が少なく、年代が特定できない。しかし、上記の住居跡と同様にU・V区にあり、方向も類似すること、周辺から多く出土する遺物の年代観などから、それらも上記の住居と同じ頃のものと思われる。

《平面形・規模》残存状況等からすべて隅丸長方形とみられる。規模は一辺が5.0m前後の大きいものと3.0m前後の小さいものがあり、床面積は前者が20m²前後、後者は10m²以下である。

《構造》すべて掘方埋土を床面とする。主柱・周溝は小さい住居にはない。大きい住居で主柱がわかるものはいずれも4本である。周溝は全辺に巡るものが多い。壁沿いに板状の壁材痕跡があるものと、丸材または割材を並べていたとみられるものとがあり、前者が主体である。

カマドは北にあるものが3軒、東にあるものが1軒である。残存が悪く詳細は不明であるが、SI887・985のカマドは壁を掘込んで構築されており、関東型のカマドに類似している。関東型のカマドは志波姫町御廟堂遺跡や宮崎町東山遺跡のほか、本遺跡内にも類例があり、壁を掘込む構築法や側壁等の構築材に白色粘土を使用するなどの特徴がある(村田2000)。また、7世紀後葉~8世紀前半に盛行したとみられている。SI985のカマドの構築材が黄褐色粘土である点は、白色粘土を使用する関東型とは異なる。しかし、これはSI985の年代が8世紀後半以降なので年代差によるものかもしれない。よって、ここでは壁を掘込む構築法を重視して、関東型のカマドとみておきたい。

《方向・重複関係》掘立柱建物跡もあわせて検討する。A:北で西に振れるもの、B:ほぼ真北のもの、C:北で東に振れるものに大別できる。数的にはA-2棟と3軒、B-8棟と1軒、C-10棟と5軒でB・Cが多い。また、重複関係はC→B(SB988→SB987)、C→A(SI885→SI842→SB886→SI841、SB918→SI879)という関係が認められる。AとBの関係は不明だが、官衙内部の小館地区では第II期以降にC→B、城内地区ではB→Aの傾向がある(天野ほか2000)ので、大きくはC→B→Aへと変遷すると推定される。

③井戸跡

古代とみられるのは堆積土に灰白色火山灰を含む N-4 区の SE551 のみである。確認調査部分であり、掘下げてないため詳細は不明である。

④溝跡

古代の溝跡は多数あるが、性格・年代などの詳細がある程度わかるものは SD611・661・682～684・692・960・928 のみである。それらは後述するような性格から I 類 (SD611・661・960) と II 類に (SD682～684・692・928) に分けられる。各々について述べる。

《I 類》 SD611 は東西溝、SD661・960 は南北溝である。今回確認できた範囲では、南北溝は各々長さ 175m 以上と長い。SD960 には橋跡も付属する。ところで、SD661・960 ではそれらを境に遺構・遺物の密度が大きく異なる。V-4 区の SD960 周辺では東に建物・住居があるが、西はない。遺物も東に多く、西は極めて少ない。Q-1 区の SD611 と 2 区の SD960 周辺では SD611 の東の L-M 区(昨年調査区) に建物が多いが西ではなく、SD960 の西では溝や土壤も少ない。遺物量もこれに准じる。なお、I 類の方向はいずれもほぼ真北・東で整合性が高い。遺物は SD611・661 が多い。

これらの溝の性格は長さや方向の整合性、周囲の状況からみて、場を画する溝と考えられる。SD611 は南側の状況が不明だが、溝自体の特徴は SD661・960 に類似しており、同じ性格と思われる。年代は SD611・661 では皿形で回転・手持ちヘラケズリの壺、皿形でヘラ切り後ナデ調整の壺(第11図 1～3、第14図 3・5・6) が出土しており、8世紀代とみられる。SD960 では丸底で口縁部が直立する関東系土器壺(第41図 5) が埋土から出土している。関東系土器壺の変遷(村田2000)によると、7世紀後葉～8世紀前半の壺とみられる。また、SD960 は後述の SD682 より古いので 7世紀後葉～8世紀代と考えられる。

《II 類》 SD692・928 は東西溝、SD682～684 は南北溝である。今回確認できた範囲では、南北溝は各々長さ 230m 以上と長い。いずれも I 類で最も西にある SD960 のさらに西側にある。II 類の溝周辺には建物・住居がなく、II 類の溝が主要な遺構である。堆積土は基本的に自然堆積である。方向は南北溝が北に対し東、東西溝が東に対し北にふれる。遺物は少ない。

II 類は長さの点は I 類と同じだが、周囲の状況の違いから I 類と異なる性格が考えられる。周囲に建物・住居がなく、長さのある溝の類例は、隣接する上代遺跡に 430m 以上に及ぶ南北溝がある(菅原1997)。場所は本遺跡東側の段丘下の沖積地で、溝の形状・規模・堆積土・遺物出土状況は II 類とほぼ一致する。また、溝の性格は周囲が水田であることから基幹水路とみられている。こうした隣接地での類例から、II 類も水路と考えられる。ただし、今回の調査区は開田時における削平が著しいため、II 類が水田に伴うものかは不明である。よって、耕作域に伴う水路とみておきたい。年代は SD928 以外では灰白色火山灰の一次堆積が認められること、SD928 が SD684 より古いことから、すべて 10 世紀前葉以前である。また、SD682 では回転ヘラケズリ調整の土器壺とロクロ調整の土器壺が出土しており(第41図 1・2)、9世紀初頭が上限とみられる。

⑤土壤

古代とみられる土壤は多数ある。その分布に注目してみると①住居近辺に集中するもの(U・V 区住

居周辺)、②まわりに建物や住居がないところに密集するもの(N-4区、Q-1区東、V-4区西)、③その他のものがある。このうち②・③については出土遺物も少なく、年代や性格等の詳細は不明とせざるをえない。以下では、①のU・V区の住居近辺に集中する土壤について述べる。これらは分布状況から住居と密接な関わりをもつと考えられる。

住居近辺の土壤は梢円形で径1.0m前後のA類と、A類より大きく、形も不整な梢円形や隅丸長方形のB類がある。A類のうちSK906・909~912・1114はV-2区SI868近辺にある。これらは黒褐色シルトや褐色砂質シルトで人為的に埋め戻されており、埋土には炭粒や土器片が多く含まれる。遺物は土器部にはロクロ・非ロクロ調整のものが共にあり、須恵器壺には塊形に近く、ヘラ切り後ナデ調整のもの(第37図3・6)がある。年代は8世紀末~9世紀初頭と思われる。その性格は住居の近くに分布していること、埋土の状況などからごみ穴の可能性も考えられる。

B類は住居近辺に多いこと以外にこれといった特徴がなく、詳細は不明である。ただし、U-2区SI841近辺のSK845は、形状や規模から竪穴遺構の可能性がある。竪穴遺構の類例は多賀城市山王遺跡にあり、本遺跡でも昨年の調査で7基検出した。その性格については工房や作業所(佐藤ほか1997)に加え、収蔵施設(物置)の可能性も考えられている(村田ほか2000)。

3. 奈良・平安時代の官衙外側(南西部)の様子

《官衙南西外側の様子》遺構・遺物のあり方からSD960南北溝を境に大きく東西に分けられる。東側は建物・住居があり、遺物も多いことから集落域と考えられる。西側は建物・住居が認められず、溝や土壤すら少ない調査区もある。遺物も極めて少ない。主要な遺構はII類の溝であり、それらは上代遺跡の例から水路とみられる。よって、西側は耕作域ととらえられる。その場合、東西を分ける位置にあるのがSD960であり、この溝は集落域と外側とを画すものといえる。したがって、官衙南外側の集落の西の広がりはSD960までと考えられる。なお、V-4区のSD960は小館地区政府のほぼ真西230mに位置する。

ところで、奈良・平安時代の官衙外側の集落で、集落を画す施設をもつ例には大和町一里塚遺跡、古川市権現山遺跡がある。両遺跡では多数の建物や住居が大溝(壕)と塙で囲まれており、環濠集落ととらえられている。大溝(壕)と塙の区画施設は山王遺跡でも検出されている。こうした例と今回検出の遺構を比べるとSD960は長いが、幅や深さは大溝といえるほどではない。塙も未検出である。また、検出されたのは今のところ西側のSD960のみで、他の三方の状況は不明である。よって、一里塚・権現山遺跡のような環濠集落と本遺跡は現段階では同列に論じられない。規模の小ささからみて、むしろ異なるあり方の可能性がある。その位置付けは来年度の調査をはじめ、周囲の調査の進展をまち、今後の課題としたい。

《集落内の様子》昨年の調査の結果、名生館官衙遺跡の南正面が一般集落とは異なり、井戸を伴う建物群が展開すること、そこに郡司や郡家出仕の役人層などの人々が集住していたことが明らかになっている。それに今回の調査成果もふまえ、官衙の南西外側の集落の様子を述べる。

まず、本調査ではV-4区で大型の柱穴をもつSB980建物を検出した。この建物は集落域の西を画すSD960とその入口にあたる橋跡SX990に近接し、方向もほぼ揃うことから、それらと同時期とみら

れる。建物としては3間×1間で、平面規模も約20m²と大きくない。だが、柱穴の規模は昨年検出の郡家役人層の住まいとした建物群の柱穴を上まわり、名生館官街遺跡の政庁の建物に匹敵するほど大型である。したがって、昨年の建物群とは異なる性格が考えられる。周囲の状況が明確ではなく、その性格も不明とせざるをえないが、政庁建物に匹敵する大型の柱穴や、集落域を画す溝とその橋に近接する位置からみて、官衙集落の入口に設けられた郡家に付属する公的施設の建物の可能性がある。

次に、U・V区で竪穴住居跡が10軒検出されたことから集落内における庶民の生活空間の存在が指摘できる。特筆されるのは関東型とみられるカマドを持つ住居があることである。周辺では関東系土器類も出土しており、居住者には関東出身の移民やその子孫が含まれていたと考えられる。また、今回出土した鉄製品6点のうち4点が住居、1点が住居より新しい土壤から出土しているのも注目される。種類は鎌と小刀であり、それらから軍事に関わる居住者の存在も想定できる。

以上のことから、官衙南側の集落には郡家役人層の住まいのほか、庶民の生活空間もあり、さらに郡家に付属する公的施設が存在した可能性もある。

ところで、集落内の建物群や住居の分布は一様ではない。V-3区、V-4区東では建物や住居が濃密だが、U区やV-2区では建物や住居が点在する。また、昨年の調査したL・M区やN-2・3区では建物や井戸は多いが住居はないのに対して、U・V区では建物と住居が検出され、井戸はほとんど認められない。よって、集落内での場の利用状況は一様ではなく、ある程度使い分けされていたと考えられる。特にL・M区、N-2・3区とU・V区での住居・井戸の有無という違いは、郡家役人層と庶民という居住者の違いを示し、同時に両者の居住域の差を示すとみられる。方格地割が施された多賀城下（山王遺跡）では、東西大路に面した区画に国司ら上級役人の邸宅があり、階層の低い人々はその裏に居住したととらえられている（菅原ほか1996）。遺構のあり方の差からみて、同様のことが名生館遺跡の集落内でも同じことが考えられる可能性がある。

B. 西側調査区（Q-5～9・R・S・T区）

検出された遺構は、掘立柱建物跡4、溝跡19、井戸跡2、土壤83である。しかし出土遺物が少なく、年代や性格が分かるものはほとんどない。東側調査区では、SD960南北溝を境に西側は古代の遺構の密度が非常に低くなる。そのさらに西の本調査区では明確に古代の遺構はなく、東側とは時代や性格の異なる遺構が検出されている。以下では、その中でもまとめて検出された土壤について記述する。

①類、②類は落とし穴である。時代を特定できる遺物は出土していないが、同じ調査区から鑿かに縄文土器が出土していることや多くの類例から推定すると縄文時代の可能性が高い。

③類は西側調査区の中でも南東部に多く見られる。中でもQ-9区のSK699は人為的に埋め戻され、底面からは須恵器壺が正位で、非クロクロ調整の土師器壺が伏せられた状態で出土しており、墓壙と考えられる。また③類は、多数の木棺墓が検出された古川市新谷地北遺跡（木皿・早川1992）にも類似しており、墓壙と推定できよう。③類からは年代を特定できる遺物は出土していないが、SK699の出土遺物及び新谷地北遺跡の年代より、8～10世紀の可能性を指摘しておく。

④類は、平面形が長方形や方形を基調とし、大きさでa、b類に細分できる。長軸方向を南北にし、

長辺の一方の壁がオーバーハングするという点が最大の特徴であり、その多くは標高の高い西側の壁である。対応する壁は緩やかに立ち上がり、a類の底面は傾斜を持ち、b類は段を持つものが多い。この付近は開田の際に50cm以上削平されており、本来の深さは70~90cm以上あったと思われる。堆積土は明確に人為堆積と判断できる下層と、自然か人為堆積か判断できない上層に大別でき、いずれもオーバーハングした部分に入り込むように斜めに堆積している。上層は●類土壤の杭状痕跡と堆積土が類似しており、板材痕跡、あるいは板材の抜き取り痕跡の可能性も考えられる。a類、b類と細分されたが、形態や堆積土の類似性、それぞれ重複しないことなどから同じ時期のものである可能性が高い。そして時期はSK720の1層から天王山式土器の破片が出土しており、弥生後期以降と見られる。このような特徴を持つ土壤はこれまでまとまって検出された例がない。今回のような限られた調査区では、時代や性格などについて判断できる資料を十分得ることはできず、類例の増加を持ち今後の検討課題としたい。

IV. まとめ

1. 今回の調査区は古代玉造郡家とみられる名生館官衙遺跡の南西外側に位置する。検出遺構は塙跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡、土壤で、遺物は7世紀後半~9世紀前半の土師器・須恵器を中心に多数出土した。遺構・遺物の分布は調査区東側が濃密、西側は希薄である。
2. 東側調査区は遺構・遺物の分布から南北溝SD960を境にさらに東西に分けられ、東側には掘立柱建物跡や竪穴住居跡が多数分布し、遺物も多いことから集落域とみられる。西側は遺構・遺物が少なく、水路が検出されたことから耕作域と考えられる。そしてSD960は官衙南西外側の集落の西を画するものととらえられる。
3. 昨年の調査では官衙南外側における郡家役人層の住居域が明らかになった。そして今回の調査では、東側調査区において竪穴住居跡が検出され庶民の居住域の存在が明らかになった。さらには、その中において官衙政庁の建物に匹敵する規模の柱穴を持つ掘立柱建物跡が検出されたことにより、官衙南外側には郡家付属の公的施設も存在した可能性も考えられた。また、掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸跡などの遺構の構成が昨年と今年の調査区では異なることから、郡家役人層の居住域、庶民の居住域など官衙南外側ではある程度の場の使い分けがなされていたと推定される。
4. 西側調査区からは土壤群がまとまって検出された。性格が分かるものでは縄文時代の落し穴と8~10世紀の墓壙がある。

第1表 游标属性表

第六章 國際化政策

通名	区	平野地	地名 [m]	標高 [cm]	主柱穴	風	溝	セイマツ	方	角	その他	監督	関係
S184	U1	鶴見丘陵地	4.3×4.6 備他	-	4本 ほむね	北北東	北北中央	N-17°E	壁面六角柱		S0804 - S0805		
S184	U2	鶴見丘陵地	(4.7)×4.4	-	14本 ほむね	西北、北北、東北偏西	愛村鹿庭町	N-5°W	中央斜面端部		S0804-S0806 - S0807-S0808		
S184	U2	鶴見丘陵地	(4.6)×3.5	-	14本 ほむね	西北、北北、東北偏西	愛村鹿庭町	N-25°E			S0805 - S0802 - S0806, S0801		
S184	U2	鶴見丘陵地	(4.6)×1.7 以上	-	14本 ほむね	西北、北北、東北偏西	愛村鹿庭町	E-9°N			S0804 - S0804		
S185	U2	鶴見丘陵地	3.13×1.9 以上	-	6本 ほむね	西北、北北	愛村鹿庭町	N-26°E			S0803 - S0802		
S186	V2	鶴見丘陵地	3.1×2.9	22	黒し	廻し	北北-北	N-6°W	壁面六角柱		S0806 - S0808 - S0806		
S187	V3	鶴見丘陵地	4.8×1.5±2	-	-	西北	西北	E-4°N			S0803 - S0817 - S0803	関係	
S188	V3	鶴見丘陵地	(3.8)×2.7±3	-	14本 ほむね	南-南東		N-11°E					
S188	V3	鶴見丘陵地	(5.6)×2.2±2	6	-	南-南、南東	愛村鹿庭町	東北偏東	開削部	東東	S0817 - S0816, S0819 - N8		
S189	V3	鶴見丘陵地	(7.7)×2.4	20	黒し	廻し	北北-北	N-5°W	壁面六角柱		S0818 - S0816, S0816		

共产党宣言

遺傳子名	近縁種名	動植物形	概要(長軸×短軸mm)	原産地(州)	産業利用	地理上などその他の特徴
SE530	N4 丸く方型	楕円形	1.5×1.12	SE531～SE537	浜田市白浜川アブロックを含む瀬戸内海シルト主生	
S553B	N5 柳葉型	楕円形	1.2×1.1		瀬戸内シルト主生	
S553B	N5 柳葉型	楕円形	1.5×1.2		瀬戸内シルト主生	
SE542	P1 円形	楕円形	0.8×0.8	SD611～SD612	上層・地山ブロックを多量に含む白浜泥質土質シルト(人為)、下層・白色・褐灰色色砂質シルト(自然)	
SE603	P1 円形	楕円形	0.8×0.8		上層・地山ブロックを多量に含む白浜泥質土質シルト(人為)、下層・白色・褐灰色色砂質シルト(自然)	
SE744	S2 円形	ヨーロッパ	0.4×0.4	SD613	地山由ブロックを多く含む白色シルト、底層・白色色砂質シルト(人為)	
SE755	S3 円形	楕円形	0.25×0.25	140	上層・灰色色シルト(自然)、下層・地山由ブロックを多く含む白色色砂質シルト(人為)	
SE755	S3 円形	楕円形	0.1×0.9	800	上層・白色色シルト(自然)、下層・地山由ブロックを多く含む白色色砂質シルト(人為)	

標註屬性表 1

主要土壤属性表 5

測定者	区	平面形	輪郭(長軸×短軸cm)	周長(cm)	角 座 間 距	堆積土などの特徴
SK084	V4	圓角六角形	直状 1.3×0.9	13	SK083→907→1114→SK084	白色粘土ブロックを多く含む墨褐色シルト(入為)
SK087	V4	圓角六角形	透円形 1.6×0.9以上	18	SK087→SK089→958→SK094	黑色シルト主体
SK088	V4	不規形	透円形 2.7×1.3以上	33	SK082→981→SK088→SK1158	堆積土と白色粘土をブロック状に含む黑色シルト(入為)
SK093	V4	方形	透円形 1.45上×3.75上	26	SK087→SK090→SK098	黑色シルト主体
SK193	V4	圓角六角形	直状 4.8×0.9	7	SK098→SK099	黑色シルト主体
SK095	V4	圓形	直状 2.55上×2.33上	1	SK099→50902	黑色含 砂質シルト主体
SK095	V4	圓形	直状 4.7×0.3	16	SK099→50902	褐色ブロックを多く含む濃褐色シルト(入為)
SK094	V4	千葉型	直状 1.9×0.8	19	SK091→SK096	褐色ブロックを含む灰色シルト(入為)
SK096	V4	圓形	直状 0.95上×0.71上	14	SK099→50903	黑色シルト主体
SK096	V4	圓形	直状 0.92上×0.45上	12	SK099→50973	黑色シルト主体
SK019	V4	圓形	直状 1.3×0.3	17	SK019→50975	褐色ブロックを多く含む濃褐色シルト(入為)
SK110	V4	千葉型	直状 1.7×0.5	9	SK1101→SK1125→50975	褐色ブロックを多く含む濃褐色シルト(入為)
SK018	V4	圓角六角形	透円形 2.2×1.3	16	9387-938→53018→SK018	褐色ブロックを多く含む濃褐色シルト(入為)
SK081	V3	圓形	0.71上×0.8	SD096→SD095→SK061	黑色シルト主体	
SK087	V3	圓形	0.7以上×0.7	5K087	黑色シルト主体	
SK083	V3	圓形	0.53上×0.8	SK083→SK098	黑色色シルト主体	
SK084	V3	圓形	0.612上×1.0		黑色シルト主体	
SK084	V3	圓形	0.7×0.5		黑色シルト主体	

第四章 大崎窯跡の確認調査

I. 発見された遺構と遺物

窯は廃窯後の幾度かの開田によって完全に削平されており、畦や水路に多量に散乱する破片や窯道具によってのみその存在が知られていた。今回、近世以降の遺構として、窯跡1基、溝、土壌多数、井戸跡2基などを検出した。しかし調査の性格上平面を確認したにとどまり、掘り下げ等の精査は行っていないため詳細は不明である。また、遺物のほとんどは、開田時に形成された、窯跡周辺に分布する焼土、窯壁破片、窯道具、陶器破片などを多量に含む二次堆積土中から出土している。したがって遺物の記述は、その中から器形、器種などを推定できるもののみ抽出して行った。

【SR01 窯跡】

燃焼室を確認した。平面形は半円形を呈し、最大幅は奥壁の部分で3.75m、奥行きは1.3mである。外壁及び焼成室との間の奥壁は長さ24~27cm、幅15~20cmの煉瓦で構築されている。煉瓦の厚さは上部が削平されているため不明であるが残存高で最大約20cmである。煉瓦は深さ約15cmの掘方の上に積み上げられており、外壁の煉瓦の隙間に黄褐色の粘土が詰められている。外壁の中央には煉瓦の途切れる部分が認められ焚き口と推定される。推定される焚き口の幅は最大60cmである。焚き口と外壁付近には焼けて硬く締まった床面が残存しており、床面には暗緑灰色のシルト質砂の土が6cm程の厚さで敷き詰められている。燃焼室や焼成室など窯の上部構造は全く不明であり、周囲からは覆い屋などの存在を示す柱穴なども検出されなかった。

出土遺物

今回、窯跡及び付近から出土したものは、素焼き段階のものも含めた多量の陶器、磁器、瓦質土器、土器、窯道具、窯壁、土製品等の近世以降のもの他に、土師器や須恵器などの古代の遺物がある。ここでは近世以降の遺物について説明する。

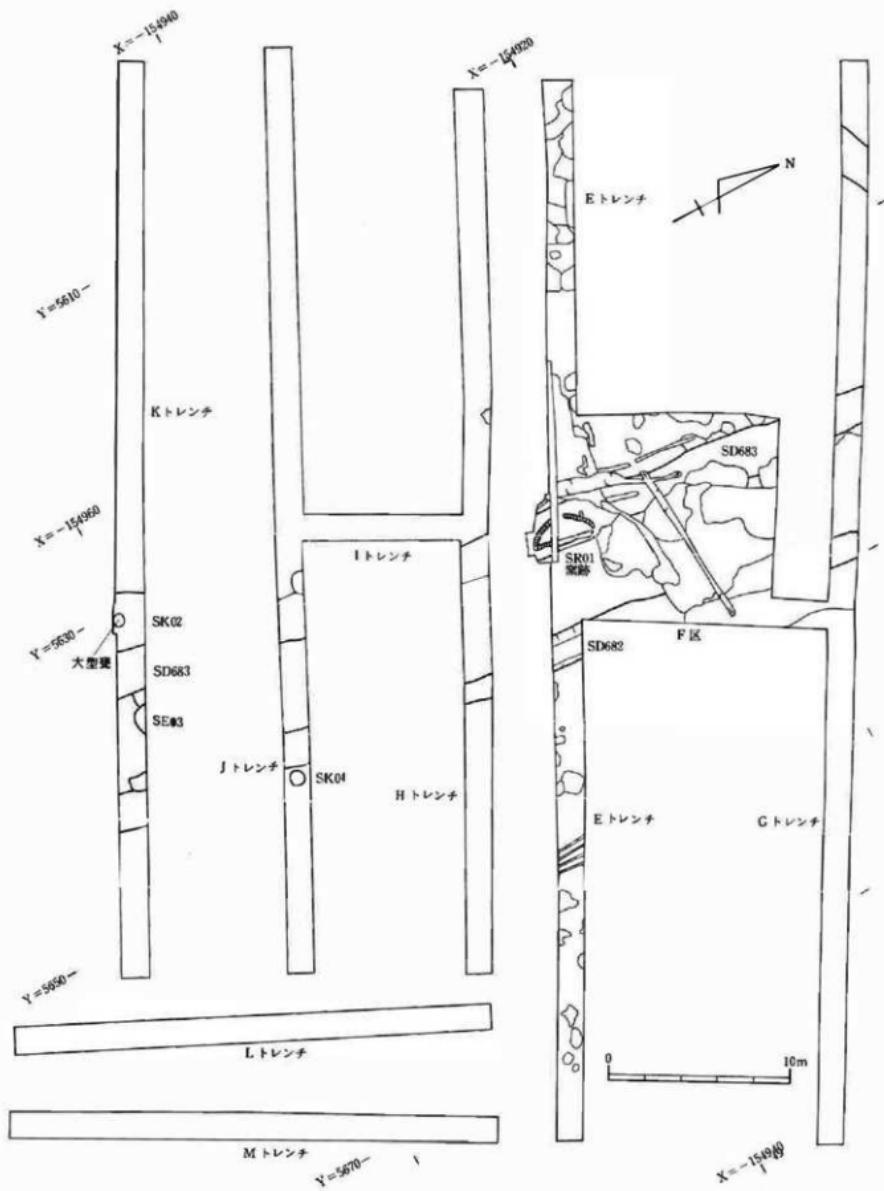
本窯では陶器および土器が生産されているが、出土した陶器には搬入されて使用されたものもある。磁器や搬入品であることが明らかな陶器については別に記述した。

【生産された陶器類】(第47・48図)

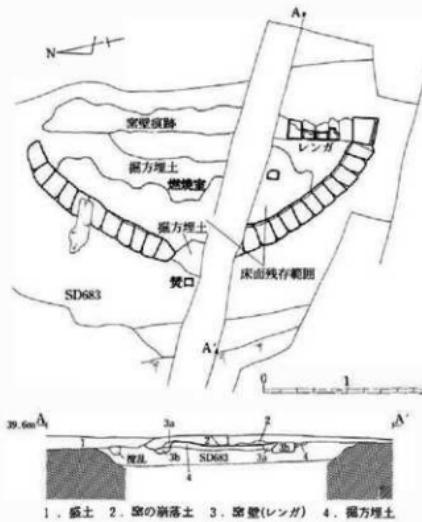
皿類(高台付丸皿、灯明皿、盤)、塊類(塊、小坯、仏飯器)、鉢類(高台付鉢、捏鉢、片口、香炉、火入れ?、火鉢、焜炉、蚊遣りもしくは風炉、植木鉢、すり鉢)、壺類(壺、切立)、鍋類(土鍋、焙烙)、瓶類(徳利、油壺)、水注類(土瓶)、お歎黒壺?、蓋、湯通し、卸金、瓦、土管などが出土した。

皿には高台付丸皿と灯明皿、盤がある。高台付丸皿は口径13cm以下の小皿だけである。内面に白釉の流し掛けによる文様が描かれたものや陶胎磁器で染付文様の認められるものもある。灯明皿は高台が付き体部下部で屈曲するものには鉄釉が施され、平底で体部が内湾するものは素焼きもしくは瓦質である。盤は破片で全体形は不明であるが、外側に「切込土半□」のヘラ書き文字がある。

7は端反り口縁の塊、9は丸形の小坯で片口状の刻みをもつ。



第45図 大崎痕跡確認トレンチ平面図



第46図 SR01窯跡平面図・断面図

高台付鉢には(I)口径20cm以上の大鉢、(II)口径20cm前後の中鉢、(III)口径15cm前後の小鉢がある。大鉢は捏鉢も含む。片口は(I)口径15cm以上の大鉢品、(II)口径15cm前後の中型品、(III)口径12cm前後の小型品がある。火鉢は素焼きで、松竹梅が型押しによって表現されている。一部浮彫部分が剥がれている。15の焜炉は素焼きで内面に煤が付着し、使用されていたことが分かる。瓦質の焜炉の破片も認められる。また、蚊遣りもしくは風炉と推定される、素焼きで非常に脆い破片も出土している。植木鉢は口径20cm、高さ15cmほどで底部中央に孔が開けられ、口縁内部から体部外間にかけて鉄軸が施される。すり鉢は(I)口径40cm以上の大型品と(II)口径30cm強の小型品がある。Iは口唇部直下に二条、IIは一条の粘土紐を貼り付けている。

壺には(I)口径40cm以上の大壺、(II)口径25cm前後の中壺、(III)口径12~18cmの小壺、(IV)口径5cmの極小壺がある。多くは頸部をもたないが、21のように口縁部直下が直立して頸部の認められるものがある。また、体部の膨らみの強い球胴形を呈するもの(19)があり、ケズリ出しの高台をもつ。極小型壺を除いて白釉が施される。4号土壺から直立して発見された大壺は、高さ70cmで素焼きである。内面に付着物が認められ、使用されていた可能性がある。切立は高台を持ち、壺と同様に大・中・小があり、大にはタガを模した隆蒂を数重巡らせたものも認められる。

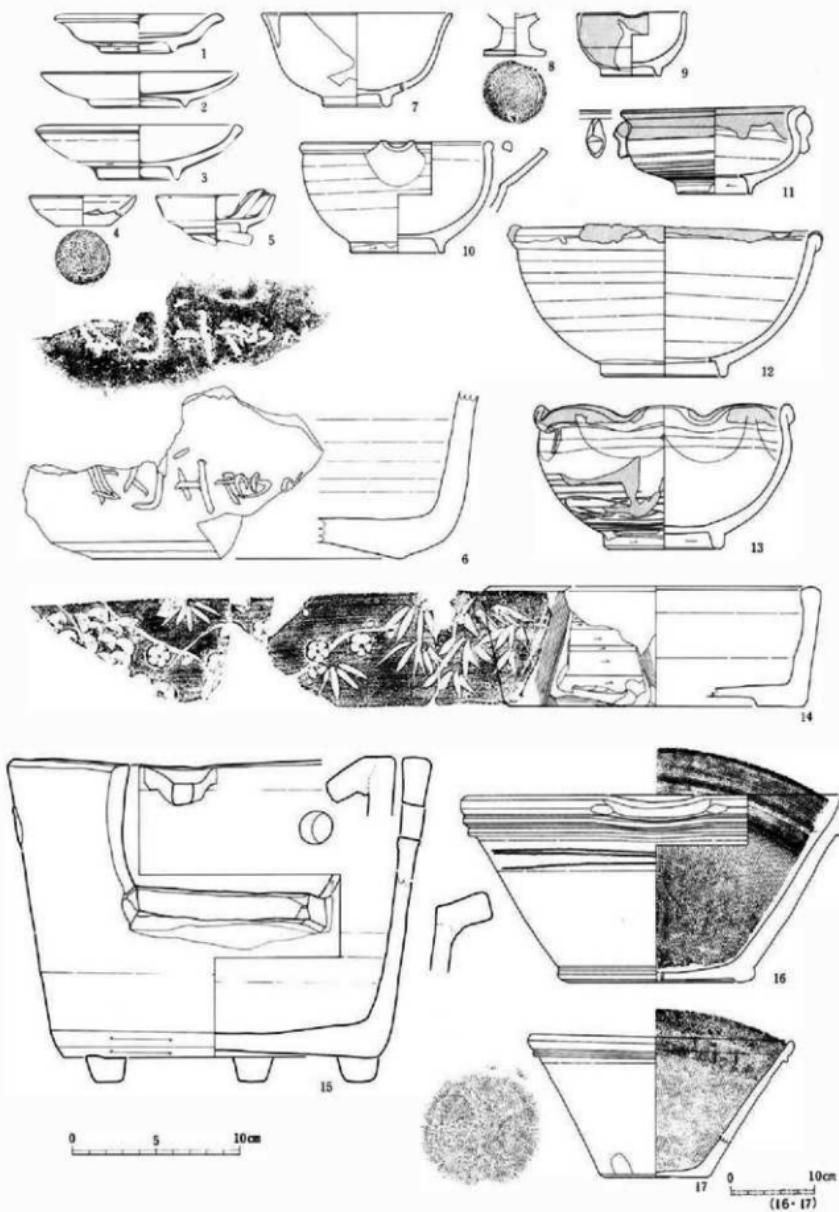
土鍋には、外面の無釉部に煤が付着する使用痕跡が明確なものがかなりの割合で認められる。焙烙には明茶色の鉛釉が施されている(写真図版13-15・16)。

徳利には飛鉢文の施されるものと白釉で装飾されるものなどがある。前者は32の他に肩の張るタイプも認められる(写真図版11-2)。後者は全体が復元できるものがないため詳細は不明であるが、28のような注口部は体部に注口をもつ注口付徳利に伴う可能性がある。この他、体部が一部へこむ、いわゆるへそ徳利などがある。また素焼きの、膨らみをもつ急須?の把手も出土している。

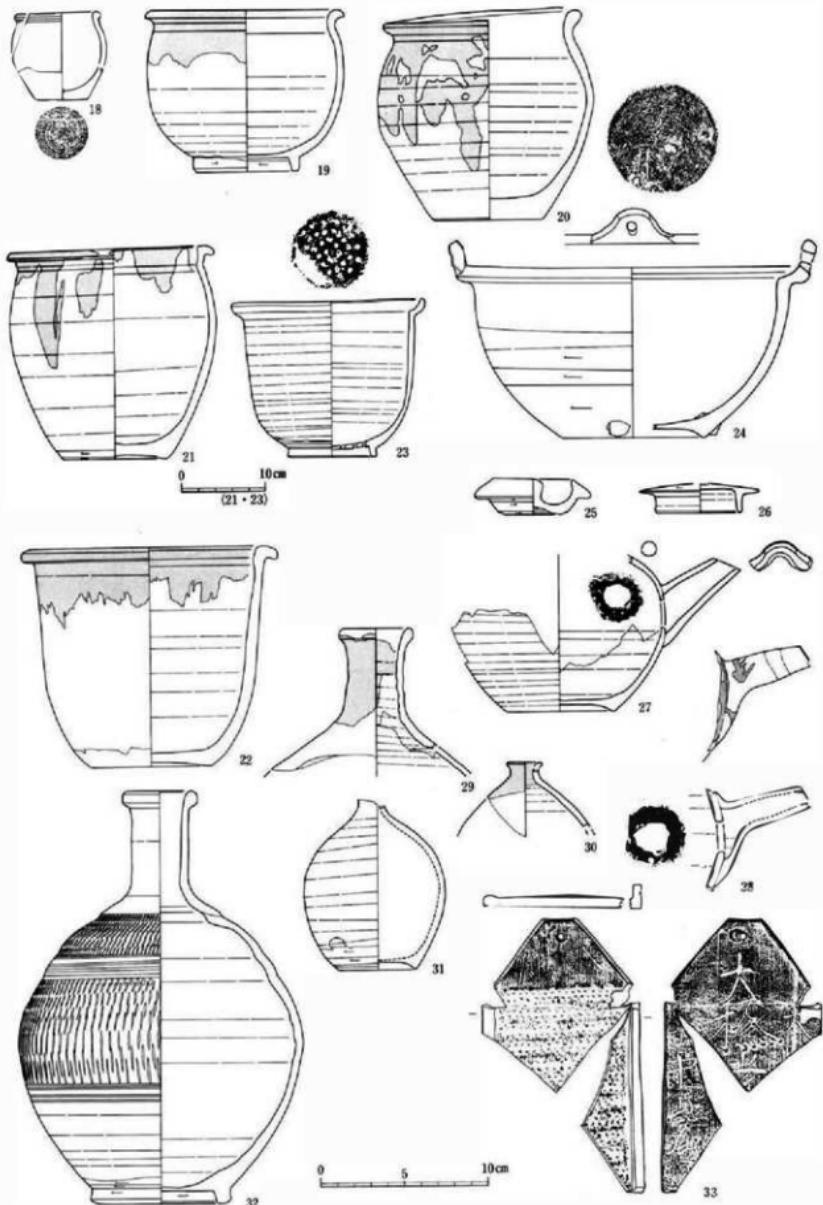
蓋類は土瓶類の蓋(25・26)の他に、中型の壺(写真図版11-2)や壺の蓋、飛鉢文の施された小型の蓋物蓋も出土している。

卸金は、頂部を除いて全面に櫛状工具によって歯状の卸面が作出され、裏面に「大極上口」「田中山口(莊カ)」「大口」のヘラ書き文字がある。

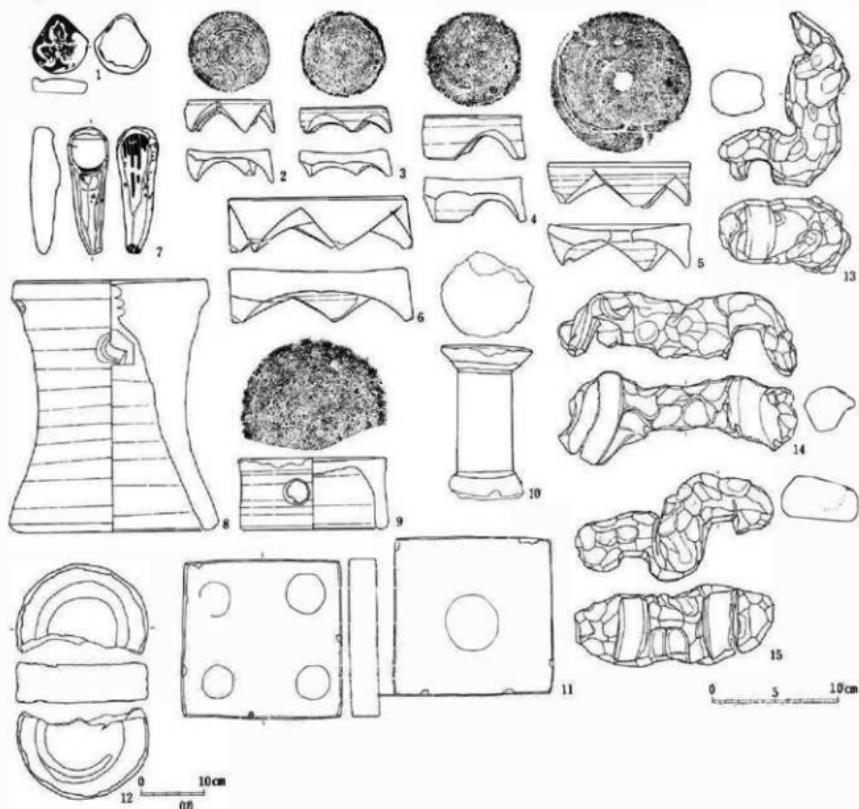
この他、湯通しの底部には径5mm程の棒状工具で不規則に40個余りの孔が内面側から開けられ、底部外側にも鉄釉が施されている。また、素焼きと鉄釉の施された土管(写真図版14-5・7)や鉄釉の施された棟瓦(写真図版14-6)が出土している。



第47図 出土陶器 (1)



第48図 出土陶器 (2)



第49図 出土陶道具

【陶道具】(第49図)

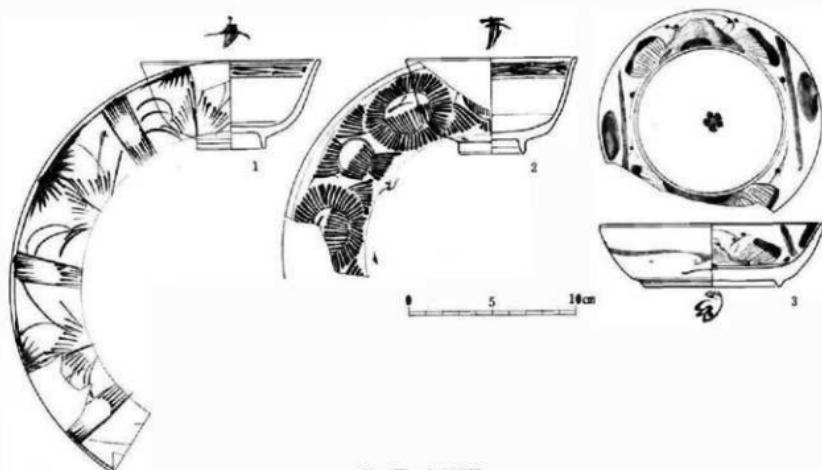
【型】

木の葉文を施すための押し型(1)と恵比寿の後ろ半分の原型(写真図版14-4)が出土している。いずれも素焼きである。

【焼き台】

A類：円形の台に3～6つの脚がつくるもので、a：中央に穴の開くもの(5)とb：ないもの(2・3・4・6)がある。桔梗形、梅花などと呼ばれる。脚の数でI：3脚 II：5脚 III：6脚に分類できる。IIが圧倒的に多く、その中でもaが7割を占める。脚を作り出すための抉りは直線と曲線があり、前者が多い。直径は数の多いIIで見ると、大型…①15cm以上、②14cm、③11cm、中型…④9.5cm、⑤8.5cm、⑥7cm、小型…⑦6cm、⑧5cmに分類できる。

B類：円筒形のもの。上面もしくは側面に孔をもつものや上面に放射状の溝がつくものがある。I：直



第50図 出土磁器

径18~20cmのもの（8）とII：12cm前後のもの（9）がある。Iは高さ9~20cmと幅があり、体部の中央が内湾し下部が広がる。IIは高さ6cmで体部が直立する。

C類：中実の円筒状のもの。いわゆるトチンと呼ばれるものである。両端が円盤状を呈する。高さ21cm、直径11cm前後のものと高さ12cm、直径7cm前後のもの（10）がある。

D類：方形板状のもの。12cm四方で厚さ2cmのもの（11）と14cm以上四方で厚さ3.3cmの大型のものがある。本類と次に記すE類はいわゆるサヤと呼ばれるものである。

E類：円板状のもの。I：直径20~22cm、厚さ6cmの厚手のもの（12）、II：直径16~20cm、厚さ2~4cmで中央に孔の開き、放射状に3本の溝がつくもの、III：手づくねで作られた直径8~10cm、厚さ1cmの薄手のドーナツ状を呈するものがある。

F類：製品の破片を転用したもの。高台痕跡と焼成室床面に散かれた砂が付着していることで認識できる。片口もしくは鉢の口縁部破片を利用したものが多く、底部破片を利用したものも僅かにある。

G類：粗入りの、一端がすぼまる棒状のもの（7）。長さは8~11cmである。

その他：粗入りの「C」字状の扁平なものや断面が台形を呈する楕円形（？）の破片などがある。

【その他】

H類：長さ10~20cm、直径3~5cmの棒状製品のI：一端（13）もしくはII：両端に「コ」字状の抉りの入るもの。手づくねで作られた痕跡が明瞭である。IIはさらにa：両端の「コ」字状部が水平なもの（14）とb：段差があるもの（15）に分けられる。

【その他】

【磁器】（第50図）

瀬戸・美濃系、肥前系、在地産の茶碗や皿が出土している。いずれも18世紀後半から近代のものである。

第2表 陶器観察表

番号	器種	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	高度(cm)	特徴	分類	備考
1	瓶	小箱	Jトレンチ	10.2	4.6	2.4	施釉 外面部：ロクロ 断出し窓台 内面に白釉で模様あり 底部にひび割れ	9 12-7
2	瓶	小箱	—	12.0	5.8	2.1	施釉 外面部：ロクロ 断出し窓台 内面に瓦面の日暮田施跡 少し剥落	6 11-7
3	瓶	小箱	SK02	[12.5]	(5.0)	3.3	施釉 外面部：ロクロ 断出し窓台	3 12-1
4	瓶	切羽町	Jトレンチ	{6.4}	3.2	1.8	施釉 外面部：ロクロ 断面が窓枠形切り 砂欠割	16 11-1
5	瓶	切羽町	Jトレンチ	7.2	3.8	2.4	施釉 外面部：ロクロ 断面が窓枠形切り 壁面に特徴的窓口形文字「切込土平口」	11 12-5
6	瓶	瓶	Hトレンチ	—	—	[19.4]	施釉 外面部：ロクロ 断面窓枠形 内面に施釉面模様 裏面にヘラ書き文字「切込土平口」	84 12-7
7	壺	場	[H.4]	4.2	5.6	—	施釉 外面部：ロクロ 断出し窓台	1 12-3
8	壺	施釉壺	Lトレンチ	—	3.7	[2.6]	施釉 外面部：ロクロナメ 返込み：切込み切り	83 11-1
9	壺	小箱	Jトレンチ	6.6	3.6	3.8	施釉 外面部：ロクロ 窓口形に円柱状の突起み有り 断出し窓台 底部にひび割れ	18 12-4
10	壺	窓口	井探	11.6	5.7	6.7	施釉 外面部：ロクロ 断出し窓台	28 13-1
11	壺	施釉	SK04	11.1	4.5	5.3	施釉 外面部：ロクロ 内面：ロクロ一窓口 断出し窓台 内面施釉	72 13-3
12	壺	中津	SK02	18.7	7.6	9.0	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	29 H-3
13	壺	中津	SK02	[15.6]	(7.2)	8.7	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	30 13-4
14	壺	火葬	Lトレンチ	[19.6]	07.6	7.2	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	70 12-7
15	壺	施釉	SK02	25.4	18.8	19.5	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	69 13-6
16	壺	さり棒	Jトレンチ	46.6	23.6	22.5	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	33 12-17
17	壺	さり棒	Jトレンチ	31.8	12.2	16.9	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	35 11-4
18	壺	火葬	Kトレンチ	5.12	3.1	5.7	施釉 外面部：ロクロアマレー 内面：施釉面模様 壁面にひび割れ	55 11-1
19	壺	火葬	Eトレンチ	11.8	6.9	9.7	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	54 13-5
20	壺	火葬	SK02	11.9	6.6	12.7	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	53 13-5
21	壺	火葬	Jトレンチ	24.6	12.3	25.1	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	46 12-13
22	壺	切口	Jトレンチ	13.3	15.4	7.2	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	67 13-11
23	その他	施釉	SK04	23.1	10.6	18.9	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	71 13-13
24	壺	土鍋	Jトレンチ	21.9	8.5	11.9	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	38 13-2
25	壺	土鍋	Lトレンチ	—	3.4	2.2	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り 窓口部は窓口部有り	77 11-1
26	壺	施釉	SK02	7.1	—	[1.8]	施釉 上部：窓口部ケリ 下部：ロクロアマレー つまみ脚有り	87 11-1
27	小底罐	土鍋	Jトレンチ	—	6.6	[9.0]	施釉 外面部：ロクロ 内面：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り	73 13-13
28	小底罐	窓口部	Lトレンチ	—	—	—	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り 窓口部は窓口部有り	75 11-2
29	瓶	施釉	Mトレンチ	4.4	—	—	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り	60 11-7
30	瓶	曲唇	Hトレンチ	—	[2.23]	(4.5)	施釉 外面部：ロクロ 窓口部：窓口部有り	65 11-1
31	瓶	施釉	Jトレンチ	—	4.6	[10.2]	施釉 外面部：ロクロ 窓口部ケリ 内面：不明 断出し窓台 砂欠割 8.5cm	64 13-14
32	瓶	施釉	Jトレンチ	4.5	8.5	24.9	施釉 外面部：ロクロ 窓口部ケリ 内面：ロクロ 窓口部ケリ 8.5cm	53 12-15
33	その他	施釉	SK04	—	—	—	施釉 外面部：ロクロ 窓口部ケリ 内面：ロクロ 窓口部：窓口部有り	81 14-1

第3表 痿道具観察表

番号	型別	出土位置	長・口徑(cm)	幅・底径(cm)	高さ(cm)	特徴	分類	備考
1	形	井探	—	4.8	4.5	1.3	素焼き 木の葉文	85 14-3
2	A II b	井土	—	6.5	7.3	2.6	井り裏縁的	14-12
3	A II b	井土	—	6.8	7.6	2.1	井り裏縁的	14-12
4	A I b	井土	—	7.8	8.4	3.5	井り裏縁的	14-12
5	A II a	Kトレンチ	—	11.2	11.0	3.6	井り裏縁的	14-12
6	A II b	井土	—	14.3	14.6	4.3	井り裏縁的	14-12
7	G	井土	—	19.3	3.3	2.4	表面 上半と下端に断面の压痕あり	14-13
8	B I	溝	—	15.4	16.6	20.2	上端に穿孔(チチ)所：上面に15.1cmの痕跡	14-11
9	■II	井土	—	11.8	11.8	5.8	穿孔(チチ)所：上面に15.1cmの痕跡	14-11
10	C	井土	—	7.2	—	12.4	中央	14-11
11	▶	Kトレンチ	—	12.7	12.7	2.2	表面に径2.5~3cm、裏面に径4cmの痕跡あり	14-13
12	E	Hトレンチ	—	21.0	—	6.6	中央、表面に径14~15cmの窓台模様、地跡	14-11
13	H 1	井土	—	13.9	9.8	—	—	14-14
14	H II a	Fトレンチ	—	19.1	7.5	5.2	—	14-14
15	H II b	井土	—	15.9	6.5	—	—	14-14

第4表 磁器観察表

番号	器種	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	产地	特徴	分類
1	中國	Kトレンチ	16.8	4.2	5.4	湘南	朱付 外面：墨文 墨内口縁：横矢文、見込み：井 断出し窓台	89 14-5
2	中國	Aトレンチ	10.3	4.2	5.8	湘南	朱付 外面：牡丹文、内面口縁：四方章文、見込み：井 断出し窓台	90 14-10
3	中国	Lトレンチ	13.4	8.0	3.6	湘南	朱付 外面：草花文、内面：草花文、見込み：井 朱井文(ツシニヤク文)、油墨記	91 14-4

【陶器】

相馬大堀焼の、色絵山水文土瓶の破片が出土している。

【土製品】(写真図版14-2)

素焼きの女性像が出土している。産地、意匠などは不明である。

II. 考察

1. 窯の構造

窯の一部を確認しただけで全体の構造は不明であるが、燃焼室の形態や窯道具に認められる傾斜をもつ床面の痕跡などから登窓であった可能性が高い。長軸はほぼ東西方向で燃焼室は西側である。自然地形が東に高くなっていた痕跡は認められず、平坦地に何らかの構造をもって登窓を構築していたと推定される。しかし、窯壁以外、窯の構造を推定する資料は周囲からは検出できなかった。窯道具には砂が付着しているものが多く認められ、焼成室にも砂が敷かれていたと思われる。

2. 製品

本窯跡では多種の製品が生産されており、その多くは日常雑器である。遺物全てを定量的に分析していないのでどれが中心的な製品であったかは明確ではない。ただし、今回の調査における出土量は、壺など大・中型品も比較的多く出土しているが、土鍋と徳利など小型品が非常に多い。

器はロクロで整形されているものがほとんどで、型打ちや手づくねで作られたものは出土していない。しかし、以前の採集品には型打ちの小角皿が出土している。器具によって文様が施されるものは少なく、鉢や香炉に沈線文、徳利に沈線文と飛鮑文の他、火鉢には型押しによる浮彫と彫去状の文様が認められる。また皿、盤、鉢、小杯、香炉、徳利、油壺、土瓶、壺、切立には白釉が掛けられているが、これらの中でも深さ2cm以下の浅い皿や小型の鉢などには掛けられていない。また、皿の内面に白釉の流し掛けによる文様も認められる。

本窯は、鉄釉に白の化粧釉を流したなまこ釉の壺や切立、捏鉢などの仙台の堤焼きの系譜を引く大型品と共に、薄い作りで鉄釉の施された壺や皿、鉢、土鍋、片口、香炉、徳利、土瓶などの小型品が特徴的である。胎土は、前者はやや粗いもののいずれも緻密である。これらの特徴をもつ製品を生産した窯は県北地方を中心に多く分布している。文様として特徴的なのは、飛鮑文と白釉の流し掛けであり、近くでは上野目焼や平清水焼などに類似があり、当窯の製品には近隣の様々な要素が認められる。

盤の外側のヘラ書きは、全文が明らかでないため詳細は不明であるが、宮崎町切込（焼）の土を半分用いて焼いたという意味であろうか。切込焼との関係を知る上でも興味深い資料である。

3. 製品と窯道具の関係

窯道具は焼台A類が圧倒的に多く、重ね焼きを駆使して製品を生産していたことは製品の内面に残された焼台痕跡（目跡）からも見て取れる。内面に焼台A類の痕跡の認められる器種は、皿、盤、片口、鉢、壺、切立、湯通し、土鍋などである。これらの中でも内面に痕跡のないものは小型皿の一部のみで、ほとんどすべての製品に焼台痕跡が認められる。製品内面の焼台痕跡や焼台A類、焼台上面に残された製品の高台痕跡のそれぞれの直径から重ね焼きの様相を推定すると、内面に焼台A類の痕跡が認められる最小の製品は皿である。小型の焼台II⑦⑧類が重ねられ、その上面の高台痕跡から灯明皿や小杯、極小型壺などの小型品が乗せられていたことがわかる。中型の焼台II③～⑥類の痕跡が

付いた片口、土鍋、壺（III類）、鉢、切立（小）にはそれぞれ各製品と同じ径、もしくはやや小さい径の高台痕跡の付いた焼台痕跡が認められる。また、土鍋や片口、壺などには、数少ない釉着している例の中でも同じ器種が釉着している例が高い比率で見られる。すり鉢も焼台G類を用いて重ねて焼かれている。以上より、同じ製品を何重にも重ねて窯詰めを行っていたと推定できる。中型品の中でも大型に類する壺（II類）や湯通し、切立（中）には、それよりもやや怪の小さな高台痕跡の付いた焼台痕跡が認められる。それらにはより小型のものが重ねられたと推定される。大型品や中型品の中でも大型のものは焼台B-E（I-II）類の上に乗せられて焼成室の床面に固定されていたと推定される。灯明皿などの小型品は、皿などに重ねられた他に、焼台F類や、焼台C類に重ねられた焼台D類などに乗せられていた。焼台F類は下面に砂が付着しており、焼成室の床面に固定されていたと推定される。焼台G類はすり鉢専用である。H類は土管を固定したものと思われる。素焼きの土管にH類によって固定された痕跡が認められ、窯の中で立てて焼成するときに不安定な土管を固定したものであろう。土管の縁の痕跡が片側にしかないもの（I）は一方を窯の壁に固定したと思われる。土管はかなり多く立てて焼かれていたと推定されることから、焼成中の倒壊の危険性を少しでも少なくする工夫であったのであろう。

4. 窯の操業年代

当窯についての文献はほとんどなく、近在の言い伝えにも残っていない。ただ、大崎焼と伝えられるすず徳利が1点紹介されているにすぎない（本田1989）。県内において、当窯のような陶器の日常雑器を焼いた窯は20カ所あまり知られている（藤沼1997）。中でも代表的な堤焼は江戸時代の元禄年間（1688～1703）に開窯されたといわれている。しかし、日常雑器の需要が急速に高まり県内各地で窯が盛んに造られるようになるのは幕末から明治にかけてであり、当窯もそのころに操業していたと推定される。窯跡周辺から19世紀の陶磁器が採集されていることはそれを裏付けていよう。地元には全く窯の伝承がないことから、遅くとも大正頃には操業をやめていた可能性が高い。

III. まとめ

1. 窯の一部（燃焼室）を確認した。登窯形式であったと推定されるが、開田による削平のため窯の全体像は不明である。
2. 本窯で生産された製品は、皿類（高台付丸皿、灯明皿、盤）、壺類（壺、小壺、仏飯器）、鉢類（高台付鉢、捏鉢、片口、香炉、火入れ、火鉢、焜炉、蚊遣りもしくは風炉、植木鉢、すり鉢）、壺類（壺、切立）、鍋類（土鍋、焙烙）、瓶類（徳利、油壺）、水注類（土瓶）、お歯黒壺？、蓋、湯通し、卸金、瓦、土管など、日常雑器が主体であった。
3. 窯詰めに当たっては、焼台を駆使して重ね焼きを行い、大量生産をはかっていたと推定される。
4. 本窯は幕末から明治にかけて操業していたと推定されるが、開窯および閉窯の時期については不明である。

引用・参考文献

- 天野順輔(1999)：「名生館遺跡」「名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか」宮城県文化財調査報告書第181集
- 氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 加藤道男(1989)：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』11
- 菊地逸夫(1991)：「伊治城跡」荒賀町文化財調査報告書第4集
- 木皿直幸・早川英紀(1992)：「新谷地北遺跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書第146集
- 佐々木茂徳(1971)：「宮城県古川市伏見庵寺跡」『考古学雑誌』56・3
- 佐々木尚見(1988)：「宮城県北部及び岩手県南部のやきもの」『栗原郷土研究』20
- 佐藤 優(1996)：「高槻遺跡」「平成8年度宮城県遺跡調査成果発表会 要旨」
- 佐藤則之ほか(1997)：「山王遺跡V」宮城県文化財調査報告書第174集
- 佐藤広史・伊藤裕：「切込窯跡」宮崎町文化財調査報告書第3集
- 新宿区内藤遺跡調査会編：「内藤町遺跡」東京都建設局 新宿区内藤遺跡調査会
- 進藤秋輝(1990)：「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論叢』
- 菅原弘樹(1997)：「上代遺跡」「舟場遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第173集
- 菅原弘樹ほか(1996)：「山王遺跡IV」宮城県文化財調査報告書第171集
- 鈴木勝彦(1991)：「名生館官衙遺跡」「第23回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
- 芹沢長介ほか(1981)：「日本やきものの集成（1）北海道 東北 開拓」平凡社
- 芹沢長介(1987)：「東北の近世陶磁」東北陶磁文化館
- 高橋栄一ほか(1999)：「平貝遺跡 平貝窑跡」本吉町文化財調査報告書第3集
- 高橋誠明・村田晃一(1996)：「雅奥国における7世紀の様相」「飛鳥・白鳳時代の諸問題！」国際古代史シンポジウム 実行委員会
- 東北歴史資料館(1995)：「仙台・堤のやきもの」
- 藤沢敦・根岸達人・奈良佳子(1999)：「東北大埋蔵文化財調査年報11」東北大埋蔵文化財調査研究センター
- 藤沼邦彦(1997)：「宮城県」「国立歴史民俗博物館研究報告 第73集」
- 藤村博之(1995)：「上野瓦焼場窯跡」「下草古城跡ほか」宮城県文化財調査報告書第166集
- 古川一明(1985)：「色麻古墳群」「香ノ木遺跡 色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第103集
- 古川一明(1993)：「日の出山窯跡群」色麻町文化財調査報告書第1集
- 古川一明(1996)：「北辺に分布する横穴墓について」「考古学と遺跡の保護」
- 古川市教育委員会(1987～1996)：「名生館官衙遺跡VII～XVI」古川市文化財調査報告書第6～13・19・21集
- 古川市教育委員会(2000)：「名生館官衙遺跡、杉の下八幡坐・南小林地区確認調査」「第26回古代城柵官衙遺跡検討会 資料」
- 古川市教育委員会(2001)：「南小林遺跡」「第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料」
- 本田泰貴(1989)：「東北近世陶磁資料1 「名生館焼」「陶磁館ニュース no.1」中新田町立東北陶磁文化館
- 宮城県教育委員会(1987)：「祝・大沢窯跡」「祝・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集
- 宮城県多賀城跡調査研究所(1981～1986)：「名生館遺跡I～VI」多賀城開闢遺跡発掘調査報告書第6～11冊
- 宮城正俊(1982)：「新説 切込焼」宝文堂
- 村田晃一(1995)：「宮城県における6・7世紀の土器様相」「東国土器研究」第4号
- 村田晃一(2000)：「飛鳥・奈良時代の越奥北辺」「宮城考古学」第2号
- 村田晃一ほか(2000)：「名生館遺跡」「名生館遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第183集

写 真 図 版



N-4区全景(東から)



N-5区南北部分全景(南から)



N-5区東西部分全景(東から)



O-2区北側全景(南から)



O-2区 SD601・604溝跡(北から)



P-1区全景(西から)



P-2区東側全景(東から)



P-1区 SE613井戸跡断面(北から)



Q-1区 全景（西から）



Q-1区 東側全景（西から）



Q-1区 SK650土壤断面（東から）



Q-1区 SK660土壤断面（東から）



Q-1区 SD661溝跡（南から）



Q-2区 SD682溝跡断面（北から）



Q-2区 全景（東から）



Q-3区 全景（東から）



Q-4区 全景（西から）



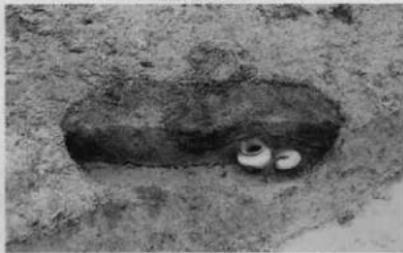
Q-8区全景（西から）



Q-9区東西部分全景（西から）



Q-5・8区间 SD694溝跡断面（西から）



Q-9区 SK699土壤断面（東から）



R-1区全景（南から）



R-2～6区全景（西から）



S-1区東側全景（西から）



S-1区西侧全景（東から）



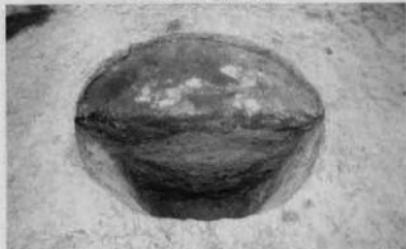
SK①類 (SK750 西から)



S-2区全景（西から）



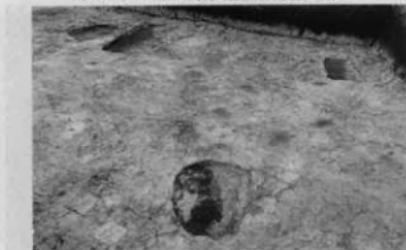
S-3区全景（南から）



S-2区 SE764井戸跡断面（北から）



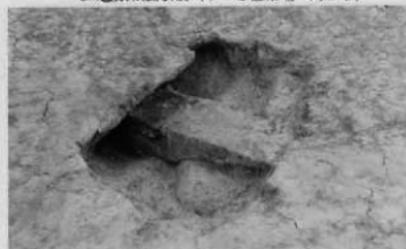
SK④a類検出状況（SK720 南から）



SK④類検出状況（S-2区東端 南から）



SK④a類断面（SK711 南東から）



SK④b類断面（SK759 南東から）



T-1区全景（南から）



U-1区全景（北から）



U-3区全景（南から）



V-1区全景（南から）



U-2区東側全景（東から）



U-1区 SI804住居跡（南から）



U-2区 SI841~843・885住居跡（西から）



U-2区 SB886建物跡・SI841~843-885住居跡（北西から）



U-3区 SD661・859・860溝跡（南から）



V-2区南側全景（南から）



V-3区全景（東から）



V-3区全景（西から）



V-2区 SI868住居跡（南から）



V-3区 SI879住居跡（東から）



V-3区 SI887住居跡（東から）



V-4区全景（南東から）



V-2区 SK874土壤（北から）



V-4区西全景（東から）



V-4区東 SB980建物跡（東から）



V-4区東 SB980建物跡南西隅柱棟出状況（西から）



V-4区東 SB980建物跡南西隅柱断面（西から）



V-4区東 SD682・980溝跡断面（北から）



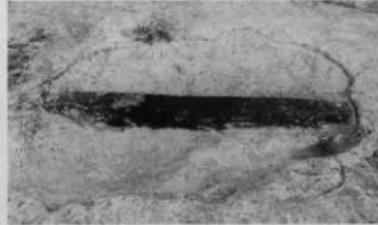
V-4区西 SD927・928溝跡（南から）



V-4区西 SK939土壤断面（東から）



V-5区全景（南から）



V-4区西 SK952土壤断面（南から）



V-6区全景（東から）

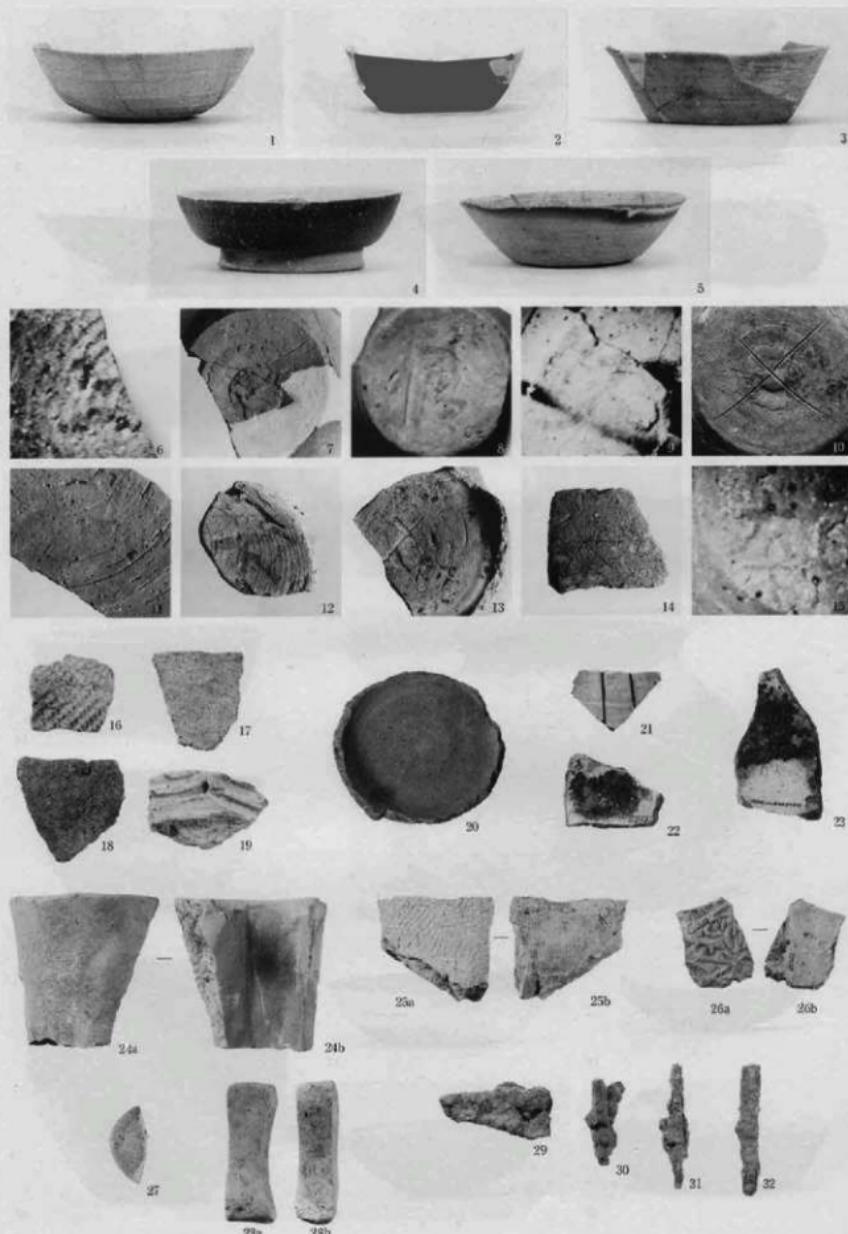


1 : 6 - 1 (蟠螭纹分格圈足盘) 2 : 6 - 2 3 : 11 - 1 4 : 6 - 5 5 : 11 - 4 6 : 11 - 1 7 : 11 - 2 8 : 11 - 3 9 : 11 - 5
10 : 14 - 2 11 : 14 - 3 12 : 14 - 5 13 : 14 - 7 14 : 14 - 8 15 : 19 - 1 16 : 19 - 10 17 : 14 - 9
(图版1～3、6～16：L3、1～5、17：L4)

出土遗物(1)



1 : 19-2 (輪圓番号一類内番号) 2 : 32-1 3 : 32-2 4 : 32-3 5 : 30-1 6 : 32-4 7 : 37-5 8 : 37-1 9 : 37-2
10 : 37-3 11 : 37-6 12 : 37-7 13 : 37-9 14 : 41-4 15 : 41-3 16 : 41-5 17 : 41-1 18 : 41-6 19 : 44-2 20 : 41-2
(20件) → 12・14～20 : 1/3, 13 : 1/4



1 : 41-3 (仰韶文化一期) 2 : 44-4 3 : 44-6 4 : 44-7 5 : 44-10 6 : 6-1 7 : 6-2 8 : 6-3 9 : 11-3
 10 : 14-5 11 : 37-5 12 : 44-9 13 : 44-12 14 : 44-13 15 : 44-10 16 : 26-1 17 : 26-2 18 : 26-3 19 : 44-1 20 : 40-1
 21 : V-3 (灰陶片) 22 : V-3 L (灰陶片) 23 : V-3 (灰陶片) 24 : 11-6 25 : 14-11 26 : 32-5 27 : 32-7 28 : 36-1 29 : V-2
 KSK878 30 : U-2 (KSK841) 31 : V-4 (KSK885) 32 : U-2 (KSK841) (總尺 1 ~ 5, 16~23, 27~32 : 1/3, 24~26 : 1/5, 6~15 : 任量)



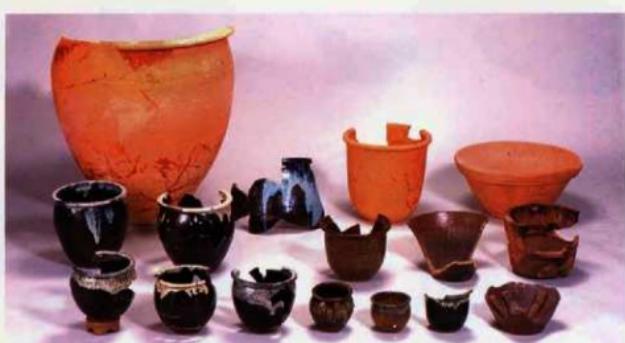
1



2



3



4

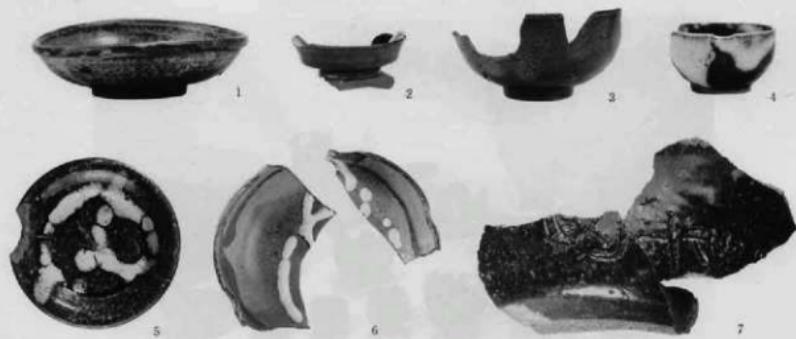
陶器

图版11



SR01蒸跡全景 (西から)

SR01蒸跡部分拡大 (南から)



1:47-31神須番号-辨識内番号 2:47-5 3:47-7 4:47-9 5:47-1 7:47-6 (縮尺1/3)

図版12

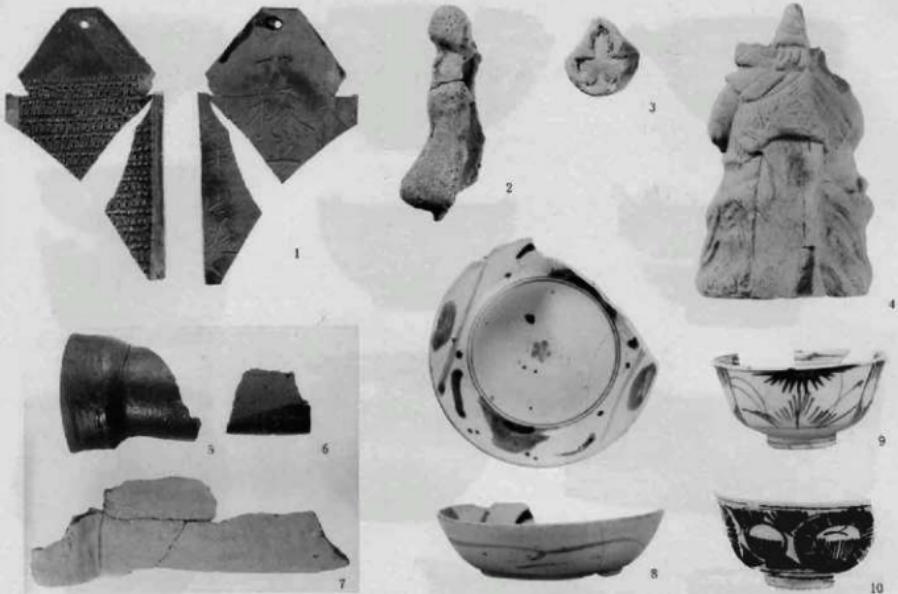
出土遺物 (陶器 1)



出土遺物（陶器2）

図版13

1:47-10 (7割強番号=洋汎内番号) 3:47-11 4:47-13 6:47-15 7:47-14 8:48-19 9:48-80 10:48-21 11:48-32
12:48-24 13:48-27 11:48-31 17:47-16 18:48-33 19:48-23 (縮尺1~5・7~9・11~16:1/3, 6・10・17~19:1/6)



1 : 48-33 (財團番号 - 領國内番号) 3 : 49-1 8 : 50-3 9 : 50-1 10 : 50-2 (縮尺 1~4, 8~10 : 1/3, その他 : 任物)

ごう しゅ うち い せき
郷 主 内 遺 跡

目 次

第1章 遺跡の概要	115
1. 遺跡の位置と地理的環境	
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	
第2章 発掘調査	117
1. 調査に至る経過	
2. 調査方法	
3. 発見された遺構と遺物	
4. 埋納遺構	
第3章 考察とまとめ	125
1. 埋納遺構と出土遺物について	
2. まとめ	
引用・参考文献	128
付録 1. 保存処理	129
2. 郷主内遺跡出土密教法具の蛍光X線分析法による材質分析	131
写真図版	135

調査要項

遺 跡 名：郷主内遺跡（ごうしゅうちいせき）、宮城県遺跡地名表登載番号03195、遺跡記号SU
 旧名 郷主内館跡（ごうしゅうちたてあと）、宮城県遺跡地名表登載番号03034
 旧名 辻館跡（つじたてあと）、宮城県遺跡地名表登載番号03110

所 在 地：宮城県角田市島田字郷主内、枝野字辻・南小原

調査原因：県営ほ場整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課 岩見和泰、高橋栄一
 角田市教育委員会 齋藤彰裕、尾形真也

調査期間：2000年（平成12年）3月6日～15日

調査対象面積：約21ha (210000 m²)

調査面積：930m²

調査協力：宮城県大河原農林振興事務所、東北歴史博物館、限東土地区画整理組合

調査参加者：遠藤豊子、大槻幸一郎、菅野二三子、加藤昌雄、佐藤きぬ子、佐藤幸一、高橋均
 藤野時弘

第1章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

郷主内遺跡は角田市枝野字辻・南小原、島田字郷主内に所在する。市の中心部から南東に約3kmの地点にあり、丸森町との町境から約1km北に位置している。

遺跡は、伊具盆地のほぼ中央を縦断し北へと流れる阿武隈川の東岸、川岸から約400~500mの距離にあり、阿武隈川によって形成された自然堤防上に立地する（中川他 1986）。東には阿武隈山地の北端をなす標高200~300mの鹿狼山地があり、東の丘陵と西の阿武隈川に挟まれた平野部のほぼ中央に遺跡は位置している。

遺跡の周辺は一部宅地となっているが、大部分は水田・畠地として利用されており、現況では緩やかな微地形が認められるものの、標高14~16mのほぼ平坦な地形となっている。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

郷主内遺跡は從来、辻館跡（1）と郷主内館跡（2）として知られており、周辺には、律令期の伊具郡衙と推定されている角田郡山遺跡（6）があるほか、古墳時代の遺跡には郷主内古墳（3）・光目内古墳群（4）などがあり、古代の遺跡には角田郡山遺跡の瓦供給地であった今泉瓦窯跡（21）・桜井瓦窯跡（24）・山中瓦窯跡（25）などの窯跡群が知られている。中世の遺跡では、南に光目内館跡（5）が、南西には郡山館跡（9）、東には島田館跡（15）などが近接しているほか、南側約2kmの地点には戦国時代に伊達輝宗・政宗による相馬攻めの拠点であった矢ノ目館跡（73）がある。また、江戸時代に仙台藩の南半部における本山派修験の中心であった東光院と宗吽院がそれぞれ阿武隈川の東岸と西岸に位置している（図1）。

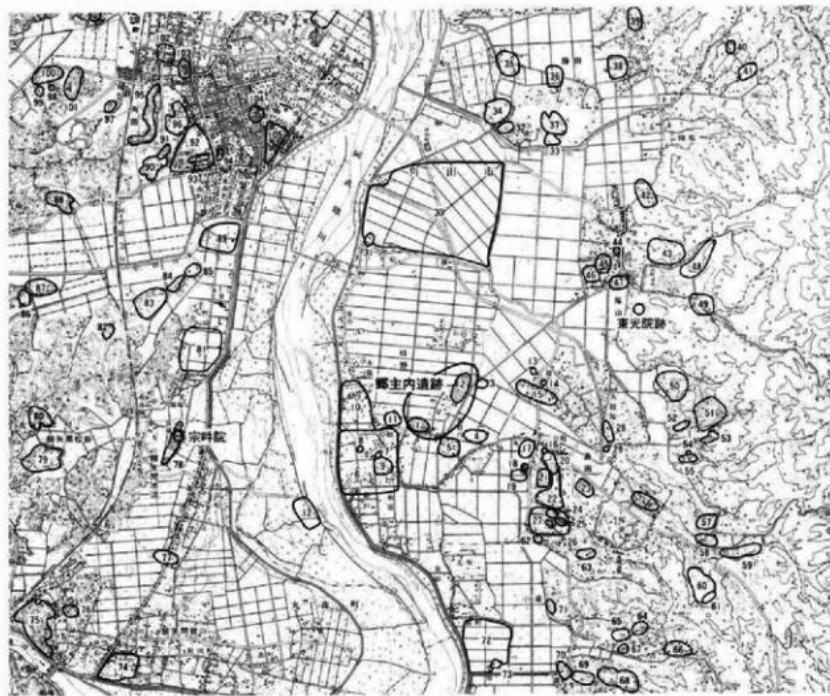
郷主内館跡は、江戸時代延宝年間（1673~81）に作成された『仙台領古城書立之覚』に「島田村、江主内城、東西七拾六間、南北六拾三間、四千七百八拾八坪、右城主と申ハ無之候共相馬陣之節政空取立之要害之地ニ御座候」と記されている館跡である。1962（昭和37）年にその一部が発掘調査され、館跡は二重に水堀を巡らした方形に近い平城で、内郭は一辺約90mのほぼ正方形を呈し、内堀は幅8~10m、深さは2mあり、外郭は南北が170m・東西340mの長方形と推定されている（図2）。また、郷主内館跡の近くには周囲に堀を巡らす小規模な屋敷地がみられ、館跡に関連する屋敷地と推定されている（図3）。辻館跡は郷主内館跡に関連する屋敷地と推定される遺跡で、現在は西側の堀だけが残っているが、西・南・北の三方に「コ」字状の堀が以前存在していたことが知られている（図4）。光目内館跡も一部堀が確認でき、位置的に近接することから辻館跡と同様の性格のものである可能性が高い。

註1. 東光院は現存せず、明治時代初め頃まで寺院があったという場所が伝えられている。東光院については安達俊男氏からご教示を賜った。

註2. 藤沼邦彦（1981）「宮城県」『日本城郭大系 第3巻 山形 宮城 福島』（新人物往来社）の363・364頁。

註3. 註2文献と同じ。なお、志間泰治氏には現場を視察していただき、屋敷地や堀跡の位置についてご教示を頂いたほか、旧地籍図による堀跡の推定作業についてもご指導を賜った。

註4. 志間泰治氏のご教示による。また、地元の方々からも同様の説明を頂いた。



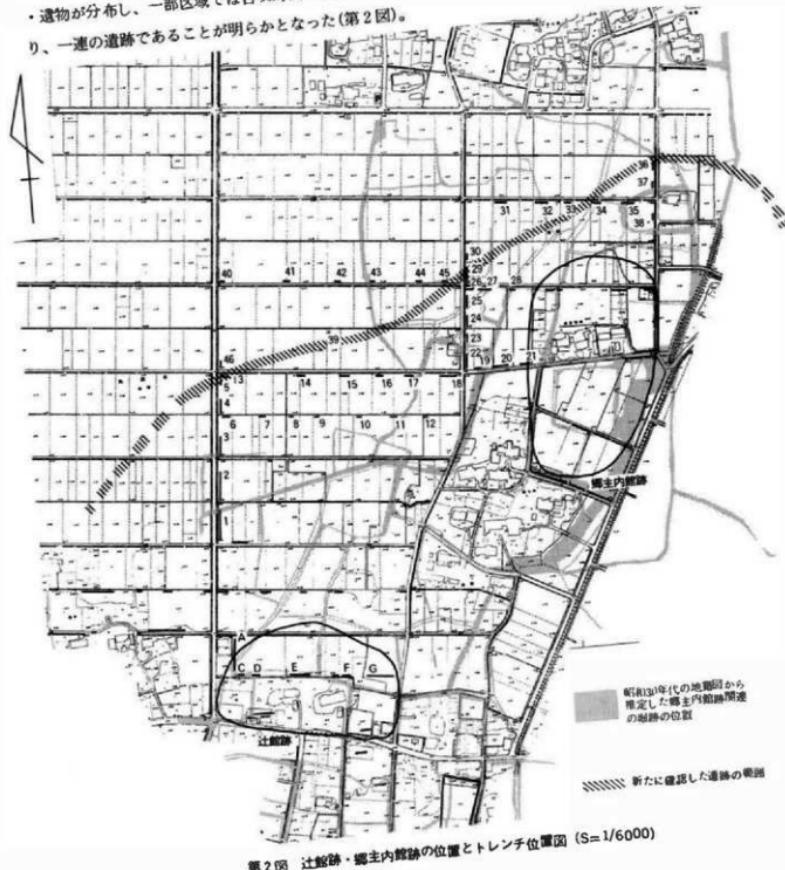
番	遺跡名	種別	時代	地	遺跡名	種別	時代	地	番	遺跡名	種別	時代
1	江原跡	城跡	中世	36	竹ノ内道路	敷石地	鐵文	71	雞鳴穴墓群	城穴墓	古墳後~平安	
2	鷺主内道路	道路	中世	37	大久保古墳群	円墳	古墳後	72	矢ノ口遺跡	集落	古墳~中世	
3	鷺主内遺跡	円墳?	古成後	38	船岡跡	城跡	近世	73	日出跡	城跡	中世	
4	光日山古墳群	円墳	古成後	39	弓道跡	敷石地	古代	74	具内道路	敷石地	古代	
5	光日山古跡	城跡	中世	40	西野跡	宮跡	平安	75	大納戸跡	城跡	中世	
6	内田町古道跡	官道・敷石地	空缺・奈良・平安地	41	小日向跡	敷石地	鐵文?中?	76	大門古道跡	敷石地	弥生	
7	風摩古跡群	古墳	古墳後	42	福井跡	城跡	中世	77	原今津跡	散石地	鐵文後・秀光	
8	上原古道跡	円墳	古墳	43	山内遺跡	今紀・敷石地	鐵文・古代・中世	78	宮後山古墳群	円墳	古墳後~如意	
9	都山古道跡	城跡	中世?	44	代代木跡	代官所	近世	79	若ノ下城跡	城跡	中世	
10	高尾遺跡	史跡	古墳後~平安	45	荒川遺跡	墳墓・敷石地	古墳前・中世	80	先山遺跡	城跡	中世	
11	鶴賀跡	散石地	古代	46	鹿島城跡	城跡	古世	81	野佐遺跡	敷石地	鐵文・弥生・中世	
12	上小川遺跡	敷石地	古墳後	47	上小川道路	敷石地	鐵文後	82	春日御陵跡	史跡	古代	
13	新高古墳	円墳	古墳後	48	八幡城跡	城跡	中世	83	越前道跡	敷石地・城跡	鐵文・弥生・中世	
14	船高古墳	円墳	古墳中	49	大山古尻城跡	城跡	近世	84	越前守跡	円墳	古墳中	
15	藤田船跡	城跡	中世	50	北山城跡	城跡	中世	85	鶴香台城跡	城跡	中世	
16	今泉古墳	円墳	古墳後	51	手取城跡	城跡	中世	86	世ノ久日遺跡	敷石地	古代	
17	桜井古跡	城跡	中世	52	大久古墳群	円墳	古世	87	世ノ崎城跡	敷石地	鐵文・中世	
18	鶴原町古墳	史跡	古墳後	53	引附櫛穴墓群	櫛穴墓	古墳・古代	88	小田城跡	城跡	中世	
19	三島遺跡	塚塔	古墳中	54	川田古墳	古墳	近世	89	伏作遺跡	集落	古墳後	
20	今泉遺跡	鐵文	鐵文	55	羽附遺跡	敷石地	鐵文後	90	桃ノ城跡	城跡	中世	
21	今泉丘古跡	城跡	如意	56	石川口遺跡	敷石地	古墳・古代	91	別小屋櫛穴墓群	櫛穴墓	古墳・古代	
22	山中古跡群	円墳・方墳	古墳後	57	神ノ久古墳群	円墳	古墳後	92	佐久城跡	城跡	中世・近世	
23	八戸内丘古跡	史跡	古代	58	御前山道路	敷石地	鐵文中	93	牛頭櫛穴墓群	櫛穴墓	古墳・古代	
24	桜井瓦窯跡	史跡	古代	59	舟出跡	城跡	中世	94	牛軒遺跡	敷石地	平安	
25	山中古跡	史跡	古代	60	吉ノ山跡	城跡	中世	95	足久少古墳群	前古墳・河原古墳・後古墳	古墳中・後	
26	山中櫛穴墓群	円墳・古墳	古墳後	61	新軒向櫛穴墓群	櫛穴墓	古墳後	96	田後遺跡	城跡	鐵文・中	
27	山中水外道路	史跡	古墳・古代	62	坂井跡	敷石地	鐵文前	97	興津跡	史跡	奈良	
28	作間遺跡	敷石地	古代	63	小伏ノ山道路	敷石地	秀生・古代	98	若ノ崎城跡	城跡	中世	
29	丹内古墳群	円墳	古墳後	64	御前櫛穴墓	櫛穴墓	平安	99	若ノ崎守跡	寺院	中世	
30	大坊跡	塚塔	古墳・如意	65	舟の道跡	敷石地	秀生	100	若ノ崎城跡	城跡	鐵文・秀・勝・秀生	
31	笠松古墳	円墳	古墳	66	小川舟水道跡	敷石地	鐵文前~秀・秀生					
32	裏崩古墳	円墳	中世?	67	庭前社遺跡	敷石地	古代					
33	船ノ川城跡	城跡	中世	68	柳原古跡	城跡	中世					
34	医王城跡	城跡	中世	69	古井跡	史跡	平安					
35	宿前遺跡	敷石地	古代	70	鬼久道跡	敷石地	鐵文前・後					

第1図 郷主内遺跡の位置と周辺の遺跡

第2章 発掘調査

1. 調査に至る経過

本調査は角田市枝野地区の県営ほ場整備事業に伴い実施されたものである。事業計画では、整備範囲が周知の遺跡ある辻館跡・郷主内館跡などに及ぶため、関係機関と協議し、事前に遺跡の範囲や遺構・遺物の有無を確認することにした。確認調査は、平成11年11・12月に角田市教育委員会が、平成12年3月に宮城県教育委員会と角田市教育委員会が行い、その結果、広範囲にわたって中世の遺構・遺物が分布し、一部区域では古墳時代の遺構・遺物が確認され、遺跡は途切れることなく続いていること、一連の遺跡であることが明らかとなった(第2図)。



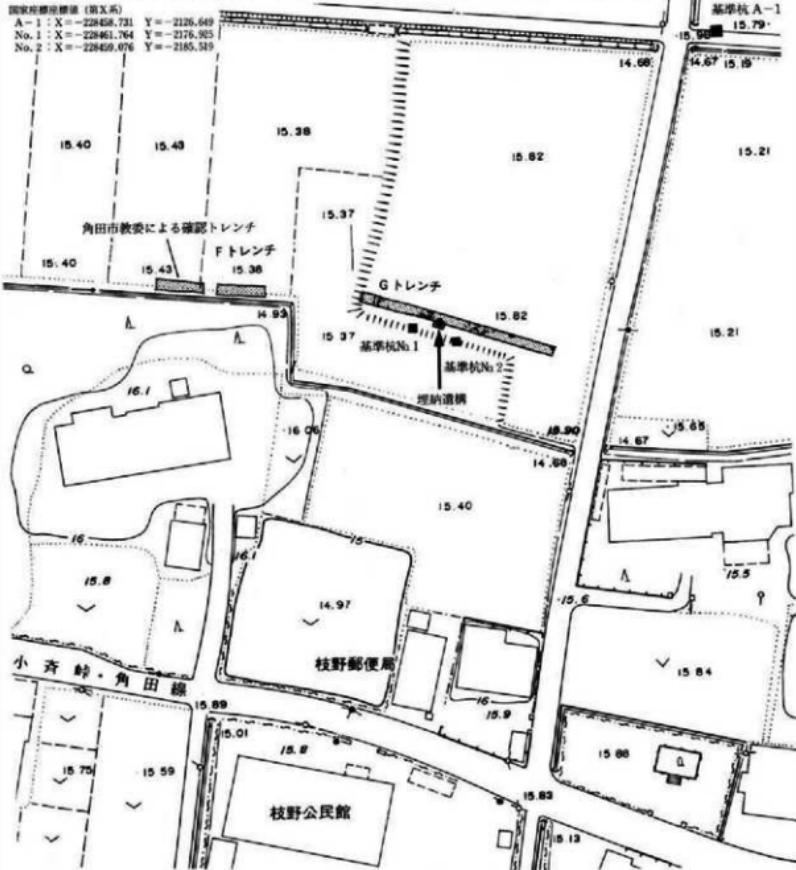
この結果を受けて関係機関と再度協議を行い、遺跡の破壊を最小限に抑えるべく設計の変更がなされ、排水路などの調査は平成12年度から角田市教育委員会が行うこととなった。

本報告は、宮城県教育委員会が主体となって行った確認調査の成果をまとめたもので、その概要と辻館跡周辺の調査区で発見された密教法具埋納遺構について報告するものである。なお、遺跡の全体については平成12年度以降に行われる角田市教育委員会の調査報告にまとめて行うこととなっている。

2. 調査方法

角田市教育委員会が平成11年11・12月に行った確認調査をもとに、遺跡の範囲と遺構の分布状況を確認するため、ほ場整備が行われる遺跡の一部とその周辺を対象に、トレンチによる調査を行った。

調査は水路部分を中心に、幅1.7mのトレンチを計52ヶ所設定し、辻館跡周辺はA～F、これ以外は1～46の番号を付け、遺構の掘り下げは行わずに平面での確認のみを行い、平面図と土層模式図を作成し



第3図 Gトレンチの位置と基準点 (S=1/1000)

た。なお、Gトレンチ（第3図）を掘り下げていた際に、調査区南断面に埋納遺構と共に伴う青銅製品・木製品の一部を検出した。そのため、埋納遺構については、トレンチを南側に東西約2m・南北約1mの範囲を拡張し、精査を行った（第4図）。

遺構平面図は遺構の種類等に応じて縮尺を1/100、1/20、1/10とし、断面図は精査を行ったG区で作成しており、縮尺1/20と1/10で記録した。写真撮影は35mmと6×7白黒・カラースライドを使用した。

3. 発見された遺構と遺物

確認された遺構は埋納遺跡1基、井戸跡8基、土壤15基、溝跡63条、柱穴多数である。分布密度は異なるものの、1~29、34~38・42、A・C~Gトレンチで検出されており、辻館跡と郷主内館跡の間は途切れることなく遺構が広がっていることが明らかとなった（第2図）。

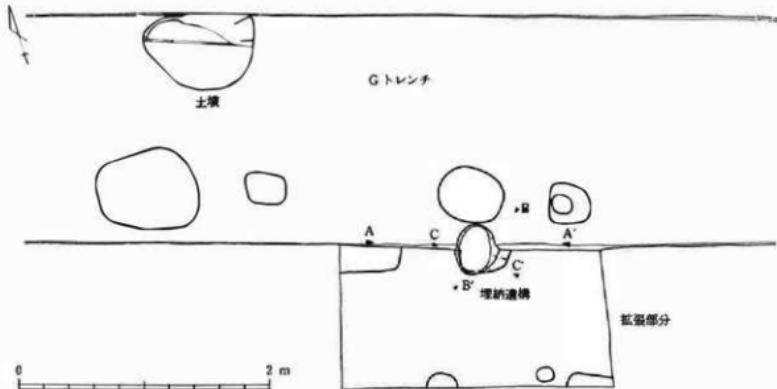
柱穴がまとまって検出されたのは2・3トレンチと10・11・12・14トレンチ、38トレンチで、これらの地点では建物群の存在が想定される。特に2・3トレンチではピットの密度も高く、井戸跡も4基見つかっている。区画溝または堀跡と考えられる規模の大きい幅2~3mの溝跡は、東西方向の溝跡が1・2・21・A・C・D・Eトレンチで、北東-南東方向の溝跡が11・17・27・32・Aトレンチで、南北方向の溝跡が4・15・19・42トレンチで検出されている。また、Gトレンチからは埋納遺構1基と火葬遺構と考えられる土壤1基、井戸跡2基、柱穴などが確認されている（第3・4図）。

これらのうち、1・3・7・12・15トレンチから中世陶器の破片が出土しており、3トレンチで片口の擂鉢、12トレンチでは渥美産の甕、15トレンチの大溝からは常滑産の擂鉢の破片が出土している。柱穴も径の小さい円形のものが多く、遺構の多くは中世またはそれ以降の年代が考えられる。なお、1トレンチで古墳時代前期の土器が見つかっており、1・37・Eトレンチからは古墳時代または古代の土器片が若干出土している。

4. 埋納遺構

【規模と出土状況】埋納遺構は重機で掘削した際に北側の3分の2ほどが失われているが、南側の残存部分から推定すると東西45cm程の不整形を呈する土壤と考えられ、底面の平面形が東西26cm・南北38cm程の楕円形を呈することから、埋納遺構の平面形も南北に長かったものと推定される。旧表土面から掘り込まれており、地山面を底面とし、底面はほぼ平らである。現地表面から掘り込み面である旧表土面までは約50cmあり、土壤の深さは旧表土面から46cm程で、西と南の側面は急に立ち上がり、東の側面は緩やかに開きながら立ち上がる。東側で柱穴1個と重複しており、これよりも新しい。

調査区南壁の断面観察により、深さ38cm前後のところで曲物の底板が検出された。曲物は直径24~25cmあり、側板は高さ10cm程まで残存し、棒皮の一部も残っていた。調査によって曲物内から出土した密教法具は飯食器2点、六器鏡1点・台皿2点、火舎破片数点で、飯食器は2点とも伏せた状態で曲物側板に沿って置かれており、曲物底板には伏せて置いたことによってついた口縁部の円形の痕跡が認められた。同様に置かれていた六器鏡のものと考えられる痕跡も残っており、曲物底板の中央部は炭化して座んでいた。火舎は猫脚の付いた破片など数点が、逆さまになって断面にめり込むよう



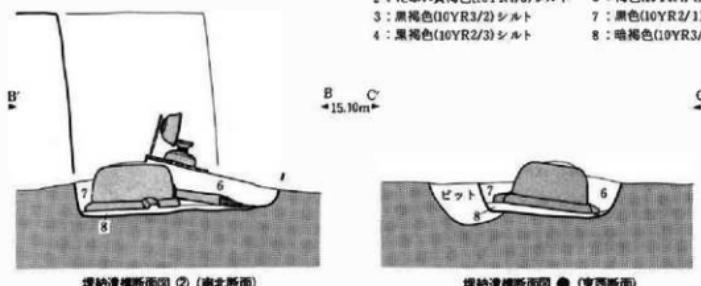
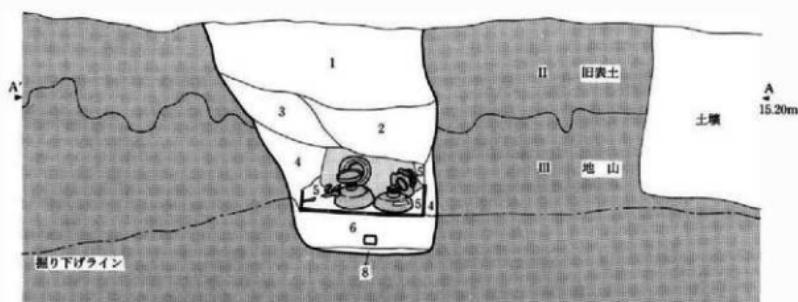
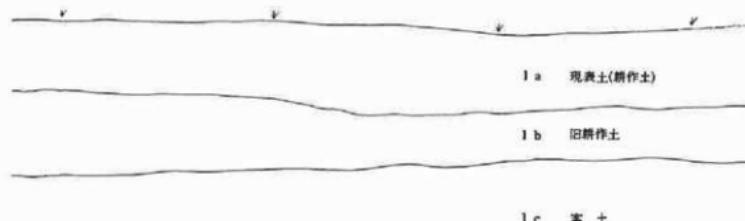
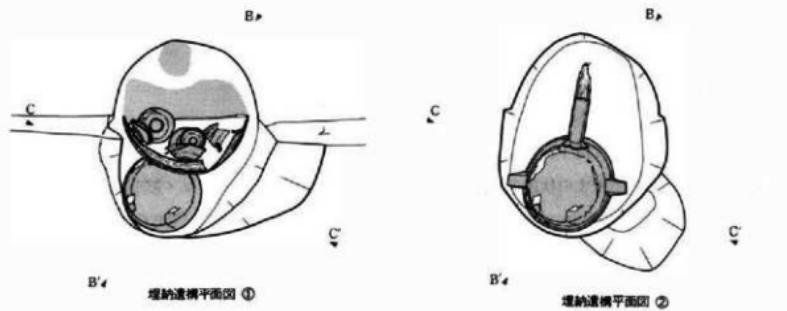
第4図 Gトレンチ埋納遺構周辺平面図

状況で検出された。重機で掘り下げた際に、五鉗鉤や独鉗杵、花瓶2点、手錦杖、六器鏡が4点重なつたもの、火舎の破片や、曲物の底板と側板の破片などが見つかっており、曲物が北へ傾いていることから、出土した青銅製品の中には、曲物内からこぼれ出たものもあったと思われる。

銚子は堆積土を挟んで曲物の下から出土しており、曲物は銚子の体部北側部分が薄い堆積層を挟んで重なるような位置に置かれていた。銚子は両口のもので、注ぎ口をほぼ東西に、把手を北に向けて埋納遺構の底面に伏せた状態で置かれており、銚子底部周辺の傷みが激しいものの、把手の木質部も炭化した状態で一部残存しており、ほぼ完全な状態であった。

埋納遺構内の堆積土は8つに分けられ、5層は曲物内にのみ認められる自然流入土である。これ以外は地山ブロックを含む人為的に埋め戻された埋土で、1～3層、4層、6・7層、8層の大きさく4つに大別することができる。8層は埋納遺構の底面に薄く分布しており、埋納するための穴を掘った際に底面付近に残っていた土か、底面を平らにするための置き土と考えられる。6・7層は銚子を埋めた土で、銚子を埋めた段階で一旦平らにし、この上に密教法具を入れた曲物を置いたものと判断される。4層は曲物の周囲に入れられた埋土であり、曲物と同じ高さまで埋め戻されたと考えられ、東側でやや曲物内に入り込んでいる状況が認められた。1～3層は曲物を覆うように埋め戻された土で、曲物部分に認められた空洞部分から判断すると、曲物が腐朽し、土圧によって本来曲物があった部分にも入り込んでいると考えられる。

なお、本遺構に伴う塚や建物などの施設については、断面観察や拡張した範囲を含む平面観察を行ったが、確認できなかった。



第5図 埋納遺構平面図・断面図 (S=1/10)

【出土遺物】出土した遺物は、重機で掘削した際に出土したものも含めると、青銅製品が独鉛杵1点、五鉛鉤1点、火舎1点(破片多数)、花瓶2点、六器鏡6点・皿台5点以上、飯食器2点、手錫杖1点、銚子1点の計20点以上、木製品が曲物底板と側板の破片である。独鉛杵と五鉛鉤、花瓶1点、六器鏡1点・皿台各2点、飯食器1点、手錫杖1点、銚子1点は比較的遺存状況が良好である。

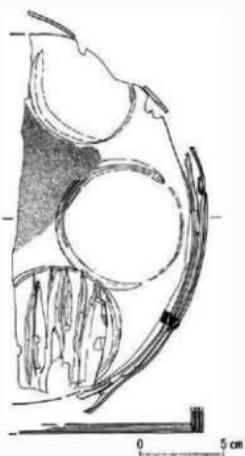
独鉛杵はほぼ原形のままの状態を留めており、長さは14.5cm、鉛部各4.7cm・把部5.1cmで、鉛部の幅は中程で0.7cm、把部中央の径が1.5cmである(第7図2)。把部は中央が鬼目式で、大きな梢円形を呈する張出しの弱い鬼目を四方に配し、両側には五鉛鉤と同様の二線の約束で締めた重弁八葉の蓮弁飾りが認められる。鉛部は五鉛鉤の中鉛と同様に細身で先端部が四角錐状を呈する。

五鉛鉤は、脇鉛基部が一部破損し脇鉛の一部が歪んでいるものの、他はほぼ原形を留めている(第7図1)。大きさは高さ14.0cm、鉛部4.1cm・把部4.9cm・鉛身部5.0cmあり、幅は鉛部3.1cm、把部中央の径1.5cm、鉛身端部の径6.1cmである。鉛部は中鉛が細身で先端部が四角錐状を呈し、脇鉛には小さな嘴形が認められる。把部は中央が鬼目式で四方に配された鬼目は横長でやや張出しが弱く、鬼目の上下には二線の約束で締めた重弁八葉の蓮弁飾りが認められる。鉛身部は紐帶をめぐらすだけの素文鉢で、鉛身口縁部は立ち上がりが小さく、狹の爪形を呈する。鉛身内に残っていた舌は長さ5.4cm・幅0.3~1.3cmあり、X線写真によると鉛・把と鉛身は別鉢で、第7図1の断面模式図のように接合され、舌は方形の環によってつなげられている。把部下側の蓮弁飾りが約束を挟んで蓮弁の位置がずれているのは鉛・把部と鉛身部をつなげる際に生じたものと考えられる。

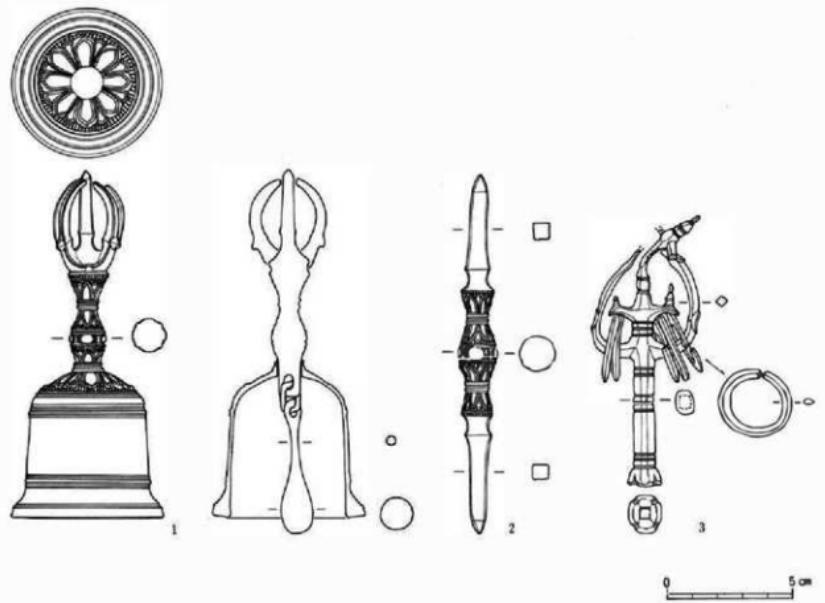
火舎は原形を留めておらず、脚部と火炉、蓋の破片十数点があり、これらを図上で復元したのが第7図4である。火炉は大きさは、口縁部径が10.6cm・底部径が7.2cmで、脚部も含めた高さは3.7cmである。火炉の形態は強く弯曲して外に開くもので、内部には受け状の浅い段がめぐり、幅1.4cmの鉢の端部は確かに肥厚する。縁によって成形された痕跡が残る3つの猫脚が付き、猫脚がある火炉底面内には、固定するための直径2~3mmの孔が各1個認められる。蓋は口縁部から下段のくびれまでの破片で、口縁部径は8.2cmである。今回の調査では蓋の破片が出土していないことから、単層式の火舎である可能性が高い。

花瓶は徳利形のものが2点出土しており、頸部で破損しているが接合し完形となるもの(第7図5)と胴部下半が欠損しているもの(第7図6)がある。大きさは口径3.5cm・胴径6.0cm・高台径4.2cmで、高さは13.1cmある。いずれも纏織挽き仕上げの素文のもので、口縁部・頸部・肩部に二線の紐帶、胴部に子持三線の紐帶が施されており、各紐帶に微妙な違いがある。また、高台端部に違いが見られ、第7図5は内面に面取りと沈線が施されているのに対し、第7図6は丸くおさめられている。

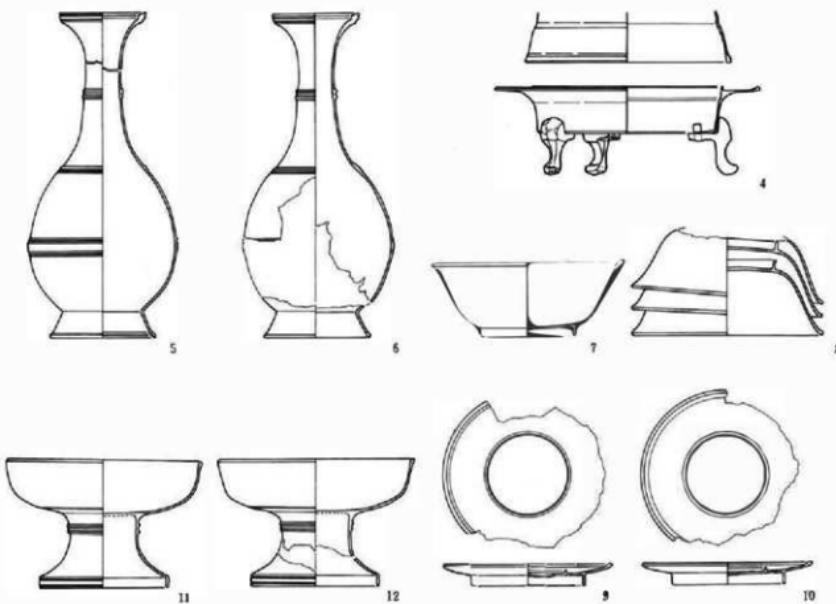
六器鏡・台皿は纏織挽き仕上げの素文形式のものである。鏡は、完形のもの1点(第7図7)と3点が重なったもの(第7図8)



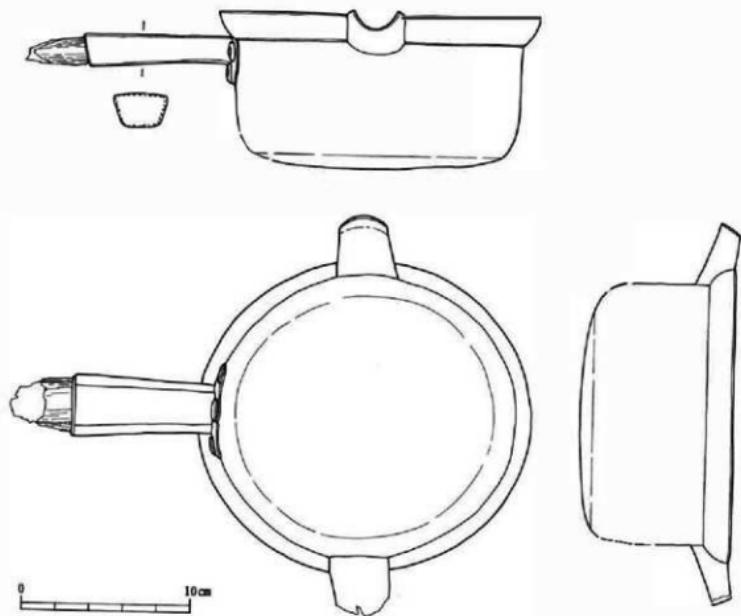
第6図 墳納遺物から出土した遺物(1)



0 5 cm



第7図 墳納遺構から出土した遺物(2)



第8図 墳納遺構から出土した遺物(3)

のほかに、2点が破片で出土しており、第7図7は口径7.7cm・高さ3.0cmで、高台は直径3.8cm・高さ0.4cmである。体部は腰の張りが弱く逆台形を呈し、口縁は反り気味に開き、端部が僅かに丸みを持つ。台皿は器形がわかるものが2点(第7図9・10)、他に多数の破片があり、高台部の破片から5点以上あったものと判断される。大きさは口径6.8cm・高さ0.9cm、高台径4.5cm・高さ0.5cmである。口縁は僅かに内湾し、端部は上側を面取り風に仕上げている。

飯食器も鍍金挽き仕上げの素文のもので、2点出土している。鏡部が破損しているが全体の形を留めているもの(第7図11)と台脚部を破損しているもの(第7図12)があり、大きさは口径7.8cm・台脚径5.2cm・高さ5.2cmである。台脚上部に二線の紐帶を廻らし、端部外面には2条の沈線が施されている。

手錠杖は杖頭部が出土しており、全体的に腐蝕が進んでおり遺存状態が悪く、輪部上端が破損している(第7図3)。輪部の左右上下に三日月形を付し、頂には宝塔を置いており、中央には同様の宝塔状の意匠を表現して左右に宝塔または水瓶と考えられる意匠を配している。穂部には輪部内に2箇所と下部に3箇所の計5箇所の紐帶を配し、下端は四葉の花卉風に仕上げている。柄部を受ける孔は4×5mmの長方形であった。遊環は一方に3個、他方に2個現存している。

銚子は両口のもので、底部周辺が欠損しているものの、他は原形を留めており、把手の木質の一部も炭化して残っていた(第8図)。大きさは現存長30.4cm、本体の直径は19.0cm、青銅製の把手の長さは9.1cm、高さは9.2cmである。本体と把手は3個の鉗で留められている。

第3章 考察とまとめ

1. 埋納遺構と出土遺物について

【埋納遺構の復元】

埋納遺構は平面形が長軸45cm以上の不整形で、底面が長軸38cm・短軸26cmの楕円形を呈する土壤で、旧表土面から掘り込まれており、深さは46cmである。調査の結果、埋納遺構は底面に青銅製の銚子を伏せて埋めた後、密教法具を復めた曲物を埋納したことが明らかとなった。

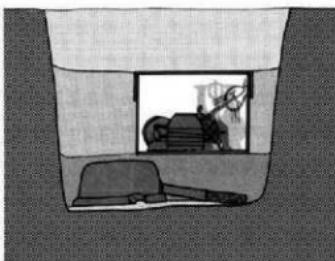
埋納遺構の堆積土の状況から埋土は4つの層に大別され、I層は底面に薄く分布する埋土で、土壤を掘った際に底面付近に残った土か、底面を平らにするための置き土と考えられる。II層は銚子を埋めた土で、III層は曲物の周囲に入れられた埋土であり、曲物と同じ高さまで埋め戻されたと考えられる。IV層は曲物の上に最後に埋め戻された土である。以上のことから、埋納手順は①埋納するための穴を掘り、把手を北向きにした銚子を伏せて底に置き、②銚子を埋め、③この上に密教法具を入れた曲物を置いて、④曲物を埋める、と復元できる。

検出した際、密教法具が納められた曲物は北側へ傾いていたが、これは本来水平に置かれていたものが、南側の銚子本体と重なっている部分は変化することはなかったが、北側の把手部分は木質部が腐朽したり、時間の経過とともに埋土が縮まっていくなどして傾いたものと推定される。

曲物内の密教法具の配置は、出土状況から南半部は側板に沿って西側に飯食器1点(第7図12)、南に飯食器1点(第7図11)が口縁を下に伏せて置かれ(第5図平面図①、写真図版1-5~8)、東には曲物底板に残っていた痕跡(第6図)から六器碗が口縁を下に伏せて置かれていたと考えられる。六器碗には3点が重なった状態で見つかっているもの(第7図8、写真図版4-5・6)があるが、本来は6点が重なっていて、飯食器側に持たれかかるような状況で確認された六器碗(第7図7)は一番上に重ねられていたものが何らかの原因で外れ、検出された位置に残っていたと想定される。破損が著しい火舎(写真図版4-1)と六器碗・台皿は、重機で掘削した際に引きずられるなどして破損したと考えられ、重機で掘削した際に曲物の中央を分断しており、調査区南壁際において破片で検出した火舎は断面にめり込むような状況の破片が見つかっていることから、火舎は曲物中央に、六器碗は飯食器の西側に立てかけるように置かれていたと推定され、他の遺物は北半部に置かれていたと考えられる。

【出土遺物の検討】

ここでは、密教法具について個々に検討し、その特徴や類例から製作年代を考えていきたい^{図11)}。



第9図 埋納遺構の復元模式図(南北断面図より作成)

独鉢杵は、鉢部が細身で鋭さを留め、把部中央の鬼目は横長で大きいことから、古い様相を呈するが、鬼目の張出しがやや弱く、鉢部の長さが把部よりも僅かに短い特徴はより新しい様相とされており、13世紀代のものと考えられる。五鉢鉢は小振りのもので、鉢部の中鉢や把部の鬼目や蓮弁飾りが独鉢杵と似た特徴を有する。鉢部の脇鉢の張りや把部中央の張りが弱く、鉢部と把部が華奢な印象を受ける。鉢・把部と鉢身部は別鉢であり、これらの特徴から、出土した遺物の中では最も新しい様相を持つが、13世紀代にはおさまるものと考えられる。火舎は火炉の形態が強く湾曲して外に開くもので、蓋が出土していないが、火炉内面に受け状の窪みがあり、蓋も高さがあることから、鎌倉時代以後に主体となる重層式の可能性もあるもので、おおよそ鎌倉時代の範囲におさまるものと考えられる。花瓶は徳利形のもので、類例が多くないことからどこまで遡るかは不明な点が多い。本遺跡出土のものは、徳利形花瓶の中でも古い一群に属するものと考えられ、13世紀代の年代が想定される。六器は鉢・台皿とも高台が低く、口縁端部が玉縁とならずに僅かに肥厚するもので、鉢は口縁部が外に開き、鎌倉時代の典型的な特徴を有し、出土遺物の中では最も古手の様相を持つものである。飯食器は鉢部の径が比較的大きく浅いもので、台脚部は長脚化しておらず、他の遺物とほぼ同じ時期のものと考えられる。手錫杖はこれまで見てきた法具類と大きな年代的な差はないと考えられる。

以上、遺物を個別に見てきたが、遺物により小さな年代差はみられるものの、鎌倉時代に位置付けられ、おおよそ13世紀代のものと考えられる。

【密教法具出土遺跡の検討と埋納遺構の性格】

郷主内遺跡で発見された金剛杵・金剛鉢と飯食器、一面具の一括埋納遺構は、東北地方で初めての発見である。金剛杵や金剛鉢を含む密教法具が遺構から出土した例には、経塚や城館跡、寺院跡から出土した例が知られており、これらの多くは密教法具が個々に少数出土しているのみである。

密墳具や一面具などの密教法具がまとめて出土している遺跡は、管見では全国で22遺跡知られており^{〔注2〕}、これらの遺跡をまとめたのが表1である。内訳は埋納遺構とその可能性のある遺跡が8遺跡、経塚や山岳関係の祭祀遺跡が6遺跡、寺院・寺院跡が5遺跡、城館跡1遺跡、不明2遺跡で、これらのうち明確な遺構に伴っているのは9遺跡である。埋納遺構とその可能性のある8遺跡のうち、埋納遺構と確認されているのは佐賀県五右衛門谷遺跡のみで、他は調査時に遺構が不明であったり、田畠などを耕作中に偶然発見されたものである。

郷主内遺跡の出土遺物の構成で特徴的なものは手錫杖と銚子である。22遺跡の中で錫杖が出土しているのは、経塚・祭祀関連遺跡が3遺跡、寺院関連遺跡が3遺跡の計6遺跡で、銚子と同様に液体を注ぐ遺物である提子が出土しているのは2遺跡である。また、銚子は、類例が東北地方では岩手県陸前高田市軍見洞遺跡から1点出土している(相原康二 2000)。これらのうち、郷主内遺跡の遺物構成と最も良く似ている遺跡は新潟県くつがた遺跡で、郷主内遺跡と同じく曲物内から発見されており、独鉢杵・五鉢鉢・火舎・花瓶(徳利形)・六器・飯食器のほか、提子が出土し、個々の遺物においても似た特徴が認められる。くつがた遺跡では、法具など1点1点が梵字の種子が墨書きされた和紙に包まれており、郷主内遺跡で見つかった繊維質も同様のものであった可能性も否定できない。くつがた遺跡

表1 密壙具及び一面鏡等を出土した遺跡一覧

順位	遺跡名	所在地	出土場所	出土遺物	遺物名	性質	年代
1	郷主内遺跡	高崎市内地区	高崎市内地区	火打石・五鉛鉋・鉄筋柱・六角筒瓦・瓦器・平底鉢・手鏡	該当する遺物は内部に埋められていた。	密壙具	13世紀後半
2	上之郷跡(古跡)	北埼玉郡山田町	牛 朝	火打石・手鏡・瓦器等	瓦と合せて出現。	手 鏡	不 明
3	リックガード跡	足利市御前山付近の河原	牛 朝	火打石・五鉛鉋・金剛杵・六角筒瓦・新谷窯・花瓶・坐像・骨壺	壺に火打石・花瓶・六角筒瓦・新谷窯・花瓶・坐像・骨壺	埋納遺物	13世紀
4	甲斐守内遺跡	県立自然史博物館	牛 朝	三輪鉋・鉄鋤・手鏡・金剛杵・三輪鉋・金剛杵・瓦器等	壺に火打石・金剛杵・瓦器等	密壙・金剛杵・瓦器等	古代～近世
5	近石寺跡	群馬県吾妻郡中之条町	高崎市内地区	火打石・五鉛鉋・瓦器等	火打石・五鉛鉋・瓦器等	密壙	明治時代
6	小出山古墳	埼玉県深谷市小出山	牛 朝	火打石・五鉛鉋・金剛杵・手鏡・手鏡・手鏡等	火打石・五鉛鉋・手鏡・手鏡等	手 鏡	室町
7	曾我塚跡	群馬県邑楽郡大泉町	牛 朝	火打石・五鉛鉋・六角筒瓦・瓦器・手鏡等	火打石等・再び火打石等	手 鏡	室町
8	本郷内遺跡	埼玉県幸手市本郷町	牛 朝	三輪鉋・手鏡・瓦器・金剛杵・手鏡等	瓦器等・瓦打石等	埋納遺物(瓦器)	14世紀
9	くぐれ塚跡	埼玉県幸手市本郷町	牛 朝	火打石・五鉛鉋・金剛杵・六角筒瓦・瓦器等	火打石等・瓦打石等	埋納遺物	14世紀
10	瓦割田分野	埼玉県上尾市瓦割田	牛 朝	火打石・瓦器等	瓦打石等	密壙	不 明
11	足利城跡	埼玉県飯能市足利	牛 朝	火打石・手鏡・瓦器等	火打石等・手鏡等	手 鏡	不 明
12	足利城跡	埼玉県饭能市足利	牛 朝	火打石・瓦器等	火打石等	密壙	室町
13	谷山城跡	群馬県吾妻郡谷山村	牛 朝	火打石・瓦器等	火打石等	密壙	室町
14	大門城跡	群馬県吾妻郡大門町	牛 朝	火打石・五鉛鉋・瓦器等	瓦打石等・火打石等	密壙	室町
15	足利大典内遺跡	群馬県伊勢崎市足利大典内	上 等	火打石・手鏡・瓦器	白磁(手鏡・火打石等)・瓦器等	手 鏡	室町～江戸
16	金崎山城跡	群馬県吾妻郡箕郷町上山田	牛 朝	三輪鉋・金剛杵・手鏡等	手鏡等	密壙	室町
17	大山内遺跡	群馬県吾妻郡箕郷町上山田	牛 朝	三輪鉋・金剛杵・手鏡等	手鏡等・瓦打石等	密壙	室町
18	利根寺跡	群馬県吾妻郡利根町利根寺	谷山市中野	火打石・手鏡等	手鏡等	密壙	室町
19	藤井跡	群馬県吾妻郡藤井町藤井	牛 朝	火打石・瓦器等	火打石等	密壙	室町
20	三日月遺跡	群馬県吾妻郡三日月町三日月	牛 朝	火打石・瓦器等	火打石等	密壙	室町
21	上野城跡	埼玉県深谷市上野	牛 朝	瓦器等	瓦器等	密壙	室町
22	五ヶ瀬遺跡	群馬県吾妻郡五ヶ瀬町	中野市中野	手鏡等	手鏡等	密壙	室町

では青磁皿3点が共伴しており、法具の特徴や青磁皿の年代から14世紀前後に位置付けられている。

埋納遺構の性格については、雲山信仰による登攀修行に伴うものとする見解(佐野大和 1972)や地鎮説などがある。新潟県くつがた遺跡の検討を行った金子拓男氏と宮腰公健氏は「追善供養を時代の主流とする中世にあって十三仏を基礎として埋納する一型態」とする考え方を示している(金子・宮腰 1977)。また、三谷義氏は「来世に備えた法具の土中埋納」や周辺の中世寺院と関連した「加持祈禱」による可能性を指摘し(三谷義 1980)、三輪喜六氏は仏法護持的性格を持った埋納遺構の法具塚と位置付け(三輪喜六 1977)、静岡県大竹遺跡の研究を行った足立順司氏は密教とは異なる仏具も出土していることから一種の地鎮めとする考えを示している(足立順司 1981)。

郷主内遺跡の埋納遺構は、周辺の遺跡との位置的関係を踏まえると、他の密教法具出土遺跡の検討から、中世の館跡や修驗の寺院との関連が想定される。今回遺構が見つかった周辺からは、遺構の性格を明らかにするようなものは発見されていないが、密壙具ともいいくべき独鉛杵・五鉛鉋と飯食器、一面鏡が一括埋納され、手鏡杖と両口の銚子が共伴している事実は、中世における密教法具のあり方の一端を示しており、密教法具の多様性を物語っていると言えるだろう。

註1. 出土した密教法具の独鉛杵・五鉛鉋・花瓶・六器鉢については、奈良国立博物館の阪田宗彦氏、東京国立博物館の原田敏一氏に実見して頂き、多くのご教示を賜ったほか、遺物の観察方法についても有益なご助言を頂き、合わせて関連する資料を実見させて頂いた。また、文献・資料については、安達訓仁氏から多くの提供を受けた。
なお、密教法具の部分名称については、金剛杵・金剛杵は「特別展 密教工芸秘録のかたち」(奈良国立博物館 1992)に従うこととし、これ以外のものについては、阪田宗彦『日本の美術282 密教法具』(至文堂 1989)に従った。

註2. 表1については、「考古学論究」第5号(立正大学考古学会 1999)をもとに作成した。

2.まとめ

1950年代後半(昭和30年代前半)の地図をもとに、池や堀、水路、細長い水田部分を堀跡等の施設と推定し、郷主内遺跡とその周辺をみてみると(第2図)、堀跡・溝跡は広範囲に及んでいると考えられ、いくつかのトレンチで堀跡や溝跡が確認された⁽¹¹⁾。郷主内館跡がある旧鳩田村は、江戸時代に

在郷屋敷・家中屋敷を有する家臣・給人が14氏知られており(齋藤悦雄 1986)、これらの在郷屋敷・家中屋敷などの一部が含まれている可能性も否定できない。

郷主内館跡は平城であり、「仙台領古城書上之覚」の記述通り、伊達氏が相馬氏との伊具郡領有をめぐる争いに際し、前線の拠点である矢ノ目館の後詰として築いたとも考えられるが、今回の調査で中世の遺物が確認されたことにより、中世から存在した館跡を改修・拡張した可能性が高くなつた。

今回、埋納遺構が見つかった区域も、郷主内館跡と関連する区域である可能性が高く、茶毬に間連する遺構も見つかっていることから、寺院などの存在も想定される。密教法具埋納遺構が見つかった地域の小字名は「寺田」となつており、以前に寺院があつたことを示しているとも考えられる。また、伊具郡内には、仙台藩における本山派修験の仙南地域の中心であった、伊具・名取・宇多3郡を靈地とする東光院と柴田・刈田郡を靈地とする宗咲院があり、これらとの関連も想定される。今後、これらの可能性を踏まえた周辺の調査により、地域の歴史に新たな光が注がれることを期待したい。

註1. 1950年代後半の地図については、角田市生涯学習課文化財保護係を通じて角田市税務課所有の資料の提供を受けた。

<引用・参考文献>

- 相原康二 2000 「鏡子(さしなべ)と提子(ひきげ) —奥州藤原氏の酒器—」『岩手県立博物館だより』No84 岩手県立博物館
- 足立順司 1981 「掛川市大竹遺跡の研究」『森町考古』16 森町考古学会
- 石田茂作 1977 『仏教考古学論叢』5 思文閣
- 角田市史編さん委員会 1984 『角田市史1 通史編(上)』角田市
- 角田市史編さん委員会 1986 『角田市史1 通史編(下)』角田市
- 金子祐男・宮原公健 1977 「くつがた遺跡出土の密教法具」『月刊文化財』7月号
- 齋藤悦雄 1986 「仙台藩の成立と角田」『角田市史2 通史編(下)』角田市
- 佐々久 1961 『仏教史』『宮城県史12 学問宗教』宮城県史刊行会
- 佐野大和 1972 「二荒山」「神道考古学講座」第5巻 雄山閣
- 『新版 仏教考古学講座』第5巻 1984 雄山閣
- 鈴木規夫 1989 『日本の美術283 供養具と僧具』至文堂
- 阪田宗彦 1989 『日本の美術282 密教法具』至文堂
- 東京国立博物館 1967 『東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇』
- 東京国立博物館 1990 『東京国立博物館図版目録 仏具篇』
- 中川久夫他 1986 『土地分類基本調査 角田』宮城県
- 奈良國立博物館 1992 『特別展 密教工芸 神秘のかたち』
- 阪田宗彦 1989 『日本の美術282 密教法具』至文堂
- 藤沼邦彦 1981 『宮城県『日本城郭大系』第3巻 新人物往来社
- 三谷義 1980 「三山口遺跡出土密教法具の研究」『鳥取県博物館研究報告』17 鳥取県立博物館
- 宮城県 1970 「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32 宮城県史刊行会
- 立正大学考古学会 1999 『考古学論考』第5号

保存処理

東北歴史博物館 研究員 及川 規

1 事前調査

土砂が付着したまま搬入された銅製遺物・有機質遺物の残存状態をX線などにより観察した。

銅製遺物は、比較的良好な状態で残っているもの（独鉢や花瓶など）から、金属性を喪失し、薄く、わずかの力が加わっただけで破損しそうなもの（六器など）まで、様々な劣化状態を示していた。表面のサビも、目視で判断する限り、緑青に覆われて丈夫な保護層を形成しているものと、ブロンズ病と思われる緑灰色を呈しているもの（錫杖頭など）があり、一様ではなかった。

有機質遺物では、法具を囲めていた曲物の底板など3～4点が比較的良好な残存状態だった。そのほか、炭化した木質破片や腐敗・劣化した繊維質などが見られた。花瓶内部の土砂中にも繊維質が残存していた。処理前の状態を図1～図4に示した。



図1 両口銚子（処理前）

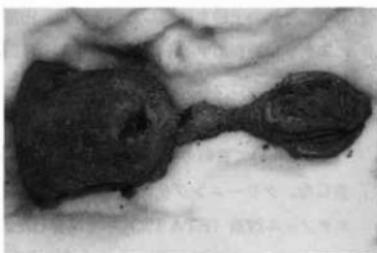


図2 五鉢銚（処理前）



図3 六器（処理前）

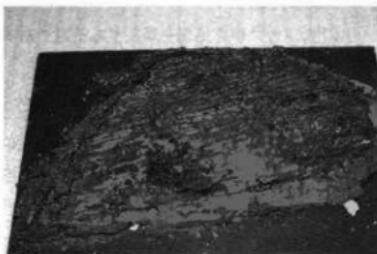


図4 曲物底板（処理前）

2 前処理

① 銅製遺物

腐食・劣化の進行を防ぐ応急的な処置として、土砂が付着したままの遺物をベンゾトリアゾール（BTA）のエタノール溶液（1%）中に浸漬（両口銚子にはバスツールビベットを用いて繰り返

し滴下)し、脱水ならびに防錆処理を施した。数日間浸漬して風乾するという操作を5回反復した。クリーニング処理を開始するまで、エタノール溶液(BTA 1%)中で保管した。

② 有機質遺物

曲物の底板は、土砂が付着したままの状態で水溶性アクリル樹脂溶液(1%)を繰り返し噴霧して仮強化を行った後、密閉容器中で湿度状態を保持して保管している。

曲物以外の有機質遺物は水中に4週間(1週間毎に水替え)浸漬した後、エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム塩(EDTA2Na)水溶液中で脱鉄した(3回反復)。その後、水中に浸漬してEDTA2Naを除去し(3回反復)、ホウ酸-四ホウ酸ナトリウム(混合比=7:3)水溶液(0.5%)中に浸漬して保管している。

3 クリーニング

① 兩口銚子

X線を用いて劣化状態や遺物内部に残存物が無いことを確認した後、エタノール溶液(BTA 1%)を滴下しながら、メス、竹串、ブラシ等を用いて外側の土砂を除去した。その後、内部に土砂を残したまま、外側にアクリル樹脂のアセトン溶液(1%、BTA 0.5%混)を繰り返し塗布して仮強化を行った。

② その他の銅製品

X線を用いて資料の状態を確認(図5)した後、上と同様に土砂を除去した。クリーニング後の資料は、実測、写真撮影等が終了するまでエタノール溶液(BTA 1%)中で保管した。



図5 X線写真(五鉢鉢)

4 今後の方針

以下のように保存処理を継続する予定である。

① 銅製品

兩口銚子は、外側をアクリル樹脂で強化しながら、内部に残存している土砂を除去する。その後、クリーニングを終了した他の銅製品とともに、脱塩(必要性や方法等については、資料担当者や東北芸術工科大学保存科学研究室等と協議しながら判断する)、樹脂含浸(BTAを添加したアクリル樹脂を使用)、接合の順で処理を行う。

② 有機質遺物

曲物底板の土砂を除去した後、他の有機質遺物とともに、脱鉄、ポリエチレングリコール水溶液含浸、真空凍結乾燥、表面処理、接合の順で処理を行う。



Gトレーナーを西からのぞむ（ほぼ中央がGトレーナー）



Gトレーナーで検出した火葬遺構（左）と土壌（右）（南から）



掘り下げ前の埋納遺構断面（北から）



掘り下げ後の埋納遺構①（北から）



掘り下げ後の埋納遺構②（北西から）



掘り下げ後の埋納遺構③（上から）



周囲を掘り下げた段階での埋納遺構①（北から）



周囲を掘り下げた段階での埋納遺構②（北西から）

写真図版1



周囲を掘り下げる段階での埋納造構③（北東から）



周囲を掘り下げる段階での埋納造構④（南から）曲物側板と銭子底部



周囲を掘り下げる段階での埋納造構⑤（上から）



密教法具を取り上げた状況（北から）



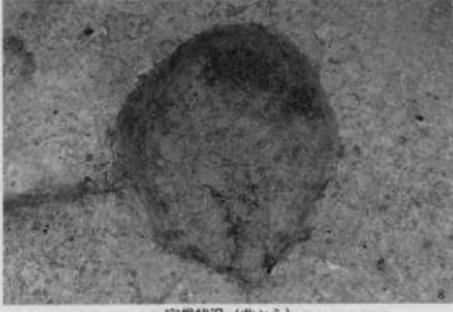
曲物底板を取り上げた状況（北から）



銭子の検出状況①（北から）



銭子の検出状況②（北東から）



完築状況（北から）

写真図版 2



写真図版 3



2



1



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

写真図版 4

いつ ほん やなぎ い せき こ ぬま い せき

一本柳遺跡・小沼遺跡

目 次

I はじめに	141
II 発掘調査の成果	142
1 発掘調査の方法と経過	
2 基本層序	
3 発見された遺構と遺物	
III まとめ	148

調査要項

遺跡名：一本柳遺跡（いっぽんやなぎいせき）

（宮城県遺跡地名表登載番号：39044、遺跡記号：IZ）

小沼遺跡（こぬまいせき）

（宮城県遺跡地名表登載番号：39033、遺跡記号：TN）

所在地：宮城県遠田郡小牛田町一本柳・小沼他

調査原因：出来川右岸地区（担い手育成）基盤整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

高橋栄一、引地弘行

調査期間：2000年（平成12年）11月13日～12月7日

調査対象面積：3,640m²

調査面積：1,750m²（事前調査 790m²、確認調査 960m²）

調査協力：小牛田町教育委員会、宮城県古川産業振興事務所、小牛田町土地改良区、大場建設

I はじめに

一本柳遺跡は、遠田郡小牛田町一本柳・新一本柳・塩釜に、小沼遺跡は同町小沼・勘堂・二ツ塙に所在する。これらの遺跡は小牛田町役場の南東約3km離れた不動堂地区にあり、南郷町と境を接している。地形的には、嵐岳丘陵と大松沢（鹿島台）丘陵が最も接近し、大崎低地が狭くなる東縁部にあたり、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。（第1図）

一本柳遺跡は、奈良・平安時代、中世、近世にいたる東西1km、南北0.3kmにおよぶ遺跡である。平成7年から5ヶ年にわたり、建設省東北地方建設局による鳴瀬川の堤防改修と中流堤防設計画に伴う発掘調査が行われた。奈良・平安時代では掘立柱建物群が規則的・継続的にあり、官衙的集落であった可能性が高い。また、中世では道路跡や掘立柱建物跡、井戸跡・溝跡が検出された。溝で区画された屋敷地が12以上確認され、そのうち東西70m、南北40mの規模をもつ屋敷地は在地領主クラスの武士の屋敷地であったと考えられている（山田・伊藤：1998、茂木・岩見：2001）。

小沼遺跡は、これまで土器器・須恵器・青磁・白磁が発見されており、古代・中世の集落跡と考えられている（茂木：2000、小牛田町史編纂委員会 1970）。



番	遺跡名	種別	時代	番	遺跡名	種別	時代	番	遺跡名	種別	時代
1	一本柳遺跡	複数	奈良・平安、中世、近世	10	三重瓦城跡	城跡	中世	21	船入遺跡	船形地	飛鳥後期
2	小沼遺跡	複数地	古代・中世	11	三重瓦古墳	前方後円墳	古墳中期	22	八重古墳群	円墳	古墳後期
3	吹音寺古墳	円墳	古墳	12	櫛原遺跡	船形地	古代	23	御木道跡	船形	飛鳥・古墳小・後期、奈良・平安
4	吹音寺前跡	城跡	中世	13	櫛原古墳	円墳	古墳後期	24	東谷地古墳	円墳	古墳後期
5	西頭跡	城跡	中世・近世	14	御牧原古墳	円墳	奈良	25	坪庭遺跡	散布地	古代
6	鶴山古墳	古墳	古墳	15	常山貝塚	貝塚	飛鳥後期	26	坪庭古墳	円墳	古墳
7	森山古跡	城跡	飛鳥後期、古代	16	土塹形古墳	円墳	古墳中期	27	原尻遺跡	散布地	古墳前、中・後期
8	小町古跡	城跡	古代	17	御座神社古墳	円墳	古墳中期	28	原尻古墳	円墳	古墳前
9	化粧街道跡	散在地	古代	18	御山真鏡大森跡	横穴墓	古墳後期	29	原尻遺跡	散布地、古墳	古墳前、中・後期
10	御山真鏡古墳	古墳	古墳中期	19	原尻七城跡	城跡	中世	30	御山真鏡古墳	古墳中期	古墳前、中・後期

第1図 一本柳・小沼遺跡の位置と周辺の遺跡

II 発掘調査の成果

1 発掘調査の方法と経過

今回の一本柳・小沼遺跡の発掘調査は、宮城県古川産業振興事務所が主体の出来川右岸地区（担い手育成）基盤整備事業に係る第2次調査である。

平成11年度の調査では一本柳遺跡において古代・中世の建物跡、土壙、溝跡、畦畔状遺構が検出されたが、小沼遺跡では遺構・遺物は発見されなかった。今回の第2次調査では、用水路・揚水機設置部分及び道路部分を対象に行った。調査区は一本柳遺跡の北東部をI区、中央北部をII区、小沼遺跡の南部をIII区、北部をIV区、西部をV区とした(第2図)。その結果、I区では土壙、溝跡、小溝状遺構、畦畔状の高まりを検出したが、II区では遺構は検出できなかった。一方、III・IV・V区で土壙、井戸跡、溝跡が検出された。

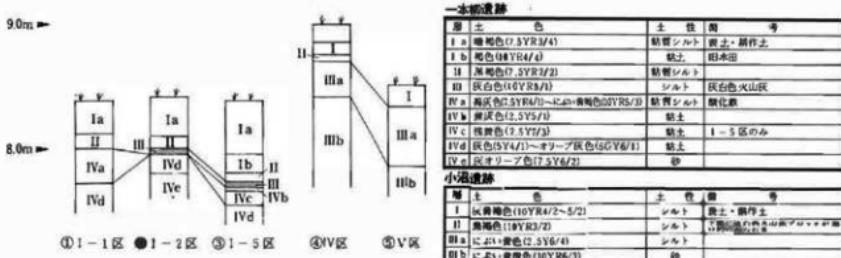
検出された遺構の平面図や調査区の位置などの記録に際しては、国家座標を基準としてI-1・2区は1/20の縮尺で、その他は1/100の縮尺で作成した。また、断面図は1/20で適宜作成した。写真記録は35mm、6×7モノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて作成した。

2 基本層序(第3図)

一本柳遺跡の基本層序は、I層は暗褐色の表土・耕作土、II層は黒褐色粘質土、III層は灰白色火山灰(10世紀前半)の一次堆積土、IV層は5つに細分され、a層は褐灰色～にぶい黄褐色粘質土、b層は黄灰色粘土、c層は5区のみにみられる浅黄色粘土、d層はオリーブ灰色粘土、e層は灰オリーブ色砂である。IV層上面で遺構確認を行った。基本層序第III層の堆積状況から、1・2区、3区北部は微高地で3区中央から4・5・6区にかけて低くなる。



第2図 調査区の位置と周辺の地形



第3図 基本層序

小沼遺跡の基本層序は、I層は灰黄褐色の表土・耕作土、II層は黒褐色土、III層は2つに細分され、a層にはぶい黄色～にぶい黄橙色の粘質土、b層にはぶい黄橙色砂である。II層下面に灰白色火山灰（10世紀前半）のブロックが部分的にみられる。III層上面で遺構確認を行った。なお、II層は一本柳遺跡のII層に対応する。

3 発見された遺構と遺物

① 一本柳遺跡の遺構と遺物

I区（第2図）では、土壌14基、溝跡10条、小溝状遺構4面、畦畔状の高まり5条を検出した。遺物は土師器・須恵器が出土した。

A. 土 壤

土壌は1・2区西側で14基検出した。土壌2・3、土壌9～11は小溝状遺構3・4と重複し、これより新らしい。規模は長軸が1.7～4.5mで平面形が楕円形、溝状または不整形のもの（土壌4～7・11～14）、0.7～1.3mで平面形が楕円形のもの（土壌1～3・8～10）がある。断面形は皿状のものが多く、深さは11～23cmである。堆積土は焼土・炭を含む褐灰色粘土を主体としている。

[土壌3] 1区西側で検出し、小溝状遺構4より新らしい。平面形は径1.6mのほぼ円形で、深さは23cmである。断面形は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に細分され、1・3・4層は焼土・炭を含み、2層は人為的に埋め戻されている。

遺物はロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。土師器壺（第5図1）は底部に回転ヘラケズリが施され、須恵器壺（第5図2）は底部が回転糸切り無調整である。

[土壌9] 1区西側で検出し、小溝状遺構4より新らしい。平面形は長軸4.5m、短軸2m以上の不整形とみられ調査区南に延びている。堆積土は焼土を含む褐灰色粘土である。遺物はロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺・甕が出土している。須恵器壺（第5図8）の底部は回転糸切り無調整である。

[土壌14] 1区西側で検出した。平面形が長軸0.7m以上、短軸0.35mの楕円形とみられ調査区北に延びている。深さは11cmで、断面形は皿状を呈するとみられる。堆積土は炭を含む褐灰色粘土である。遺物はロクロ調整の土師器壺（第5図7）が出土しており、底部に回転ヘラケズリが施されている。

これらの土壌の出土遺物をみると、土師器壺はロクロ調整で口径に対する底径の比が小さく、器高

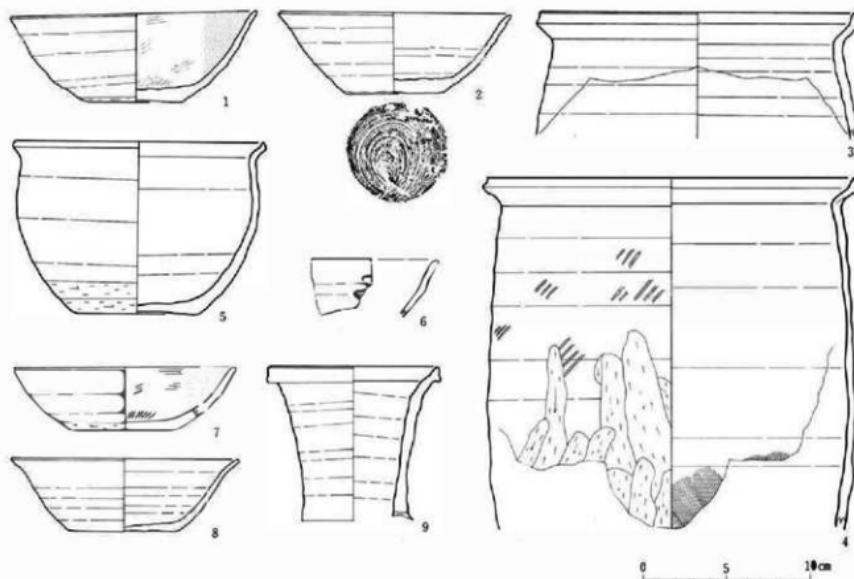
2・3・8B・8C) がある。

[溝1] 1区東側で検出した南北方向の溝跡で、規模は上幅0.6m、下幅0.2m、深さ11cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に細分され、自然堆積である。遺物は出土していない。

[溝5・6] 溝5は1区中央、溝6は3区南側で検出した南北方向の溝跡で、一連の溝跡とみられる。溝4より古く、検出長は約40mである。規模は上幅0.6~0.8m、下幅0.3~0.4m、深さ10~20cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2~6層に細分され、自然堆積である。遺物は、非ロクロ調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・高台坏が出土している。須恵器坏の底部の切り離しにはヘラ切りと回転糸切りがあるが、図示できるものはない。

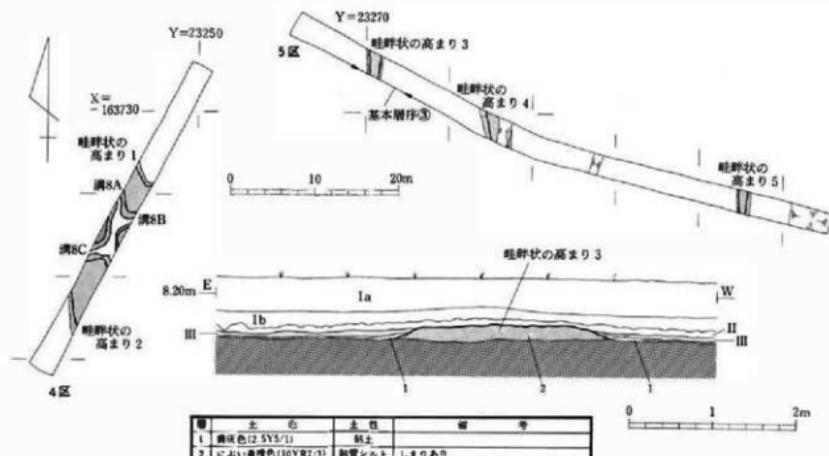
C. 小溝状遺構

歴跡と考えられる溝状の掘り込みである小溝状遺構は4面検出した。1区西側では南北方向(小溝状遺構2)より東西方向(小溝状遺構1)が新しい。2区西側では土壌2・3、9~11より古く、東西方向(小溝状遺構4)より南北方向(小溝状遺構3)が新しい。規模は上幅が15cm~40cm、深さが5cm~18cmであり、断面形はU字形を呈する。遺物は小溝状遺構4からロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。須恵器坏の外面体部に墨書きがみられる(第5図6)。



No.	出土遺構	概 要	寸	寸	寸	寸	寸
1.	土壌3	土師器・坏 外: ロクロナデー体盤下端回転ヘラケズリ、底: 不明一回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ一墨書き	14.8	5.9	5.5	1/3	2~6
2.	土壌3	土師器・坏 内外: ロクロナデー、底: 回転糸切り一(内縫ナデ)	13.9	6.0	5.0	4/5	2~7
3.	土壌3	土師器・甕 内外: ロクロナデ	(19.0)	—	—	(4)1/4	
4.	土壌3	土師器 外: ロクロナデー平行クヨキ体盤ヘラケズリ、内: ロクロナデーテグ	(21.4)	—	—	1/4	
5.	土壌3	土師器・甕 外: ロクロナデー体盤下端回転ヘラケズリ、底: 回転糸切り一(内縫ナデ)、内: ロクロナデ	(15.0)	(7.4)	10.4	1/5	
6.	小溝状遺構	土師器・坏 外: ロクロナデー	—	—	—	—	小量片2~3
7.	土壌14	土師器・坏 外: ロクロナデー体盤下端回転ヘラケズリ、底: 不明一回転ヘラケズリ、内: ヘラミガキ一墨書き	(13.2)	6.0	3.8	1/3	
8.	土壌9	土師器・坏 内外: ロクロナデー、底: 回転糸切り、墨書き	(13.6)	(6.9)	4.4	1/4	
9.	遺構復元	土師器・甕 内外: ロクロナデー、一部に合瓦物付着	10.0	—	—	瓶部のみ	

第5図 1区出土遺物



第6図 I-4・I-5区遺構平面図・断面図

D. 哉群状の高まり

4区では溝8に沿って2条（哉群状の高まり1・2）、5区では3条（哉群状の高まり3～5）検出した。哉群状の高まり1・2は上幅2.2～4.5m、基底幅3.4～5.0m、高さ10～20cm、哉群状の高まり3～5は上幅0.7～1.8m、基底幅1.4～3.2mである。最も残りの良い哉群状の高まり3は上幅1.2m、基底幅1.8m、高さ40cmである。遺物は須恵器壺が出土しているが図示できない。

(2) 小沼遺跡の遺構と遺物

III区では、土壤1基を検出した。

〔土壤1〕調査区の南側で検出した。平面形は東西6.0m以上の楕円形を呈するとみられ、深さは60cm以上である。遺物は出土していない。

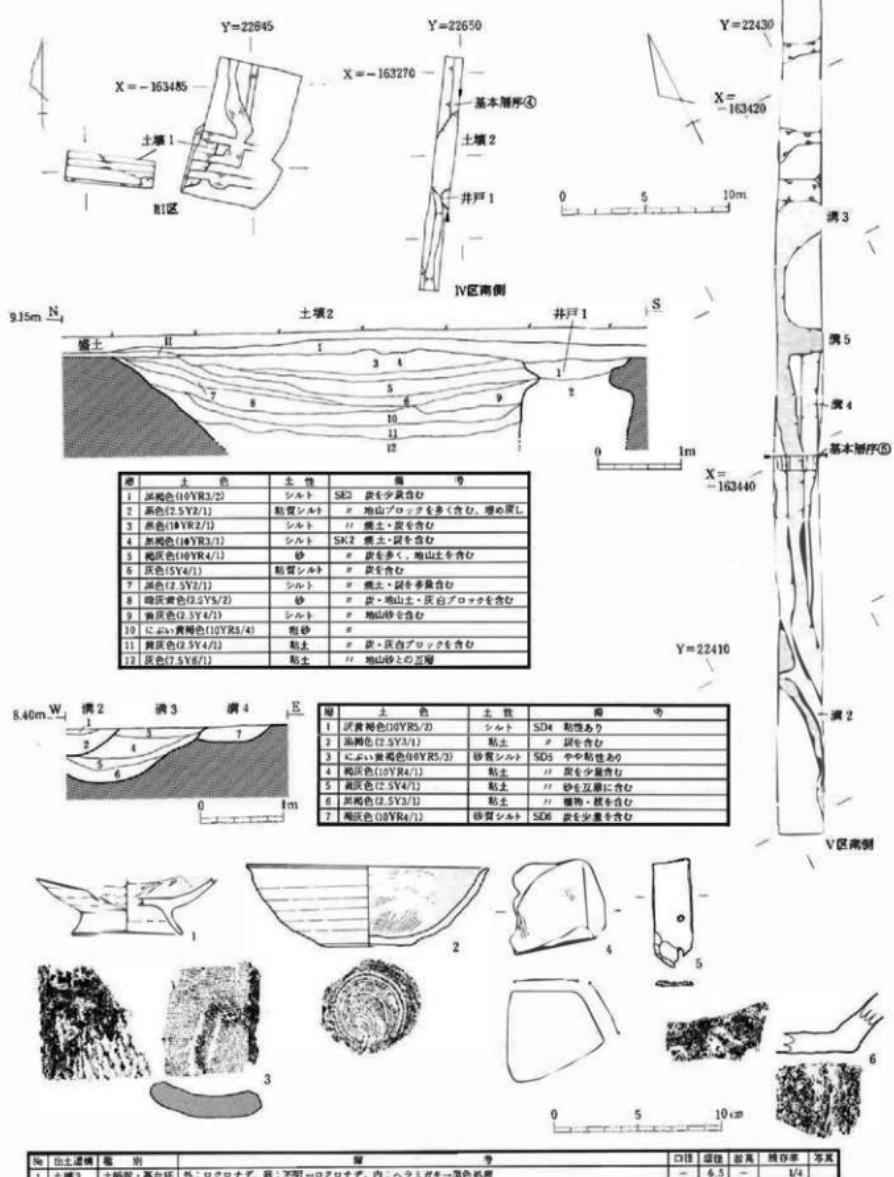
IV区では、土壤1基、井戸跡1基を検出した。

〔土壤2〕調査区南側で検出し、井戸1より古い。平面形は南北5.0m以上の楕円形を呈するとみられ、深さは1.0m以上である。堆積土は10層に細分され、自然堆積である。9層には灰白色火山灰のブロックが含まれる。

遺物は、非クロ調整の土師器甕、クロ調整の土師器壺・高台壺・甕、須恵器壺・甕、瓦、石製品、木製品が出土している。土師器壺（第7図2）は底部が回転糸切り無調整で、口径に対する底径の比が小さく、口縁部が外反し、器高が高い。平瓦（第7図3）は一枚作りで凸面に繩タタキが施されている。

〔井戸1〕調査区南側で検出した素掘りの井戸跡である。土壤2より新しい。平面形は径1.3mの円形を呈するとみられ、深さ90cm以上である。断面形は円筒状である。遺物は出土していない。

V区では、溝跡5条を検出した。南側で検出した溝2は溝3より新しく、20m分を検出した。規模は上幅1.1m、深さ32cmである。溝4は溝3より古く、16m分を検出した。規模は上幅1.0m、深さ20cm



第7図 III・IV・V区遺構平面図・断面図・出土遺物

である。北側で検出した溝1は上幅1.0m、深さ9cmである。

【溝3】南側で検出した南北方向の溝跡で、溝2より新しく、溝4より古い。方向は東へ約18°偏している。溝5が接続し、北側で東に曲がる。長さ約40m分を検出した。規模は上幅2.5m、深さ65cmである。断面形は逆台形を呈するとみられる。堆積土は4層に細分され、自然堆積である。遺物は、常滑産の中世陶器甕（第7図6）が出土している。

III まとめ

1. 一本柳遺跡では古代（灰白色火山灰降下以前）の土壤・溝跡・小溝状遺構・畦畔状の高まりが検出された。I-1・2区では、小溝状遺構群（畝跡）の後、土壤群がつくられる。I-4・5区では、明確な耕作土や小畦畔は検出されなかつたが、畦畔状の高まりが検出され、水田が存在した可能性が考えられる。これらの遺構の年代は、灰白色火山灰に覆われること、出土遺物から概ね9世紀代のものとみられる。この調査により遺跡東部の範囲が北側に拡大することが分かった。
2. 小沼遺跡では古代・中世の土壤・井戸跡・溝跡が検出された。V区で検出した大溝は、東側を区画する中世の区画溝と考えられる。なお、遺跡の東部で土師器・須恵器が採集されたことから、遺跡の範囲が南へ拡大することが分かった。

引用・参考文献

- 加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』II 芹沢長介先生遺歿記念論文集刊行会
小牛田町史編纂委員会（1970）：『小牛田町史』 上巻
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 宮城県多賀城跡調査研究所
茂木好光（2000）：「一本柳・小沼遺跡」「名生館遺跡ほか」 宮城県文化財調査報告書第183集
茂木好光・岩見和泰（2001）：「一本柳遺跡II」 宮城県文化財調査報告書第185集
山田晃弘・伊藤 裕（1998）：「一本柳遺跡I」 宮城県文化財調査報告書第178集



1. I-1区全景
(北西から)



2. I-2区全景
(北西から)



3. I-2区溝5断面 (南西から)



4. I-2土壤3断面 (南西から)



1. I-3区全景（南西から）



2. I-4区全景（南西から）



3. I-5区全景（北西から）



4. I-5区畦畔状の高まり3（北東から）



5. IV区土壤2断面北半（北から）



6. V区段2・3・4断面（南西から）



7.



8.



9.



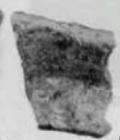
10a



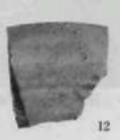
10b



11a



11b



12



13

淀

遺

跡

調査要項

遺跡名：淀遺跡（よどいせき） 宮城県遺跡地名表登載番号：49022 遺跡記号：TP

所在地：栗原郡志波姫町沼崎道崎

調査原因：住宅地造成

調査主体：志波姫町教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

古川一明、山田晃弘

調査期間：平成12年11月27日～11月29日

調査対象面積：20,000m²

調査面積：3,000m²

調査協力：JA 栗っこ

I. はじめに

淀遺跡は栗原郡志波姫町沼崎道崎に所在する。遺跡の北部は、迫川及びその支流である一迫川によって形成された沖積地が広がり、南部は奥羽山脈から東に延びる築館丘陵が横たわる。遺跡は一迫川によって形成された河岸段丘の北縁部に立地する。

周辺の古代の遺跡をみると（第1図）本遺跡の北西約1.5kmには神護景雲元年（767年）に設置された古代城柵・伊治城跡が存在する（築館町教育委員会：1999他）。また本遺跡が立地する段丘北縁部には、御胸室遺跡、宇南遺跡、鶴ノ丸遺跡、吹付遺跡など、奈良・平安時代の大規模な集落跡が連なっている。これらの遺跡は一迫川を挟んで伊治城跡と対峙する位置にある。

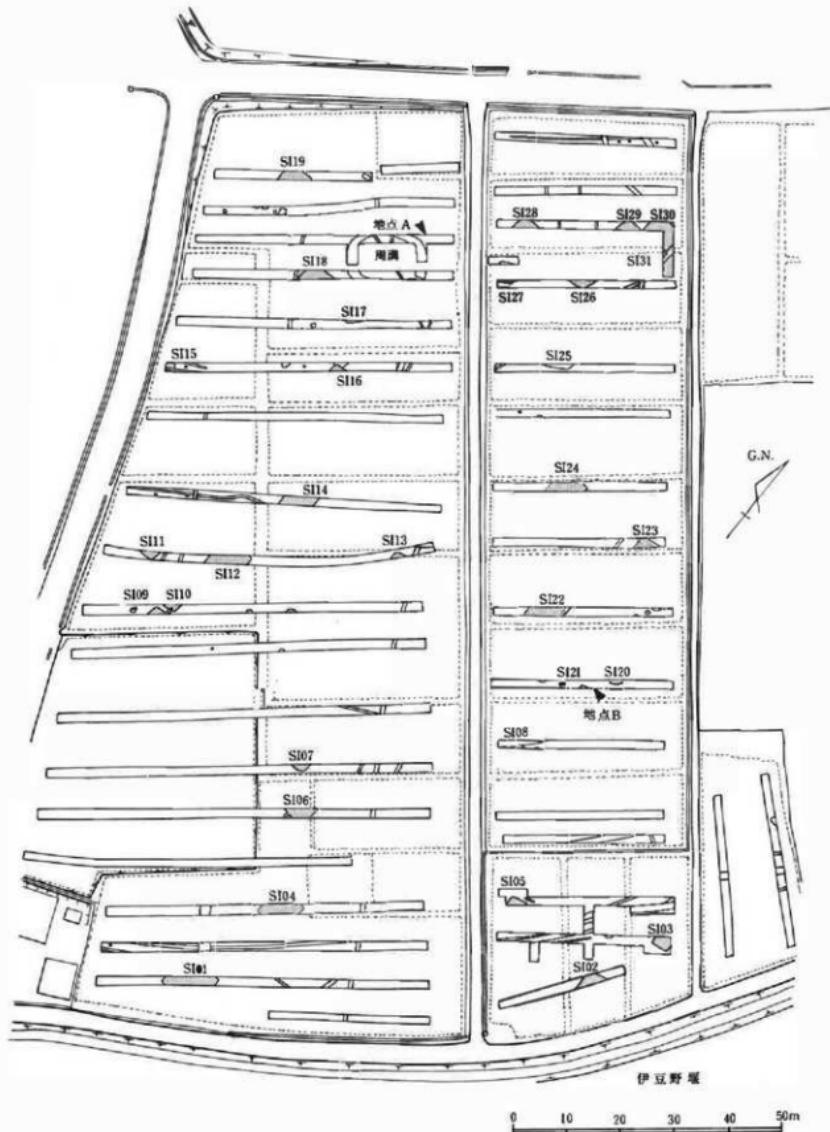
II. 調査の方法と経過

平成12年、「JA栗っこ」が、淀遺跡内の南部において住宅地の造成工事を計画したため、JA栗っこ、志波姫町教育委員会、宮城県文化財保護課の三者で協議し、確認調査を実施することにした。調査は、対象地内の全域に6～9m間隔で、幅1.8mの任意のトレンチを設定し掘り下げた（第2図）。その結果、竪穴住居跡31軒をはじめ多数の遺構・遺物が対象地全域で発見され、遺構の密度は希薄であるが、遺跡の範囲は対象地の四周に広がることがわかった。



No.	遺跡名	立地	概況	時代
1	淀遺跡	段丘	羽衣城・奈良・平安	
2	日貴船跡	段丘	城跡	中世
3	吹付遺跡	段丘	奈良・平安	
4	伊治城跡	段丘	古墳群・中・奈良・平安・中世	
5	鶴ノ丸遺跡	段丘	高麗文鏡・奈良・近世	
6	宇南遺跡	段丘	無系・城跡	高麗文鏡・鶴・生・近世
7	羽衣堂遺跡	段丘	無系	鶴岡・鶴生・古墳～近世
8	川敷船跡	丘陵	城跡	中世
9	大山古墳群	丘陵	古墳	古墳
10	森内遺跡	丘陵	散在地	高麗文・古代

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 遺構分布図

これらの調査結果をもとに、上記三者で再度協議した結果、「JA 栗っこ」側が、工事が遺跡に及ぼす影響を最小限にとどめるよう設計・工法・施設の配置などを検討することで合意した。

なお、調査区および発見された遺構の位置は、1/5000の工事計画図に記入して記録とした。

III. 調査の概要

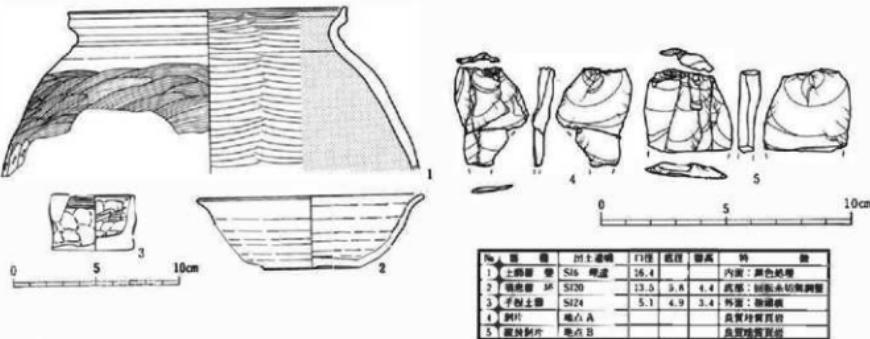
調査地区は、現況が水田、畠地、荒地で、地形的には南から北へわずかに傾斜しており標高25~26mである。遺構確認面は表土下20~40cmのローム層上面である。

発見された遺構として竪穴住居跡、柱穴群、土壤、溝跡などがある。竪穴住居跡は31軒で、調査区全体に散在し、重複するものは少ない。住居の方向は、いずれもほぼ真北方向で、平面形は方形を基調とし、規模は一辺3m前後の小型のものから10m前後の大型のものまである。堆積土中に灰白色火山灰が認められるものが多い。掘立柱建物跡を構成するとみられる柱穴は西側のトレーニングを中心にも多数検出された。土壤・溝跡も多様な規模・方向のものが各地で検出された。

出土遺物には、土師器・須恵器・旧石器がある。土師器・須恵器は、8世紀後半から9世紀にかけてのもので、ロクロ調整の土師器壺・鉢・甕、非ロクロ調整の土師器甕・須恵器壺・甕・壺などがある。図示できた遺物は第3図に示した。

IV. まとめ

1. 淀遺跡は一迫川南岸の段丘北縁部に立地している。
2. 確認調査の結果、竪穴住居跡31軒、土壤、溝跡、柱穴などが検出され、土師器・須恵器・旧石器などが出土した。
3. 遺構の年代は、出土遺物から奈良・平安時代と考えられる。
4. 住居跡は広範囲に点在しており、奈良・平安時代の大規模な集落跡であることが確認された。



第3図 出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	みょうだいせき						
書名	名生館遺跡ほか						
副書名							
巻次							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第187集						
編著者名	阿部博志・古川一明・須田良平・岩見和泰・吉野武・引地弘行・稻毛英則						
編集機関	宮城県教育委員会						
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL022-211-3682						
発行年月日	西暦 2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 38度 36分 34秒	東経 140度 53分 27秒	調査期間 20000410～ 20000727 20001002～ 20001213	調査面積 (m ²) 10,113 830	調査原因 ほ場整備事業に伴う事前調査
名生館遺跡 大崎窯跡	宮城県古川市東大崎字名生館	042048 27018 27206	38度 36分 34秒	140度 53分 27秒	20000410～ 20000727 20001002～ 20001213	10,113 830	ほ場整備事業に伴う事前調査
郷主内遺跡	宮城県角田市郷主内枝野	042281 03195	37度 56分 30秒	140度 48分 34秒	20000306～ 20000315	930	ほ場整備事業に伴う確認調査
一本柳遺跡 小沼道路	宮城県達田郡小牛田町一本柳、小沼	045039 39044 39033	38度 31分 26秒	140度 05分 42秒	20001113～ 200001207	1,750	ほ場整備事業に伴う事前調査
淀遺跡	宮城県栗原市志波姫町沼崎字道崎	045292 49022	38度 45分 20秒	141度 03分 45秒	20001127～ 20001129	3,000	住宅地造成工事に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
名生館遺跡	集落跡	縄文、弥生、古代、中世	埠跡2、掘立柱建物跡27、堅穴住居跡10、井戸跡8、溝跡166、土壙389	土師器、須恵器、硯、繩文土器、弥生土器	名生館官署と密接に関わる集落、開東系土師器出土		
大崎窯跡	窯跡	近世～近代	窯跡1、井戸跡2、溝跡、土壤	陶器（皿、壺、鉢、甕、瓶、水注、蓋、鉢金、土管、瓦）、窯道具、窯壁、磁器	幕末～明治にかけて日常雜器（陶器）を生産した窯		
郷主内遺跡	集落跡 館跡	古墳前期 古代 中世	埋納遺構1、井戸跡8、溝跡63、土壙15	土師器、中世陶器、密教法具（独钴杵、五钴杵など）、曲物	中世の密教法具が一括出土		
一本柳遺跡 小沼遺跡	集落跡	古代	土壙16、溝跡10、小溝状遺構4、珪群状の高まり5、井戸跡1	土師器、須恵器、瓦、石製品、木製品			
		中世	溝跡5	中世陶器（常滑）			
淀遺跡	集落跡	旧石器（後期）、古墳、古代	古墳跡1、溝跡17、堅穴住居跡31、掘立柱建物跡8、井戸跡1	旧石器、土師器、須恵器	古代の大規模な集落跡		

宮城県文化財調査報告書第187集

名生館遺跡ほか

平成13年3月25日印刷

平成13年3月30日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町3丁目8番1号
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
